第二巻・第三巻分（安政元年～五年）

五二九　吉書　安政元年正月十一日

一神社仏閣修造興行事、
一可専勧農事、
一可徴納国々年貢事、
右任三箇条之旨可有沙汰之状如件、
（安政元年）
嘉永七年正月十一日　　齊彬御判

〔参考　包紙ウハ書〕
五拾九番　　白木十番箱
齊彬公御吉書壱通

右嘉永七年寅正月十一日、駿河殿より毎之通可納置旨大島休左衛門致承知、白木御文書拾番箱江納置之候事、
〔東大史料編纂所所蔵、他に薩藩旧記雑録所収〕

五三〇　幕府へ届（米船琉球へ渡来の件）正月十九日

私領内琉球国之内那覇江、北亜米利加船三艘来着之段ハ、先達て御届申上候通ニて、三艘之内二艘ハ、追々致出帆候、然処去年十二月十四日、異国船二艘来着卸碇候ニ付、役々差越、来着之次第相尋候処、唐人乗合、北亜米利加船ニて、一艘ハ人数三百人乗組、壱艘ハ五十五人乗組ニて、十二月朔日、廣東省之内香港より出帆いたし来着、左候て外ニ火輪船四艘・兵船二艘・石炭積船一艘、当月末来月初旬琉球江来着、三十日程滞船ニて、江戸江可相渡段申出候、同二十三日、異国船三艘同所江来着卸碇候ニ付、前条同断相尋候処、三艘とも唐人乗合同国火輪船ニて、二艘ハ、去年琉球又ハ江戸江致渡海候提督等乗船ニて、二艘ハ人数三百人乗組、壱艘ハ三百五十人乗組ニて、十二月十七日、廣東省之内香港出帆来着いたし、且又外ニ同国船三艘追々琉球へ渡来ニて、八艘程彼地より出帆、外ニ一艘ハ上海より出帆ニて、都合九艘近々江戸江可相渡旨申出候、同二十二日、異国船二艘同所江来着卸碇候ニ付、役々差越候得共、荒波、本船江難乗寄、折柄異人共上陸致候ニ付、相尋候処、アメリカ船之儀、漸手招を以相通し、追々食料等所望申出候ニ付、相支置、何も異変之儀無之候得共、数多之船ニて数日及滞船、旁掛念ニも有之ニ付、猶又取締り向等一涯厳重申付置候旨、此節琉球より以飛札申越候、就てハアメリカ人共当春日本

江可相渡との趣ハ、追々申出置候ニ付、船々相揃候上は、定て浦賀辺へ渡海いたし候儀相違有之間敷、何分不容易御時節ニ付、委細長崎奉行江申達候、此段早々及御届候、以上、

正月十九日　　松平薩摩守

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収〕

五三一　島津忠寛へ書翰　正月二十一日

芳翰忝致披見候、春寒之節愈御安寧珍重存候、御申越之趣、委細心得申候、何寄之菓子忝存候、大船其外御示之旨、不遠参府万々可申述候、今日発駕、飛脚差立ニ付、御報迄早々申入候、恐々謹言、

正月廿一日　　齊彬

淡路守殿

猶々、御自愛専一存候、大船之儀御尤ニ候得共、国持衆さへ未タ不残製造之様子無之間、御急き不被成共可然、委細参府之上御談し可申候、以上、

〔宮崎県立図書館所蔵〕

五三二　多紀元堅へ書翰　正月二十九日

極月二十九日之尊書致拝見候、愈御安康奉恐寿候、小子にも去る廿一日発足、道中無滞致通行候、俄之事にて大取込罷在候、道中に相成却て閑暇に相成申候、内藤之事御承知之由、何卒程能奉希候、

一小子早参府の儀、異船之事に付云々と御考之由恐入存候、何の訳か頓と不相分、心配に存候、異船之事に候ては、中々愚存申上候程之儀も無之、当惑之事に御座候、若々例之御儀、少々色めき候事にても御座候得は、難有儀に候、何分様子相分兼候間、少々にても御様子御さくり出来候はゝ、極内にて一刻も早く致承知度、此段奉希候、弥之義不相分候とも、様子早く御知らせ奉願候、

一魯人蝦夷地相望候義、実に不容易儀と奉存候、虚実如何に候哉、松前家来打殺され候やに承り候、様子伺度、弥々に候得は御国体に相響、残念至極之義と奉存候、異人之処置中々以て油断相成不申候、

一琉球へも此間亜船参り、近々江戸へ参候段申来候間、御届も申上候処に、昨今承候得は、浦賀江参候様子に承り申候、此度之御所置は実に一大事之御事と奉存候、魯船通之御返事にて可罷帰儀如何と奉存候、参府之頃迄には相済居候様祈居申候、様子御しらせ可被下候、先は用事可申上如斯御座候、大乱筆御仁免可被下候、

恐々謹言、

正月廿九日　筑後瀬高にて認む

薩摩守

樂眞院様

猶々、御自愛専一奉存候、以上、

今二月四日、下之關渡海、吉田へ着致候、以上、

〔順聖公年譜・照国公文書所収〕

五三三　砂揚場の呼称について家老達　正月

砂揚場之儀、向後調練場と相唱候様被
仰出候条、此旨組中支配中江不洩様可致通達候、

正月　駿河　新納駿河守是久家

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五三四　砲術館稽古精励について家老達　二月

御軍役御手当向之儀ニ付ては、
宰相様厚思召之訳被為在砲術館被召建、一統稽古方ニ
付ては、追々被　仰出趣候へは奉承知通ニ候、近年諸
所江異国船相見得、就中江戸・長崎江も致到来、従
公辺（衍カ）よりも分て御手当向被仰渡砌ニて、何分不穏時節
ニ付てハ、猶更年輩等ニ不拘、一統罷出致調練、一廉
之御用相勤候様可致出情（精）儀専要之事ニ候、尤年長ヶ候
者共ニも精々出席、年若之者共引勧稽古相励候様致教
諭、勤有之面々は勤場不差支様繰合可致出席候、右ニ
付ては　御発駕前訳て　御沙汰之趣も有之候付、御趣
意屹と行立候様、各々支配下江篤と可申諭事、

寅二月

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五三五　諸事集会等の件について家老達　二月

元服并初て之御目見・御役替等、又は隠居家督其外右
ニ類し候集会等、至極手軽ニ致集会、無用之集会等相
催間敷と之趣追々被　仰出、一統承知之通ニ候、然処
当時異国船致到来、御手当人数をも被差登不容易時節（御脱カ）
殊ニ　御留主中之儀ニも候間、一統質素節倹を心掛、
御軍役手当向等不行届候て不相成事候条、猶更無故集
会等相催候儀屹と有之間敷候、見聞をも掛置候付、若
不守之者も候ハヽ、屹と可及沙汰候、此旨向々江不洩
様可致通達候、

二月　筑後川上　石見市成　駿河新納　伊織樺山二男家

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五三六　虎壽丸縁組一件　二月～三月

〔表題の表題〕

〔朱書〕
嘉永七年寅二月
〔島津斉彬男、虎寿丸〕
若殿様江

近衛忠熙公御女子
信君様御縁組一巻

〔島津久宝首尾報告書〕

若殿様江

近衛右大臣様御女子
信君様御縁組被為整度被
思召上候付、此節伏見より上京いたし、御貰請之御使
者相勤候様、御国許ニて
御直承知仕候付、御使者勤方之御日柄、彼御方江及御
掛合申越候様、前以京都御留守居田尻次兵衛江申越置
候処、彼御方御用人迄掛合之上、二月十九日四時相勤
御差支無之段申来候旨、次兵衛より
御中途江申越候付、同十八日
御先ニ大坂出立、同夜致着伏、十九日朝六時伏見出立、
錦御屋敷江致着、次兵衛同伴ニて四時参
殿仕候処、竹之間江被差通、御近習足立要人致出会候
付、
〔近衛忠熙〕
右府様
〔近衛忠房〕
大納言様

信君様時候御見廻之御口上申述、手扣書相渡候処引入、
引続諸大夫中川讃岐守致出会候付、
虎壽丸様江
信君様御縁組御整被遊度被仰進候間、御目出度
御許容被成下候様程能致演説、別紙手扣書相渡候処、
近衛様達
御聴、明日御返答可被
仰出段、讃岐守申聞候、夫より外諸太夫・御用人多人
数致面会候付、夫々相応挨拶いたし、九時分御屋敷江
罷帰候、
一同廿日　御返答被
仰出候付、午刻後参
殿いたし候様、中川讃岐守より前日奉札到来付、御文
書差出候事、
一同廿日、御留守居差支、御留守居付役寄横田鹿一郎同
伴、九時過参
殿仕候処、竹之間ニて御酒・御吹物〔肴カ〕被下、諸大夫並御
用人出会挨拶有之、無程於

大御書院
御目見被仰付、御縁組之儀被応御願候段
御返答被
仰出、御手熨斗被下候付相下、自分進上之御太刀御備
付有之候付、再罷出
御目見相済候、左候て別段
御小書院江
右府様
大納言様御出、御近く被召寄、此節御縁組
之儀以御使者被仰進、不斜
御満足被
思召、幾久敷御目出度
御領掌被成候段、別て御懇ニ被仰聞候付、則伏見江罷
下、薩摩守江可申聞、乍恐至私別て難有仕合奉存候旨
申上、相下候処、御料理被下、御肴一台拝領被仰付候
付、諸太夫迄御礼申述、七時分罷帰候、
一同日、青侍増田庄司御使者ニて、紗綾三巻・真綿五把
拝領被仰付、且又讃岐守より書付相添、此節御土産品
献上付、為御会釈
右府様より色紙五枚白木箱入筆者目録相添
大納言様より八丈嶋二端拝領被仰付候付、御礼讃岐守
迄申越候事、
一拝領物為御礼参　殿仕筈候得共、
御返答之趣早々薩摩守江申聞度、今日伏見之様罷下候
付、其段申述、横田鹿一郎参　殿いたし候事、
一右御使者勤方付ては、前以諸太夫等得と申含被仰進筈
候得共、此節は分て差急
御参府之事候得は、迚も其通運兼候付、其段は御留守
居を以為致内談、右相済筋を以、御酒料として諸太夫
并御用人相中江金子五千疋被成下候処、別て難有奉存
候旨、御礼申出候事、
一同日伏見江罷下、右勤方之形行等都て
御直ニ申上、江戸
御方々様江問合書を以達
御聴候事、

〔島津久宝口達（扣）〕

扣

右府様
大納言様益御機嫌能被遊御座、恐悦御儀奉存候、然は

嫡男虎壽丸当六歳罷成候、依之
信君様御事、虎壽丸江御縁組被為整被下候様奉願候、
此段私を以申上候間、御目出度
御許容被成下候様、幾重ニも奉願候、以上、

使者
家老　嶋津豊後

二月十九日

〔宋書〕
料紙中奉書切紙美濃折かけ口達手扣と認

〔島津斉彬使者（島津久豊）口上書〕

右府様
大納言様
〔宋書〕
信君様江御同様　松平薩摩守

春寒之節御座候得共、愈御勇健被成御座、珍重御儀奉
存候、此節家老差登候付、時候御見舞申上候、

使者
嶋津豊後

二月十九日

〔宋書〕
料紙中奉書切紙美濃折かけ

〔島津久宝進上物目録〕

進上

御太刀　一腰
御馬　一疋
代白銀十両
以上

島津豊後
久寶

〔宋書〕
大納言様御方御同様中奉書二ツ折

〔島津斉彬進上物（覚書）〕

覚

右府様江

一鶴氈三枚
一源氏煙草一箱
一御肴料五百疋
以上

大納言様江

一鶴氈二枚
一源氏煙草一箱
一御肴料三百疋
以上

おほへ

信君様江

一ちりめん二端
白紅

一御肴料三百ひき
以上
〔朱書〕
右覚書三通、小奉書切紙相認、美濃折かけ覚と認、
右府様大納言様御方十九日進上、　信君様御方廿日ニ進上
仕候事、

〔近衛忠熙返答内意書〕
薩摩守様愈御勇健被成御座珍重思召候、然は御嫡男虎
壽丸様江
信君御方御縁組之儀被
仰進、不斜御満足被思召、幾久敷目出度被成御領掌候、
仍此段御返答被仰入候事、
二月

〔近衛忠熙・忠房返答書〕
松平薩摩守様江
御返答
弥御勇猛被成御座珍重思召候、然は今般御家来嶋津豐
後為御差登、依之時候為御見舞御使者被遣、御満足
思召候、

大納言殿より
右御同様御満足　思召候、
二月

〔近衛信君返答書〕
弥御安全被成御座珍重思召候、然は今般御家来嶋津豐
後為御差登、依之時候為御見舞御使者被遣、御満足
思召候、
二月

〔島津久宝書翰（国元家老衆宛）〕
若殿様江
近衛様御女子
信君様御縁組被為整度、御貰受之御使者拙者相勤候様、
御直ニ承知仕候付、大坂より御先ニ致上京、先月十九
日参
殿仕、諸太夫中川讃岐守江出会、
若殿様江
信君様御貰受被遊度、　御目出度
御許容被成下候様、御口上之趣相応申述、別紙手扣書

も差上置候処、翌廿日参
殿仕候様、中川より申来候付、罷上候処、
右府様
御目見被仰付、御縁組之儀被仰進、被応御願候段
御返答被仰出、尚又
御小書院江
右府様
大納言様
御出、御近く被召寄、　御縁組之儀御使者を以被仰進、
不斜御満足被思召、幾久敷目出度被成　御領掌候旨、
彼是御委敷
御沙汰も被為
在候付、御受申上、別紙御返答御書取も中川を以被成
御渡候間、則日伏見之様罷下、
大守様達
貴聞、同廿二日
大守様より為御礼、鮮鯛一折拙者御使者を以被進、諸
事御都合能相済候、右付ては自ラ表向御願立、其外御
手続も有之事候得共、未御内々之御事候間、其内大目
付以上并御側御用人・御側役・御使番・御記録奉行江
被相達置可然存候、先は御縁組被為済、幾久敷恐悦御
同意奉存候、此段御内用を以申越候、以上、
但別冊手続之書付為御見合差越候、
寅三月十九日　　嶋津豊後
川上筑後殿
嶋津石見殿
新納駿河殿
樺山伊織殿

〔参考　包紙ウハ書〕
六拾番
御縁組一巻壱冊并御問合書壱通

右　若殿様江　近衛様御女子信君様御縁組一件付、
豊後殿より爰許御家老衆江之御問合書等ニて、嘉永七
年寅四月十二日、筑後殿より上村休兵衛江被成御渡、
致帳留置候様致承知候付、写済之上白木御文書拾番箱
江納置候事、

〔東大史料編さん所所蔵、他に蘆藩旧記雑録所収〕

五三七　幕府へ届（琉球へ諸外国船渡来の件）　三月五日

月先達テ届申聞候通、去年十月二十六日亜船へ役々差越、来着之次第相尋候儀ニ付届、

私領琉球国之内那覇へ、去年十月六日北亜米咧幹船三艘来着、二艘ハ出帆、一艘ハ致滞船居候処、同十二月十四日ヨリ同二十六日迄、異国船七艘追々致来着候段ハ、先達テ御届申達候通ニテ、同二十六日二艘来着ノ亜船へ役々差越、来着ノ次第相尋候処、都テ唐人乗合、一艘ハ人数五十人乗組、一艘ハ人数二百人乗組、同月十七日廣東省ノ内香港出帆、致来着候旨申出、右八艘外ニ一艘可致渡来段申出候へ共、無其儀、左候テ是迄致滞留候亜人並唐人ハ都テ不帰、外ニ病人有之候ニ付、亜人十一人可卸置段申出候ニ付、右之通多人数長々致止宿候テハ、小国及難儀候間、一同列帰候様申聞候処、日本国へ相渡筈ニテ、病人ハ難列越、日本ヨリ帰帆之節一同可列帰段申募、残置候ニ付、無是非近方寺中明渡差置、取締厳重申付置候処、一人ハ致病死候、然ル処右八艘ノ内四艘ハ、当正月三日江戸へ可相渡段申出致出帆候、同六日提督年頭為祝儀、於城内国王へ致対面度旨申出候ニ付、幼年ニテ対面不相叶段申聞候処、致納得候、入城之儀種々及理解相断候へ共、聞済無之、応其意候処、提督並外両艘ノ船主・翻訳官・副将・参将・提督之嫡子、其外小官等都テ三十二人、冊封使礼式ノ処へ招入、役々致面会候処、国王ヲ初各官へ年首祝詞並安否等相尋、左候テ亜国金銀銅差出、度佳喇島金銀ニ繰替候様申出候ニ付、金銀融通ハ勿論、持合居候者無之、繰替不相調段申聞候へ共、不致納得、右金銀銅夫形差置本船へ乗帰、同十日三艘江戸へ差越候由ニテ、致出帆候ニ付、金銀等ハ以後来着ノ節、程能申断差返候様可致候、一艘ハ上海へ可相渡、是迄逗留唄人ノ妻並子供三人・唐人二人都合六人ハ、引取候様申来候由ニテ、船へ乗セ、唄人一人残居（置カ）、伝馬一艘残置、同十一日致出帆候、同日右同所へ異国船二艘卸碇候ニ付、役々差越、前条同様相尋候処、魯西亜国ノ船四艘、一同長崎ヨリ出帆、一艘ハ人数百五十人乗組、一船ハ三十人乗組、今二艘ハ近々可致来着、用事ハ無之旨申出候、同十三日右同所へ異国船一艘卸碇候ニ付、役々差越同様相尋候処、魯西亜国ノ船人数四百二十人乗組、長崎ヨリ出帆来着ノ旨申出候、同二十日右同所へ異国船一艘卸碇候ニ付、役々差越、是又同様相尋候処、魯西亜国火輪船人数三十人乗組、上海ヨリ出帆致来着候

旨申出候ニ付、取締向厳重申付置候処、同二十三日四艘共致出帆候、同月十七日右同所へ異国船一艘卸碇候ニ付、役々差越同断相尋候処、唐人乗合、暎咭唎国之商船、暎人二十九人内女二人、子供三人、唐人四百九十五人、内女九十五人乗組、廣東省香港ヨリ金山へ差越候洋中、不順ニテ致来着候旨申出候、左候テ暎人一人右之妻并男子一人上陸、荷物等卸置、是迄逗留之暎人差置候寺へ一緒ニ罷在候ニ付、役々差越子細相尋、逗留不致様断之書付差出候へ共、何分不申出ニ付（候脱カ）、無是非本船へ差越、乗頭へ、疲労之小国追々西洋之船々等数艘来着有、余多ノ所望物等有之、困窮相及、且暎国医師多年滞留有之候テモ診立（詮カ）候儀無之、是非列帰候様、精々（種々カ）申聞候へ共不致承引、同二十三日致出帆候、取締向猶又厳重申付置、追テ暎国船来着ノ節、為列帰候様可取計候、且又亜船前以卸置候石炭、外ニ又々積越差卸、都合九十二万三千五百斤程ニ相及、右之内本船へ積入、凡八十二万二千二百斤程相残候段、此節従琉球以飛船申越候旨、長崎奉行へ委細申達候由、国元家来共ヨリ申越候、此段及御届候、以上、

三月五日　　松平薩摩守

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収、他に徳川史料斉彬公（東大史料編纂所所蔵）〕

五三八　松平慶永へ書翰　三月十二日

一筆申上候、愈以御清安奉賀寿候、然は今朝内々伝聞いたし候へは、是非江戸へ可乗込旨申出候て、夫故出帆之摸（模）様不相分と承知いたし候、此義弥実事にて、万一此上押付られ、御聞済に相成候様にては、余り寛過候事にて、以之外之儀と奉存候、しかし内々伝聞之事故、閣老等へ可申述儀モ如何に候得ハ、何そ右辺御聞込も御座候哉、御内々尊慮伺度、余り心配に存候間、極内申上候、誠ニ一大事之時節到来、昼夜心配此事ニ存候、万々尊慮相伺度早々申上候、頓首、

三月十二日

〔昨夢紀事（日本史籍協会叢書）所収〕

五三九　三原經禮へ書翰　四月四日

書付致披見候、種子島之儀、松壽院我侭可致為之下嶋ト存申候、申遣候通リ海岸旁不容易時節ニ候間、色々考候得共、老婆色々被申候テモ、又面働ニ候間、打捨置候方ト存申候、

一○産物方之儀モ追々申遣候通リ、此節ヨキ改正之時節到

来ト存候、利益之習風ヲ捨、道理ニ相叶候評議専一ニ存申候、下町海岸通リ土手等之考モ御座候、一郎(野元)罷下リ委細可申遣候、町方地所余程減シ候得共、無用之人物少ク相成、却テ可宜ト存候間、代地不遣候テ不相成分ハ其通リニテ、其外ハ代金ニテ遣候ハヽ、城下之人少ク相成、田舎人少之処ニモ宜敷意味モ有之候間、宜敷勘考可致候、城下繁昌ニテ無用之人物多候得ハ、田舎人少ニ相成ハ古今例モ有之候間、能々心得可申候、

一○城下之町人共少々富有之者ハ、他国ヨリハ大造ニ庭等モ拵候テ、家作モ其通ニ候間、今度地所モ減少ニ相成候間、大家之者共大造之家作・庭等市中ニ不取立様、申渡候方、可然ト存候事、

一鰯網其外船等之義ハ、委細心得申候、

一錫之義追々可相廻候、委細玄碩(重久)ヨリモ可申遣候、美濃江内々訳合有之、錫壱万斤其内遣候間、其分ハ何トナク其地へ取分置可申、表向ハ所望ニテ遣候処、内実ハ進物ニ候間、追テ可申遣候得共、心得迄申入置候、先年井上之事、此節取極メ相済候訳ニテ御座候、是ハ極内申遣候、

其外申遣候儀ハ後便可申入候、○印附候分ハ、(新納久仰、)駿河へ(家老)モ申候様可致候、

一木綿上納残之事モ、無拠分上納尤ニ候、シカシ兼テ承候得ハ、無理ニ田舎等へ押付申請為致置候分多キ由御座候間、夫ヲ上納ハ実ハ不得心ニ存候間、利益ニ不拘、道理ヲ以テ取計専一ニ存申候、

一又々魯船モ参候由、豆州下田之処置散々成始末、最早御国威ハ失果申候、委細後便可申遣候、以上、

四月四日

嘉永七甲寅四月四日付之

御書

仝月廿五日相届拝見仕候

三原藤五郎義禮

本実名經禮

当寅五拾歳

〔斉彬公書翰集所収(鹿児島県立図書館)ならびに東大史料編纂所所蔵〕

五四〇　新納久仰へ書翰　四月四日

〃　用事

嘉永七年寅四月四日之御書、同月廿五日中急キ到着、山田氏添書を以、仙波氏より受取、尤当務被仰付、初て頂戴候也、

一筆申達候、愈無事珍重存候、扨壮右衛門迄申越候条々も心得申候、申遣候とおり調練等之儀、事をいそき、跡もとりニ相成候ては不宜候間、能々勘考之上可取計候、

一下町出火ニ付ては、新役之上一人ニて、別て心配之事と存候、万事無手抜可取計候、

一産物之義、薬種類多分之焼失、人命ニも相掛り、歎ヶしき事ニ存候、少しも早く琉地在合之品取寄、備置候様可致候、産物方焼失、貨物損失之儀、歎ヶ敷事は勿論ニ候得とも、反布類余り過分ニて抜荷之憂有之処、此節之処ニて先其憂は無之、以後琉地より渡来候とも、新規ニ相成候姿ゆへ、此節反布等之取扱、万端ニ尽吟味、改正有之度時節到来と存候間、以後罪人不出来様趣法立直候様可致候、

一産物方場所之儀も、以町便申遣候とをり築地可然、役所近ニ品物格護相成候へは、第一取締ニ宜敷、火災之憂も少く候間、此度は仕来りニ不泥、後来公私共宜敷様、趣法相立候様可致候、

一一体長崎商法之儀は、琉国救助之為ニて候間、利益之分は不残遣候て可然道理之処ニ、旧来之仕来ニて産物方利潤莫大之事ニて、琉球之救は表通り計り之姿ニて、実は　公辺江之願立とは相違之事ニて、近年之仕来りとは乍申、自分ニは歎ヶ敷存居候処、此節之義到来も全く天災之事と存候、以後之処は追々吟味之上、利潤不残ニも不及候得共、三分一ツヽは琉国江遣候様ニも致候ハヽ、加様之天災も有間敷道理ニ候間、此節吟味為致度候得とも、高輪其外急ニ申談も難調意味も御座候間、時節見合可申出と存候間、極内考之程申入置候条、其方存付も候ハヽ、考之程申遣候様存し申候、

一此節産物方用向多くと申図ニて、東郷勇助江増掛申付候間、篤と為致吟味、宜敷可取計候、

一産物方是迄之勘定不宜候間、初発より致候様市助江相達置候、追々出来可申と存候、此度焼失ニ付ては、初発より之勘定は前文通ニて、当年より改正之上、以来年々外向同様、勘定座勘定厳重ニ有之方取締ニ可宜と存候間、今日便申遣候様申付候条、是また吟味之上宜敷可取計候、

一木綿織屋之義も、此節引取申付候、右は不用之反物押付ヶ申請為致、其外末々及迷惑候よし、且鳥目之儀も木綿織屋上納等ニて、不通融之訳も兼々承趣も有之、

引取申付候間、町人共之内江道具類等申請させ、国用不差支様可申付候、且未納之分、表より及掛合候通り、大粧之分は上納との吟味ニ候得共、実は不得心ニ候間、成丈ケは被下切ニて上納為致、可然分を上納為致候処ニて、趣法方江も可申達候、趣法方は道理より利益を先と致候習風ゆへ、其心得第一ニ存候、尤被下切ニては多分之損失と存候得共、士商之格式相立候様ニとの趣意ニ候間、能々心得取計候様可致候、

右之外申入候義は、野元一郎便より可申越候、以上、

四月四日

山田弁右衛門

駿河様

〔参考　山田為正書翰（新納久仰宛）〕

〆　嘉永七年寅四月廿五日到着

〔朱書〕「四月四日御書入」

駿河様　　山

御内用

御直書　一封

右之通被遣之候間、私より御内々御廻し申上候様被　仰付候、尤細々被仰遣度被思召上候得共、色々と御用多候て、何分御認取被遊兼候間、御用透之節々御認置被遊候て、追て可被遣候間、其段私より申上越候様被仰付候、且亦御内々之御事故、仙波市左衛門迄御内用計ニて差上候間、左様御承知可被下候、以上、

四月四日　　山田弁右衛門

駿河様

〔斉彬公久光公御自筆写等　新納氏蔵〕所収（東大史料編纂所蔵）

五四一　徳川慶恕へ書翰　四月十一日

一別紙申上候、此程閣老へ御逢之儀　御都合如何ニ御座候ヤ、御内々伺度、且下田之様子承候処、誠ニ言語ニ難述横行イタシ候趣、残念至極奉存候、其外佐久間之儀モ達

〔御聴ニ島津家書簡集〕

御聞候ト奉存候、長々滞船之内ニは、不意之災害到来仕リ、罪人モ多、御国体モ損シ、且は人気モ自然ト衰へ可申候間、過去之儀は致方無之候へ共、以来下田御取締は勿論、海岸万事之御手当之儀、格別厳重之被仰出無之候ては、年々ニ災害到来無疑、其内ニは色々浮説等モ起リ、不容易御時節ト奉存候、私共如何程ニ存候てモ難及儀、何卒御勘考之上、天下万全之御良策偏ニ相願申候、比度之　炎上モ実ニ恐入候次第、外はトモカクモ

御所向は何卒過当之御節倹等無之様ニ仕度、第一ニ一

同之気請ニモ相掛リ申候、此節万端御改正無之、従来之習風一変不仕候ては、甚タ無覚束御時節ト奉存候、色々考候程心痛弥増候て致方モ無之候、小石川ト万事御和熟ニて、十分ニ御建議無御座候ては、不相済御時節ト奉存上候、其内参上万々相伺候へ共、此段申上候、別て乱筆宜敷御覧奉願上候、以上、

卯月十一日

猶々申上候、当時之両勘定奉行伊勢腹心之モノニて、此両人不心得ニて色々申立候故、万端六ケシキ様ニ世評モ御座候、御内々御糺シ有之候ハヽ、相分申候、去ル人之申候ニは、両勘取除ケ不申ウチハ、御良策ハ不被行段承リ申候、極内々奉申上候、以上、

〔薩藩史料斉彬公（東大史料編纂所所蔵）ならびに島津家書翰集（日本史籍協会叢書）所収〕

五四二　徳川齊昭へ書翰　四月十二日

尊書難有奉拝見候、益御機嫌能被遊御座、恐悦奉存候、然は時候為御尋見事之御肴拝領被仰付、難有奉存候、右御礼奉申上度如斯御座候、恐惶頓首、

四月十二日

猶々、乍恐時気被遊御自愛候様奉存候、且此煙豚並ニ塩豚致進上候、宜敷御披露奉希候、以上、

〔照国公文書・順聖公年譜稿（東大史料編纂所所蔵）所収、他に薩藩史料斉彬公・島津家書翰集所収〕

五四三　黒田齊溥へ書翰　四月十二日

一筆申上候、愈御清安奉賀寿候、扨一昨日之飛脚ニ申上落候間申上候、此更紗初て拵候間致進入候、且此手紙少しも早く伊達江遣度存候へ共、両三日跡急便外用ニて出し間もなく候て、少々不都合ゆへ奉願度候、京都之事等色々掛合候事ニ御座候、当月中ニ江戸江参候様相願申候、頓首、

四月十二日

美濃様　　薩摩

〔宇和島伊達事務所所蔵史料・島津家書翰集所収〕

五四四　徳川慶恕へ書翰　四月十三日

又々、一書呈上仕候、益御機嫌能被遊御座、恐悦御儀奉存候、然ハ別紙御内々申上候、宜敷御勘考奉希候、先ハ早々申上候、恐惶頓首、

卯月十三日

〔照国公文書ならびに順聖公年譜稿（東大史料編纂所所蔵）所収、他に薩藩史料斉彬公・島津家書翰集所収〕

五四五　松平慶永へ書翰　四月十六日

封紙

春嶽賢兄閣下　　齊彬

拝

御密翰忝奉存候、愈以御清栄奉賀寿候、然ハ昨日ハ拝眉、御高論拝承仕忝奉存候、扨尾公之儀云々致承知候、昨日之事、帰宅後水府ヨリ医師使ニ参リ候テ承候へハ、御対顔御願之事ニテ候由、当中様（尾張中納言）ニモ余リ手強過候ト思召、老公ニモ訳ハ御存無之候へ共、余リ手強過候テハ却テ不宜候間、御意見可被仰進トノ趣、極内々承リ申候、大カタ今日ハ老公ヨリ尾へ被仰進候ヤト存申候、小子ヨリハ何モ不申聞、委細不存候へ共、老公御登営ニテ万事御委任ニ相成、御手厚ニ海防被仰出度トノ御趣意ト存候へ共、委細不存段申置候、今日右之段可申上ト存候処、不取敢申上候、右医師ハ湯川安道ニテ御座候、シカシ此儀ハ小石川へハ御内々相願申候、右医師参候モ、例之御縁辺之一条ニ御座候、老公ニモ弥御承知ニ相成申候、委細申上度儀モ御座候、イツレ拝眉ニテ申上度、十八日之朝之内御閑暇ニ御座候ハヽ、参上仕度、其外尾公之一条、又下田等之新聞モ申上度候間、此段相伺候、十八日ハ長州へ参候間、其前ニ参堂仕度奉存候、否明日迄被仰下候様奉願候、余ハ拝眉之上万々可申上候、頓首、

卯月十六日

猶々、御端書忝奉存候、御自愛専一奉存候、以上、

〔照国公文書所収、他に島津家書翰集（日本史籍協会叢書）・幽落史料斉彬公所収〕

五四六　徳川齊昭へ書翰　四月十六日

書添

書添申上候、龍土（伊達宗城）より廻候大砲雛形差上申候、御覧済龍土江御返可被下候、且小子方にて写し候分龍土江遣候間、同方より可差上候間、御写済小子方江御返却可被下候、

一先日拝借之調練之御密書、昨日返上と存候処、失念ニて今日差上申候、大取込早々申上候、以上、

卯月十六日

反射炉ニて初て鋳調ニ相成候ボンベ弾、昨日国より遣申候、先一安心大慶仕候、一昨春より取掛漸々初て鋳込相調大慶至極ゆへ御吹聴申上候、以上、

〔島津家書翰集所収（日本史籍協会叢書）〕

五四七　鈴木基行へ書翰　四月二十七日

書面之趣委細心得申候、近日中何とか手を付ヶ可申候、其方并幸衛事は、是迄通堅固ニ相心得居候様可申談候、〔山田〕壮右衛門よりも承候義も有之候、いつれ近日ニ急度申出も可致候、且又以後不宜風儀等も及見聞候ハヽ、無遠慮可申聞候、以上、

廿七日

〔参考　鈴木基行（喜之助）覚書〕

拝領被仰付候儀ニ付

覚書

覚書

齊彬公

御筆　壱通

右は嘉永七寅四月廿六日、習風之儀ニ付申上趣有之候処、翌廿七日於御休息所

御手自拝領被

仰付、誠ニ以難有冥加之至、家之重宝、子々孫々永鹿略有之間敷事、

〔安政元年〕嘉永七寅

四月廿八日　　鈴木喜之助

基行〔花押影〕

右は極御内々拝領被　仰付候間、御證文等も無之、尤奥御小姓御役被仰付、江戸御参府之節、上御屋敷ニおいて被仰付候事、

〔斉彬公書翰　鈴木基行宛ニ所収（東大史料編纂所所蔵）〕

五四八　島津久光へ書翰　四月二十九日

芳翰忝致披見候、愈御平安珍重存候、御紙面之趣忝存申候、当地先つ無事平穏に御座候、御報可申入如斯に御座候、恐々謹言、

四月廿九日　　薩摩守

周防殿

猶以、時気御自愛専一に存申候、以上、

別啓

別紙申入候、下田異船も追々箱館へ参り、一艘残居候趣に相聞え申候、応接之次第散々成事にて、内々承候へは、初発応対之節、交易并に人引移り、商館取建之

地所迄も可差免段迄相談に相成候由之処に、水老公御不承知にて、又々応答仕直しに相成、漸々交易年延、商館取建人移り之分は相止み、漂人御救且追て交易取結に相成候節は、下田・箱館に可相成、且石炭可被下、薪水も以洋銀可遣、且入津之節々下田之内七里廻り之分、勝手に歩行可為致と申談し相済候よし、林はしめ兼て西洋之儀大嫌にて、出立前之勢は十分に説破之心得之様子之処、其場に相成、雲泥之相違にて、筒井・川路之応接とは格外之相違之由、左候て当時は西洋之事を称美いたし、交易之外は無之と申居候趣に承り申候、此程筒老人も被参、承候へは同様之趣、残念之様子に相見得申候、此節に至り承候へは、下田にて余り異人我侭之よしに候故、取締之為、又々林家はしめ参候よしに承申候、最早皇国之御威光も無之、残念千万に存申候、水老公も被成方無之趣にて、御歎息之御書面被仰下候、左候て此節は御登城御断に相成申候、未た御返事は無之よし、全く勢州はしめ是迄油断之ゆへ、加様之有様に相成申候、老公御登城無之を、却て閣中にて悦ひ居候哉に被存申候、右に付此程中より、尾州殿是非老公へ御委託に相成、以来御国威振興相成候様、老中へ被仰聞候、尤少々被仰聞方御手強過と承申候、左候処に閣老之受不宜、被仰立損之様子に相成候、誠に可惜事に御座候、以後被仰立被行候処無覚束、左候へは弥御国威衰候基、任天命候外は有間敷存候、老公よりも徳川之天下十年とは難保と、余程御歎息之御様子に被仰下候、此上は臨機応変之外は無之、御引入にて閣老共之所置御覧之思召と被伺申候、老中にても以来御手当は心配被致候様子に候へ共、兎角に長評議に相成候様子、最早此節も退帆後は人気も相違候て、武器之売物も出候て、大砲鋳立等も何となく相止候姿に候間、以来十分に相調候儀千に一も無覚束、扨々可恐世上に相成申候、六七月は魯・亜共又々可参由に聞得申候、此様子にては、異人之存分に相成外有間敷と存候、猶追々可申入候、此分は駿河（新勢）へも御見せ可給候、

一参府早目之訳、只今に何事も無之候、例之御一条も未た有無之様子不相分候、誠につまらぬ世上に相成申候、右之通可恐世上に候間、成丈け不掛合引込居候心得に御座候へ共、老公はしめ有志之向より書通等多く、甚た掛念至極に存し居申候、余は後便万々可申入候、以上、

二十九日

猶々、弾正・安藝打つゝき之事、何とも驚入候、其上下町出火困り入申候、且また京地炎上、誠に恐入候事、右に付候ても有志之向、色々議論も有之候、猶追々可申入候、以上、

〔島津忠剛、今和泉領主、敬子（篤姫）実父、安政元年二月二十七日死去〕

〔照国公文書ならびに順聖公年譜稿所収、他に薩藩史料斉彬公（東大史料編纂所所蔵）〕

五四九　新納久仰へ書翰　四月二十九日

嘉永七年寅四月廿九日御書、五月廿一日中急ヶ到着、翌廿二日仙波氏より受取、頂載仕候也　新納駿河江

〃〔印影（緘）〕

一筆申入候、愈無事珍重ニ存候、然は異船之義は重富〔島津久光〕江細事申遣候間、同方より見せ可申候、誠ニ可歎光景ニ御座候、

一虎嘯丸抱守次左衛門交代も有之候間、今一人見立申度、此方ニて吟味も可為致候得共、意味も御座候間、先内分其方ニて篤と取調、両三人名前申遣候様可致、

一軍賦役之義も、内々両三人取調申遣候様可致候、

一其外豊後・武兵衛より及掛合候、

一其外追て可申入候、以上、

四月廿九日

〃〔印影（緘）〕

〔参考　山田為正書翰（新納久仰宛）〕

〃　山田壮右衛門

嘉永七年寅五月廿一日到着

〔朱書〕四月廿九日御書入

駿河様　御内用

御直書　一封

右之通御内々被成下候間差上越候、此段申上越候、以上、

四月廿九日　山田壮右衛門

駿河様

〔斉彬公久光公御自筆写等　新納氏蔵所収（東大史料編纂所所蔵）〕

五五〇　下田・箱館開港の件に関する幕令について家老達　四月

今度渡来之亜米利翰船内海退帆致シ候得共、右滞船中彼是自侭之所業等有之候ニ依リ、意外兵端ヲ開キ候モ難計候ニ付、夫々御固被仰出候得共、船軍之御備向モ

未タ御整ニ不相成折柄、無余義平穏之御所置被成置、彼方志願之内漂民撫恤并航海来往之砌、薪水・食料・石炭等船中闕乏之品々被下度と之儀、御聞届相成候処、場所御取極無之候得共（はカ）、何国之浦方へモ勝手ニ渡来、不取締ニ付、豆州下田湊・松前之箱館ニ於テ被下候積ニ候、当今不容易御時節ニ付、兼て被仰出モ有之候通、質素節倹ヲ相守、此上水陸之軍事一際相励、若非常之儀モ有之候は、速ニ本邦之御武威相立候様可相心掛候、

右之通早々可被相触候、

四月（九日）

右之通従　公義被　仰渡候条、不洩様可致通達者也、

四月　御家老座印

（石室秘稿中「安政元年甲寅藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵））

五五一　近衛忠煕へ書翰　五月九日

（封紙ウハ書）
「上」
（奥封ウハ書）
「上　御請　薩摩中将」

御内々尊書難有奉拝見候、不順之季候御座候得共、先以益御機嫌よく被為成、恐悦至極奉存候、然は此節炎上之次第委敷被仰下、誠に以恐入候次第、何とも難申上、種々御配慮被遊候御儀恐入奉存候、乍然御機嫌能被為入候由、此上之御儀恐悦奉存候、且また御殿には御無難にて、先々恐悦に奉存候、右に付、御懇之尊書被成下、恐入難有奉存候、全御忠志御仁恵之御余沢ゆへと奉存上候、右に付、兼て相願置候進献もの之儀、厚く御配慮被遊、御取計相成、万端都合も宜敷、内々達

上聞候段承知仕、冥加に相叶難有次第、御礼難尽申上恐入難有奉存候、殊に御局中へも御心附御座候よし、得浄院より細々相伺、無残処御儀重畳難有次第奉存上候、御楽器之事も奉畏候、心寄も御座候まゝ後便に申上候様可仕候、扨又表向献上之儀も被仰下、是又難有奉存候、先年例も御座候段、京留守居より申遣候間、諸大夫迄御内々相伺候様、今度申遣候間、何分宜敷様奉願上候、

一阿部伊勢上京之事は、いつ比と申義は相知不申、御成就之比かと奉存候、

一御造営の事、兎角寛政之御例と申事に御座候、右に付得浄院迄心附之儀申上候、犀州には殊之外皇国之御為を存し候て、炎上に付ても老中江厳敷被申談、少々不都合の程に被申候よしにて、十分精忠之志

も御座候間、御勘考被為在候はゝ可然と奉存候、乍然未た壮年之事故、一図に存込候儀も御座候、極密此段奉申上候、

一異船之事に付、阿部・牧野も一往引入に相成候処、厚き御沙汰候て出勤に相成申候、異船も又々近々可参様子に承候、右に付てもとかく老中取計十分に無之世評有之、尾州等御不得心之様子にて、扨々恐入候光景に御座候、

一例之御一条も重々の御物入故に候哉、善悪之様子更に不相分心配仕候、今少し不仕候ては、承候も如何と差扣罷在候、且又水戸之方は、漸々申込み御承知に相成、御世話可被遊段御返事も有之、既に先月二十八日には、伊勢守江当中納言殿より軽く御尋も有之処、種々御物入も打続、未た左様之評議処に無之と申候よしに御座候間、長引可申哉と奉存候、其内様子次第には、極御内々尾州殿江、乍恐

御直書にて仰御座候様に相願度、勿論未た時節早御座候間、猶また申上候様可仕候、此義も実は水戸老公之御考にて、右通　御書にて不申参前尾州江篤と申込置候上、　御書被遣候はゝ、両卿より是非御再縁可然、天下之為に候旨、伊勢守江御沙汰被成、老公よりは直書にて、伊勢守江両卿被申候通、天下之為に候間、早々取計可然旨可申達との事、極内々此節申参候間、先此段申上置候、且又其比に相成候はゝ、今一度歌橋江（徳川家定乳母）も被仰下候様相願度奉存候、夫にて否相分可申と奉存候、

一大納言様御縁辺之儀も、成瀬は在国ゆへ竹腰江委細之御趣意申達候処、委細奉承知候、一体せん姫之義、愼（徳川家慶）徳院様御在世に候へは、無拠思召も御座候間、直に御断申上候得共、当時は御模様も相変、殊に關東似合之先柄も無御座候上、厚き　尊慮之事故、中納言殿江も申達候上、篤と評議にて、此節は否之御請可申上との事に御座候間、先此段奉申上候、

右は先便之御請御礼且要用奉申上度、早々如斯に御座候、誠恐誠惶謹言、

五月九日　　薩摩中将

謹上

猶以、不同之季候、乍恐被遊

御厭候様奉存上候、以上、

〔陽明文庫所蔵、他に照国公文書・順聖公年譜・薩藩史料資彬公など所収〕

五五二　将軍代替ニ付誓詞一件　五月十日～二十九日

〔幕府老中達（島津斉彬宛）〕

（島津斉彬）
松平薩摩守

明朝六半時私宅江被相越、可有誓紙候、

一罰文迄調可有持参候事、

一宛所老中六人座並之通可被相認候事、

一判形ハ手前ニて被致、血判ハ此方ニて可被致候事、

五月十日

松平薩摩守江

〔西筑右衛門首尾報告書（家老島津久宝宛）〕

御書付一通

但明十一日六半時伊賀守様御宅江
大守様御出被遊
御誓詞候様と之儀ニ付

御老中
松平伊賀守様
御用人
波多與太夫

右より御達被成候儀御座候間、今日中壱人罷出候様、御用人中より之切紙致到来、罷出候処、右御書付御用人を以被成御渡候付、可申上旨申述置候御書付差上申候、

右之通今夕私相勤、此段申上候、以上、

寅五月十日　西筑右衛門

豊後様

追て申上候、御書付之趣大守様被遊　御承知候上、表方以御使者御請可被仰達儀と奉存候、且又　御誓詞之御書付等、明暁七時迄半田嘉藤次方江被相下候様被仰渡度奉存候、猶又明日御同席様ニは殿誰様御誓紙御座候哉、私心得迄ニ相尋申候処、松平内藏頭様・伊達遠江守様之由、右御用人より承申候間、為御見合此段も申上候、以上、

〔幕府大目付達（島津斉彬宛）〕

追啓、誓詞宛所阿部伊勢守殿初内藤紀伊守殿迄可被相返候、以上、

明十一日於松平伊賀守殿宅、

御代替誓詞有之候間、朝六半時不遅様御出席可有之候、若御断之儀も出来候ハヽ、伊賀守殿江御届之儀は勿論、自分儀出席候間、其趣早々可被申聞候、尤当朝俄御断

候ハヽ、自分方江も伊賀守殿宅迄可被申聞候、右之趣被得其意、廻状早々順達、従留可被相返候、以上、

五月十日　柳生播磨守（大目付・久包）

松平薩摩守殿
松平内蔵頭殿
右留守居

〔島津斉彬起請文（幕府老中宛）〕

起請文前書

一奉対
公方様忠勤之志専一奉存知、不可有表裡事、
一御一門方・公家衆并親類縁者其外、挟野心族於有之は、早速可致言上候、勿論一味同心仕間敷事、
一就于
御代替、弥重
公義御仕置等疎略不奉存可相守候、付琉球之儀背仕置雖企邪儀候、荷担仕間鋪事、

右条々於致違背は、

梵天帝釋四大天王惣而日本国中六十余州大小神祇殊伊豆箱根両所権現三島大明神八幡大菩薩天満大自在天神部類眷属神罰冥罰各可罷蒙者也、仍起請文如件、

嘉永七年五月十一日　松平薩摩守判

阿部伊勢守殿
牧野備前守殿
松平和泉守殿
松平伊賀守殿
久世大和守殿
内藤紀伊守殿

〔家老島津久宝書翰（国元家老宛）〕

去年就
御代替
大守様御誓詞御伺之儀、先月十一日御用番内藤紀伊守様江被差出置候処、去ル拾日松平伊賀守様より御留守居被召呼、明朝六半時被相越可有誓詞旨、別紙之通被仰渡、則日表方御使者を以御請被仰上、
御誓詞前書等御先例を以認方被仰付、前以御書判被成置、翌十一日伊賀守様御方江御出、御誓詞之儀は御刻限前以御留守居持参、御用人江相渡置、御誓詞無御滞

被為済、被遊御退去候、

一御誓詞御宛所御老中様御六人御座并之通御認方有之候処、御掛大御目付衆御名前、御先例ニて御連名之次ニ一字相下、柳生播磨守殿御名前認込相成候、

一御誓詞案文弐通之内壱通は御老中様江、壱通は大御目付柳生播磨守殿江差出候、

一御用心之

御誓詞は御留守居持帰差出候付、御右筆江相渡候、

一御誓紙被為済候付、伊賀守様江御挨拶、且紀伊守様江御案内之御使者、御留守居相勤候、

右之通無御滞被為済候付、此段申越候条可承向江可被申聞置候、

別紙御書付并

御誓詞案文・御留守居首尾書等九通相添差越候、以上、

寅五月廿九日　　嶋津豊後

川上筑後殿

嶋津石見殿

新納駿河殿

樺山伊織殿

〔参考　包紙ウハ書〕　白木十番箱

六拾弐番

御代替ニ付　大守様御誓詞前書御案文壱通、

右ニ付、柳生播磨守様より之御書付壱通、松平伊賀守様より被成御渡候御書付壱通、御留守居首尾書壱通、江戸詰御家老衆より之御問合書等壱通、合五通、

右嘉永七年寅六月晦日、筑後殿より小森新之丞江被成御渡、御記録所江格護被仰付候旨致承知、白木御文書拾番箱江納置候事、

〔東大史料編纂所所蔵、他に蘆溝旧記雑録所収〕

五五三　島津久光へ書翰　五月二十九日

一筆申入候、其後愈御平安珍重存候、此地相替儀無之候、然は異船之様子、箱館・下田共先可也に相済候哉に聞得申候、応接人之以心得、最早交易も開け候哉に聞得申候、先両三年戦争之掛念は有間敷、異人益我侭之振舞可有之掛念計に候、琉球も是迄日本服従内々に候得共、此節之場合にては夫にては相済間敷との事、（阿部正弘）辰より相談も有之候、いつれ今少し治定相成候はゝ、誰そ差下し委細可申入、且琉江も細事申遣し、篤と治定無之候ては相済間敷存候、此上は琉にても商道開け

候より外御座有間敷と存申候、偖例之義も異人之儀炎上旁何分難分、辰之口にても当時何分返答難致、少々折合候上の事と此間も被申候、三次郎（篤姫の弟）母子案んし可申と存候間、内密御伝可給候、何分善悪相知兼申候、一異人下田之様子、七里方勝手に歩行いたし、品物も自由に取替も有之よし、此間内々人遣候処、誰にても金銀と取替出来候段、見届け罷帰申候、其通故琉地は猶更之事と存申候、武備何分御手薄之様子に御座候、委細は後日可申入候、恐々謹言、

五月二十九日　　薩摩守

周防殿

猶々、御自愛専一奉存候、海國圖志之内亜国之分出板に相成候間、煙草入相添致進上候、取込早々申入候、以上、

〔照国公文書ならびに順聖公年譜稿、他に島津家書翰集所収〕

五五四　江夏直義へ書翰　五月二十九日

〔印影（緘）〕　〔印影（緘）〕　〔印影（緘）〕

〆　返事　　江夏

卯月廿七日之書面相達候、愈平安珍重ニ存候、申遣候趣、左ニ申入候、

一鉄葉板之儀、至極宜敷出来候、此以前鋳製方ニテ製造之品ト同様ニハ候得共、其節ハ余程手間相掛リ候ヨシ、此節之儀ハ左程手間モ不相掛候哉、何分宜敷出来申候、仕掛次第ニテ余分ニ製造モ相調可申哉、如何承度候、当時ハ江戸江殊之外沢山有之候得共、以来之タメ、委ク吟味イタシ置度候、

一劔銃之義、尤ニ存候、イツレ手ヲ付ケ可申候得共、掛テ之事故ニ十分ニ行届、如何ト存候間、近々近江出立之節、直ニ委敷申含メ遣候様可致候、

一炭素鉄之儀、至極宜敷御座候、当時江戸之様子承リ合セ居候、其様子次第ニテ工夫可致候、

一牡丹之間之事、尤至極ニ存候、此義ハ此節之事ニハ無之、去ル子年（嘉永五年）作事方ヨリ申出候ハ、一体牡丹之間上之引キモノ等、雑木有之候テ、毎年堂クツシ多ク生シ、留守之度毎ニ手ヲ入レ置事ノヨシ、然ルニ追々手広ニ相成、中ニハ危キ木柄モ有之候ニ付、去ル戌年（嘉永三年）宰相様御発駕前、トテモ往年只今迄ニテハ、年々之手入、殊

ニ追々座之間之方江広カリ候様子、万一大破ニ相成候テハ、莫大之入用相掛リ候間、堂クツシ之本ハ四季之間之辺第一ニ候間、当御留守中カ、来年総体御建直シニ相成候様、無左候テハ、年々床下・天井上之御手入モ多、殊ニ万一追々御書院之方迄広カリ候テハ、不相成トノ趣申上候処、今二三年ハ可也ニ御手入イタシ置候様ニトノ事ニテ、当年迄御手入ニテ相済候得共、益広カリ候様子ニ候間、此度之御留守ニ不残木品取カヘ建直シ度トノ申出候へ共、家督間モナキ事、其上先両三年之処ハ、格別危ク無之候ハヽ、手入レニテ済セ候様申付、其節モ天井内等モ改サセ候処、危キ程ニハ無之、留守之内手入サヘ致候ヘハ、四五年ハ可宜トノ事ニテ、其節モ天井ヨリ堂クツシノフン丹荷二ツ程モ取出シ、左候テ一番甚タ敷四季之間床之脇一畳半之小座ニ候間、其分取除サセ、且鈴口脇池水気多ク、虫付多ク候間、池モ埋サセ置、子年留守中モ畳等上ケ、床下色々手ヲ入レ申タル事ニテ、未タ四五年ハ可也ニ取ツクロヒ置候筈ニ御座候、シカシトテモ永ク差置候テハ、追々広カリ候様子モ差見得候間、無拠節ニ至リ候ハヽ、建置(直カ)ノ外ハ無之ト存候、一体是迄イツ方之普請ニテモ、ソレト申候得ハ、夫ヨリ山方木伐出シ、俄ニ取出シ候間、木枯不宜処ヨリ別テ虫モ早ク付可申、江戸等ニテモ長ク囲置候程宜敷趣兼テ承候ニ付、(三原)藤五郎江右之趣申聞置、諸所之山ニタヲレ木其外ヲ追々取集メ、カラシ置候様、左候得ハ何時取立候トモ、木モヨクカレ、殊ニ別段サワキ立、山奉行等心配ニモ不及候間、只今ヨリソロ〳〵ト其心掛候テ集置候ハヽ、可然申付候故追々取集メ候事ト存候、右通リ木品水気抜ケ居候得ハ、永年之保チモ宜敷訳ニ候、公辺等御普請、此節伐出シ候材木壱本モ御用ヒ無之、御囲之分ニて相済、此節之分ハ跡之補ヒニ相成候トノ事、夫故木之品水気抜候間、虫付之発モ薄キヨシ、既ニ御本丸御普請之節、大広間御上段辺之材木ハ、元禄年中ヨリ之御囲之木出候ヨシニ御座候、夫故此度集メ候モ全ク其訳ニテ、何モ此節急ニ建直シ可申訳ニテ取集メ候儀ニハ無之候、且マタ此節江戸材木囲方等之事モ追々取シラベ、先便藤五郎迄申遣置候事ニ御座候、一体国元ニテ右様囲置等無之、集メ候テ直ニ取付候習風故、右様申フラシ候モ尤之事ニ候得共、遠慮無之故、且ハ他国之様子不存、当座之事計リ目ヲ付候故ト存候、追々囲置之趣意相分リ、急

速建直シ無之候ハヽ、其時相分リ可申ト申遣候処、一々尤ニ存候間、事実委曲申入候間、其心得ニテ人々申候ハヽ、程能挨拶専一ニ存候、筑地（築）之前ニ材木囲之堀モ追々取建之考ニ御座候、江戸木場辺ニテ、三年位ハ是非水ニ漬不置候テハ木品不宜、殊ニトガ材木等ハ、水ニ永不入置候テハ、直ニ木ニシミ入候ヨシ、夫故先年切出シ候久摩山辺之木モ、シミ入ニ相成候事ト存申候、

一白紙之秘文、是又心得申候、追々考置可申候、

一反射炉炭等之義、良節（上村）江委細申遣候、最早相達候ト存候、

一下田異人之事、何分我侭申立候ヨシ、来三月万事規定トノ事ナカラ、是非此節交易致度、手強ニ申立候ヨシ、内風説ニハ、異人之存意通リニ可相成光景ト申事ニテ候、誠ニ可歎世上、御国威ハ露程モ無之様子、武備モ何分依然之様子、何分難解御所置多有之候、水公モ中々御手出シ不相成、辰閣壱人万事取計候様子ニ相見得申候、尾公モ此節ハ頓ト御閉口、実ニ末世之光景顕レ申候、公辺右之通リ故、諸家モ同様、豊・近等モ何壱ツ工夫モ無之哉、安気之様子ニ御座候、門出入其外余リ打捨置候間、無拠少々気ヲ付ケ申候処、先ツ此節ハ少々取締リイタシ候様子ニ御座候、百辛・鈴喜之事云々、是又先達テ奥向一統江申達候、夫ヨリ先少々ハ宜敷候得共、油断イタシ候ト、忽チ悪風吹起リ可申哉ニ被存申候、

一其地郷中之習風トカク不宜様ニ存候、郷中ニ学校取立度候得共、如何様之趣法可然ヤ工夫付兼申候間、工夫之上可申遣候、

先ハ返事迄早々申入候、此節聡徳院（斉宣六女、阿部正篤室）滞在中色々取込、早々申入候、以上、

五月廿九日〔印影（緘）〕

〔斉彬公御達及手翰所収（鹿児島県立図書館所蔵）、他に〕
〔斉彬公書翰集（東大史料編纂所・鹿児島県立図書館所蔵）〕

五五五　新納久仰へ書翰　五月二十九日

駿河江

嘉永七年寅六月廿四日
到着之飛脚便より頂載
いたし候事

〔印影（緘）〕

用事

〃　〔印影（緘）〕

〔山田〕
壮右衛門迄書面之趣、委細致承知候、愈無事珍重ニ存候、申越候条々委曲心得申候、此節は別て取込ニ付、細事不申入候、唐物取締之義、申遣候趣尤と存候、右ニ付、大坂江藤安吉次郎三月より罷登一往居付、加藤十兵衛其外引合候て、抜荷三十七箇程も持登候哉ニ、此節風と承り申候、右は未タ誰江も不申聞候、此方より申聞候ては、色々響合も有之、且大目付并ニ産物方不締ニも聞得申候間、其地ニて何となく心付き内々聞合候ても可然哉、尤菱刈は少々故障も可有之候間、其考ニて聞合可然と存候、未タ極内一方より承候間、弥とは難申候得共、先此段申遣候、従
公辺御手付候ては不宜候間、不取敢申遣候、猶外江も手を付置候間、追て可申遣候、

大坂荷問屋
　小濱や幸助
京同断
　伊賀や次郎兵衛
大坂新地銀主参会場
　住吉や治三郎
大坂居住之

千賀と申女子
右之分引合之様子候間、極内申入候、不事立様ニ取計専一と存候、
一琉球之事、辰より相談之義も有之候、追て委細可申遣候、
一近々下田表異船退帆之よし、弥退帆相成候て、大坂迄遣候人数之分、引取可申付と存申候、
一其外細事後便可申入候、以上、

五月廿九日

尚々、色々之事ニて頓と閑暇無之、乗馬も一度いたし候計りニ御座候、是よりは少々静と可相成と存申候、以上、

〔参考　山田為正書翰（新納久仰宛）〕

御直書
右被成下候との御事ニ御座候間、御内々差上越候、御請差上相成候ハヽ、御廻し可被成候、此段申上越候、以上、

五月廿九日　　山田壮右衛門

駿河様

〔斉彬公久光公御自筆写等　新納氏蔵所収（東大史料編纂所所蔵）〕

五五六　多紀元堅へ書翰　〔安政元年カ〕六月十四日

○この文書は、「鹿児島県史料　斉彬公史料」第一巻に第二六四号文書（嘉永六年六月十四日付島津斉彬書翰）として収めてあるが、誤りによりここに再収す。

一翰致拝呈候、暑中愈御安康奉賀候、然は十九日大膳差支無之との事ニ御座候、良元老・宗安老御掛合被成御差支無之候ハヽ、九ツ半過迄ニ御来駕可被下候、若同日御差合ニ候ハヽ、廿日後両日程伺度存候、且此品麁末ニ候得共、呈書之印迄致呈上候、取込乱筆御免可被下候、以上、

水無月十四日

猶々、御自愛専一奉存候、以上、

〔奥封ウハ書〕
〃
樂春院様　　薩州拝

〔包紙ウハ書〕
〃
樂春院様　　薩州拝

〔鹿児島市磯尚古集成館所蔵〕

五五七　伊達宗城へ書翰　〔安政元年カ〕六月廿五日

尚々、各何卒ノ〳〵程能成就候様祈ニ存候也、

極密申入候、此度内裏御造営ニ付、全体是迄御狭少之儀、火除地等も無之、御弘メニ成度御取調も内々在之候得共、当時之儀且大樹公格別ニ御案御申上、速ニ御造覚（営カ）在之候様沙汰在之候趣故、御弘メ之事抔申出ニ相成候ては、取調もひま取り候旁其儀ハ不被仰立候て、御元形通ト御治定御図面も出来、其御地江被仰入旨ニ候、右ニ付別紙之趣意ハ内々其筋江申入込、一両人役人之中ニ在之候、尤忠燾同心之卿ニて候、既ニ何方へ申込ニもと、申上相成候処、又々再按在之後ニ認候趣意ニ相成、是も尤之儀候得共、忠燾殿ニハ何共残念〳〵なる儀、右之通朝廷格別ニ詮立、御心付御手厚ク相成候ハヽ、当時尚更人心腹従候筋ニも可有之、外ニ存付も無之、右之趣意尾張中納言殿江以密書申入候、其御方よりも密々申入、何卒御勘考在之候様偏ニ希度、過日来夙夜心痛致候、遅ク相成候ては如何ト早々申入候、何分此儀成就、其御地より格別ニ御心付相成候ハヽ、実々公武之御繁栄存候、右荒乱書なから申入候、御推密偏ニ御頼申入候、早々内々申入候也、

六月廿五日

〔宇和島伊達事務所所蔵〕

五五八　下町出火の件に関して家老達　六月

此節下町出火ニ付、納屋町御春(脊)屋下岩城勇之助屋敷掛より若宮社泄涯迄小路相広め、且右社後通之儀、広小路出口迄八間掛ニ取広、筑(築)町之儀は加治木町通ニ相并候様、左候て平野屋井戸小路之儀も八間小路ニ、別紙絵図面朱引之通、都て御内用計を以広め方被仰付候条、此旨可承向々へ可相達候、

六月　駿河新納久仰

〔石室秘稿中「安政元年甲寅藩内布達類」所収〔国立国会図書館所蔵〕〕

〔参考〕

嘉永七年甲寅三月八日下町出火ニ付焼失品

一金七百弐拾壱両位　銭ニシテ五千百九拾壱貫弐百文
一銭百九拾壱貫文
一米千五百三拾壱石位　銭ニシテ壱万五千三百拾貫文
一大豆并小豆五百石位　銭ニシテ五百弐拾八貫文
一粟四拾壱石位　銭ニシテ百六拾七貫五百文
一麦類　銭ニシテ八拾六貫文
一菜種子百三拾俵　銭ニシテ三百九拾貫文
一砂糖類　同六千四百拾六貫文
一生酒并ムルミ　同六千貫文
一鍋釜　同四拾弐貫文
一油四千四百八拾盃　銭ニシテ六千百六拾八貫文
一油粕　同五百六拾六貫文
一酢并造入　同八拾貫文
一醤油三千盃　同九拾貫文
一焼酎并ムルミ　同壱万千百五拾文(貫脱カ)
一塩弐百八拾石位　同四百六拾貫文
一古手類　同六千三百五拾貫文
一呉服并太物小間物類　同壱万三千八百拾弐貫文
一木屋材木　同六千五百七拾三貫文
一焼物類　同千六百五拾四貫文
一生蠟六百八拾斤　同百五拾貫文
一煙草　同七百五拾弐貫文
一綿八拾八本　同千八百四拾八貫文
一尺莚并荒物類　同千八百貫文
一炭薪　同四拾八貫文
一草履下駄類　同七千貫文

一茶　同四百四拾壱貫文
一薬種類　同四千五百三拾弐貫文
一カン物モノ類　同弐千五拾六貫文
一鬢付蠟（燭）　同弐千百三拾六貫文
一昆布　同弐拾九貫文
一鰹節　同千六百八拾貫文
一枚（数カ）之子弐百俵　代六百貫文
一合羽并荏子油　同千三百拾貫文
一麦麺　同弐千九百六拾四貫文
一質屋貸品物　同弐百貫文
一錫地カネ　同千三百五拾貫文
一葛ノカネ　同四百五拾貫文
一銅板織帆織網金物　同三千五百貫文

右焼失
合銭拾壱万四千八百五拾九貫七百文

一名頭焼失家百四拾七軒　人体千三拾人
一借屋居住家八百四拾軒　人体三千三百六拾六人
一焼失公蔵弐拾八軒
一太神宮社　一大黒社

右焼失

一残家拾四軒
一同公蔵弐百弐拾三軒
一石燈（籠）廬通リヨリ下ノ方都テ残リ

右之通嘉永七寅三月八日夜五ツ時過ヨリ出火、翌九日暁七ツ半時分鎮火、産物方御蔵御焼失ニテ、翌九日五ツ時分モヘ上リ、翌々日十日漸鎮火ト承候事、既ニ三日ニ相掛リ公蔵ヘ追々火入候ト、如此之内ニモ、産物方蔵一ツニ八万両程御損失ト申事ニテ、御救米五百石ト奉申、

一羅紗五百九拾八本壱切ト四丈弐尺
一碑岐三百三拾八疋七丈七尺四寸
一烏毛緞百四拾五本　一烏毛紗拾本
一烏毛綸七本　一烏毛縮壱本
一八糸緞子壱本　一西洋布千百七拾六疋八丈七尺

右下会所内公蔵御格護品焼失

一産物方公蔵一軒　一同扱蔵一軒
一下会所公蔵一軒　一長崎作左衛門御借入公蔵一軒

右品々焼失

一産物方公蔵二軒　一日記所壱軒

右弐行焼失不仕

〔石室秘稿中「藩令及物価」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五五九　防火用地の買入等について家老達　六月

兵庫殿裏門脇広小路通り貸屋之儀、
御城下近方火用心念遣之場所柄ニ付、取除空地ニて召置候様　御沙汰被為　在、地面は御買入、取毀方入目料は被相下候旨被仰付候条、此旨可承向へも可相達候、

六月　駿河新納入仰

（石室秘稿中「安政元年甲寅藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵））

五六〇　幕府へ届（諸外国船琉球へ渡来の件）七月八日

私領琉球国之内八重山島江、去年八月廿三日、小振之異国船五人乗組ニて致漂着候ニ付、役々差越、本国来着之次第相尋候処、言語文字不相通、洋中風波ニ逢、修補用之材木并橋船所望之体、手招を以相通候ニ付、材木并具里船一艘相渡候処、修補相加、同九月八日、出帆致し候、当正月十日、同国之内鳥島沖江、異国船一艘相見得、致相乗居候異国人拾八人、橋船二艘より致上陸候ニ付、役々差越、前条同断相尋候処、言語文字不相通、茶水望之体、致手招候ニ付、相与へ候、然ル処、干潮相成、本船へ難乗帰、無是非浜辺へ橋船之帆を張、致宿候ニ付、食物相与へ候、左候て翌朝漕返り、無間も致出帆候、同三月四日、同国之内那覇江、異国船一艘卸碇候ニ付、同断相尋候処、当正月致来着候魯西亜火輪船にて、人数四拾人乗組、呂宋国致来着候旨申出、食物用水等任望相渡候処、亜米利加船日本江渡来之儀相探候様子ニ相見得、翌五日致出帆候、同八日、同所へ異国船一艘卸碇候ニ付、同断相尋候処、唐人乗合、亜墨利加国商船、亜人三拾人・唐人三百人・同女五拾人乗組、廣東出帆、金山へ渡海之序、亜国提督其外之官人江国元より差越候書翰持参、且食物用水等致所望度段申出、相渡候処、提督其外へ之書状ハ、当春卸置候亜人へ引渡、翌九日致出帆候、同四月廿二日、同国へ（所カ）異国船卸碇候ニ付、同断相尋候処、唐人乗合、亜墨利加国之船、人数四拾人、内唐人拾三人乗組、当正月江戸へ罷越、四月九日同所出帆来着、今三十日程ニて、亜国提督乗船等来着可有之、其内致滞船候旨申出、食物用水等任望相渡候、乗組水主之内沈酔之者一人橋船より落、溺死候、且又此節日本と和好を結ひ、馬頭を開候と申、歓喜之形容ニて、異人共日々上陸、逗留英人止宿之亜墨人互ニ往来、其外異変之儀無之候

得共、取締向猶又厳重申付置候、此節従琉球申越候に付、委細長崎奉行へ申達候由、国元家来共より申越候、此段及御届候、以上、

七月八日　松平薩摩守

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収〕

五六一　幕府へ届（英人が琉球へ残せる唐人の件）

七月八日

私領琉球国之内八重山島江、去々子年〔嘉永五年〕閏二月十九日、英吉利国船一艘来着、乗合之唐人三百八拾人英人一人卸置致出帆、且同国之船、三月十六日一艘、同十八日一艘来着、右唐人共儀、於洋中船主并水主打殺候由ニて、為捕方追々英人共上陸、唐人拾八人ハ熟談之上本船へ為乗付、五人ハ搦捕、二人ハ逃去候故、以鉄砲打殺、卸置候英人并搦捕候唐人、是又本船江為乗付出帆、同六月四日ニハ、亜墨利加船一艘来着、前条唐人之内五拾七人召捕、本船江列越候処、其外致散乱、容易難捕得候ニ付、重て渡来可相捕申置出帆候段ハ、先達て御届申達置候通御座候、然ル処右外残居候唐人追々死失等ニて、百七拾二人ニ相成、其後異船来着も無之候ニ付、成行唐国へ伺越、護送船二艘取仕立為乗付、去年九月廿九日、如唐国致出帆候段、此節琉球国より申越候ニ付、委細長崎奉行へ申達候由、国元家来共より申越候、此段及御届候、以上、

七月八日　松平薩摩守

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収〕

五六二　伊達宗城へ書翰　七月二十四日

花墨忝致拝見候、愈御清福奉賀寿候、然は被仰下候風説書之事、未タ入手不仕候、当時は海防掛江下り居、夫より老公江参り、其上ニて写ニ相成候て、両家四家并ニ小子方江相渡候事之由ニて、未タ日間取可申との事ニ御座候、辰より参候ハヽ、内々差上可申候得共、老公之方却て早くと奉存候、

一京地之義云々致承知候、極密承候へは、〔確太郎〕石河事承込候内、意味難解ヶ条有之候処、先日之書面ニて大きニ解候由、未タ何とも相分兼候得共、少々は取用ひニ可相成哉と承り申候、

一トルコ戦争中

神州充実之儀、誠ニ御尤ニ奉存候、風説書拝見之上は乍不及建白可仕哉と奉存候、

一京之御書写并ニ魯奴申候唐国之様子、并ニ魯は日本之

加勢可致哉と英人心配之義、誠ニ大略之書面ニ候得共、
申参候まゝ差上申候、
一蘭書等注文願之義も、先別紙之通ニ可申出考ニ御座候、
貴慮之品も御座候ハヽ、早々被仰下候様奉存候、先日
より取込万事延引、恐入奉存候、
一昨日予参、大暑ニて閉口仕候、先は要用已貴答迄、
（二十二日将軍家定増上寺へ参詣）
早々如斯御座候、頓首、

文月廿四日

猶々、御自愛専一ニ奉存候、以上、

齊彬

（宇和島伊達事務所所蔵）

（裏封ウハ書）
藍山賢公閣下

五六三　新納久仰へ書翰　七月二十五日

嘉永七年寅七月廿五日江戸被差出候
御書ニて、閏七月十二日着過、仙波
持参ニて頂戴

堀與左衛門便より之書面并壯右衛門迄申越候趣、致披
見候、残暑不同之節愈無異珍重存候、此方相替無之候、
與左衛門一条尤之事、豊後より申出候ハヽ、其通、若不
申出候ハヽ、以存寄手当申付候様可致候、扨琉球之一条、
甚々残念之事ニ候得共、先日以間便申遣候通、下田之
光景散々之仕合セゆへ、致方もなく、先々商館取立等
之儀不申出、幸ひ之事、兼て柔弱之琉球なれハヽ、
日本之御処置ニ競へ候得は、先々宜敷事と存候、但約
条書之内ニ一ヶ所取直度所有之候、右は百姓相対ニて
諸品買入之義を下田之通ニ致治定、於公館取次候様致
度事と存申候、此義は篤と評議之上、取計方琉地江申
遣可然、其外は何も存寄無之候、溺死之事も無余儀事、
しかし以来不法御座候ハヽ無事ニ取押、一言も無之様
証拠を爵へ、異人江掛合候様能々可申遣候、
一公辺江事実申出之義、是また尤至極ニ御座候、自ら其
通及取計候考ニ御座候、琉地は十年来先ツ可也ニ凌き、
日本は両度ニて御免之訳ゆへ、琉地之方十分宜敷訳ニ
候間、老中等決して否申候義は無之と存候、日本御免
ニ相成故と申処ゆへ、其処は安心可致、只々以来之処
軍艦海岸之手当第一と存申候、

一砲術調練も追々盛之よし、全く世話行届候故と大悦ニ存候、猶此上無由断可申付候、

一藤安（吉次郎）之儀、於此地も承候義有之候間、先日何となく下国之義申遣候、百文銭引替之儀は、留守居ニて取計候様申遣候間、其内下国と存申候、大坂町同心より町年寄薩摩屋仁兵衛江藤安身分聞合、内々有之との事も承り申候、先は六月廿八日之返事迄申入候、猶追々可申入候、以上、

約条文言取直之義は、表より委細可申遣候、今日は不遣候事、

一薬種売立之儀は、当時伺中ゆへ其内可申遣候、先ツ廿八日返事計申入候、跡は式日より可申遣候、以上、

七月十七日認置

〆（印影）
（奥封ウハ書カ）
六月廿八日之返事

〔参考　山田為正書翰（新納久仰宛）〕

壮右衛門

嘉永七年寅閏七月十二日暮過、仙波持参ニて相受取候事、

〆（印影（緘））

駿河様御内用

京地江御用筋有之、今日俄ニ飛脚被差立、右ニ付ては、同所より町便ヲ以、此

御一封早々差上越候様被仰付候間、例之通仙波市左衛門江御内用ヲ以差越候間、御請取御頂戴可被成候、

一先度六月廿八日其御地差立候飛脚、去ル十六日爰元江相達、同廿九日定式飛脚も去ル廿二日到着、

公私之御書難有拝見仕、其節々御内々御差上候御別封、其侭直様奉差上、御用向之御問合も奉入

御覧候処、其侭

御手元江御留置相成候間左様思召可被下候、右ニ付て之飛脚前別て御用多、且は御存慮通都て被仰立候ニ付ては、別て御恐怖御入念之御添書逐一承知仕、其段も程能申上候、少しも御不都合之御模様不被為在候間、已来迚も御懸念ニ不被為及と奉存候、

一先度堀與左衛門着、追々琉地之御模様直々相尋候様被仰付、尤表立之御届向之趣も

御直ニ奉承知、扨々色々之次第ニ御座候、各様方御はしめ

琉国諸役之衆は勿論、琉国一統嘸々御心配と奉恐察候、
上様こと案外御快然ニて、いつれ江戸之御所置ニ準し、色々と被申立候ハ勿論と之御沙汰ニて、尚亦御賢慮も可被為在、其段ハ御直ニ可被仰遣哉と奉恐察候、
一御多用中毎度私江之御懇状被成下難有奉存候、別て御用繁之御儀と深く厚く奉恐察候間、已来は品々御用筋而已御書添被下候様仕度、私義も飛脚前なとハ相応ニ取込候間、乍不本意今度被仰下候通、時候御伺等之文面ハ相省候様可仕候、
一爰元相替儀無之、別て静謐、何分気候冷気にて、四五日跡なとハ在合袷着用いたし熟睡も出来候程之事ニ御座候、
一黒木家奥方御不快之由ニて、今廿五日御賢息御出立ニ御座候、不遠御着候上、爰元之形行ハ御聞被成候半と奉存候、
先々此段申上越候、以上、

寅七月廿五日　　山田壮右衛門

駿河様

〔参考　山田為正書翰（新納久仰宛）〕

今日便よりハ、御一列様且は御側役衆等より之御左右啓も不被差越と奉存候間、書添乍不敬申上候、
大守様益御機嫌克、別て御鋭気ニ御用筋被聞召上、尤諸侯様方御初御旗本衆御入来御文通も日々御数多、且は御役々より申上ニ相成候御用向、少しも御労倦之御模様不被為在、恐悦無此上難有奉存候、日々右様之御模様奉見上候ては、何分暑気之時分なとハ恐入候て、伺事も扣目ニいたし候得は、却て奉損
御気色候様之御事、呉々も御同様難有義ニ御座候、就ては追々被仰上候御用筋は、少しも御掛念ニ不及と奉存候、宰相様御初
御惣容様御同様愈御機嫌克被為入、奉恐悦候、御安心之ため、此段書添なから奉申上候、以上、

七月廿五日　　山田壮右衛門

駿河様

〔「斉彬公久光公御自筆写等　新納氏蔵」所収（東大史料編纂所所蔵）〕

五六四　伊達宗城へ書翰　（安政元年カ）七月二十五日

書添申上候、昨日呈書之心得ニ候処、辰〔老中、阿部正弘〕より京之一条、其筋江内々被仰遣候様可申上との事申来候付て、急飛脚差立、労ニて色々手紙認メ候間、今日差上申候、其筋江云々との事故、少々は御広めニも可相成やと考申

候、

一琉球之一条、余り鳥渡認メ候間、落付兼候様思召候と存候得共、委敷事はいまだ不申参候、其内申参次第ニ可申上候、先々書添奉申上候、以上、

文月廿五日

〔奥封ウハ書〕
〃　書添

〔宇和島伊達事務所所蔵〕

五六五　伊達宗城へ書翰（安政元年カ）　七月二十五日

只今四ツ谷より申来候とて、京御築地広メ之儀、十分ニ不参候得共、二之方之通ニ可相成と、内々辰より尾江申上候段申来候、先々御趣意相立、大慶奉存候、京江も早速申上候事御座候、以上、

文月廿五日八時出ス

〔奥封ウハ書〕
〃　書添

〔宇和島伊達事務所所蔵〕

五六六　新納久仰へ書翰　七月二十九日

〃　〔印影（縞）〕新納江

嘉永七年寅七月廿九日之

御書、閏七月廿一日到着、頂戴

追々申越候書面之趣委細心得申候、残暑之節無事珍重候、当地先静謐之事ニ御座候、魯西亜も自国ニ戦争有之間、急ニ渡来は無之様子、只今之内ニ武備十分ニ被仰出時節と存申候、頃日水老公江御軍政御改正被仰出、井戸石見・筒井肥前守始御軍政掛被仰出候間、多分船軍等之御役向等も備可申と存候、其様子ニ依り候ては、此方も船手之役々出来不申候ては相成間敷存申候、内々考置候様可致候、

一守役之儀申遣致承知候、田中宜敷候得共、是は趣法方改正之心組之為ニ入置候間、先見合申度、其外申遣候面々之内、可然と存候者両三人御座候得共、いつれ篤と勘考之上ニ可致候、守役と申遣候得共、抱守之事ニ御座候て、中山より次席之ものニ候得は猶更宜敷存候間、猶又勘考可致候、〔安容、道士館助教、横山安武養父〕横山安之丞等は如何之人物ニ御座候や、勘考之上可申遣候、

一軍賦役之義は木脇可然、是は近々琉球之一条ニ付て、辰之口返事次第ニ安田可差下候間、其節於当地軍賦役申付候様可致候、

一海老原之事、此節は何も不承候、

一風俗之一条、至極尤之儀存候、早速書面ニて申付越度存候得共、此節之便少々弁兼候ニ付て、後便ニ致勘考、細事可申遣候、其方同役相談相手一人機を見て申付度兼て存候得とも、何分人物之考少く、（島津久徴）下總より外ニは有間敷と存申候、考承度存申候、風俗之一議は誠ニ一大事之事、一郷中ニ学校同様諸稽古所一ケ所ツヽ取立候様成事ニては如何可有之哉、若同意ニ候ハヽ、趣法立等勘考之うへ可申遣候、

一藤安之事、此間も申遣候通り之儀、最早差下し候様相成候哉と存候、当地江も山田や巳之助同道ニて参候もの両人、是は唐物之義不相分候へ共、身元不正之者と附合候段、用頼之同心よりしらせ有之候得共、未タ弥不相知候、

一砲術調練も盛ニ相成候由、一段之事ニ存候、夫ニ付存寄申遣候、老年之もの迄も出精、何寄之事ニ御座候得共、七十以上之もの等は、星も差免有之候間、望ニて出候ものは其通り、不罷出ものは格別催促不致候ても可然や、申遣候迄も無之候得共、心付之侭申入置候、先は返事迄鳥度申入候、其外之義は後便可申遣候、以上、

七月廿九日

〃

〔印影〕　〔印影〕　〔印影〕

〃　駿河江

書そえ申入候、此度公辺より軍艦乗組人数并運送船ニ相用候節之人数書出候様、且海路も申出候様との事ニて、委細仁右衛門（田中）より掛合ニ相成候、右は前後勘弁之上取調可申越候、三十間・廿七間は未た取付不申間、先廿四間・廿間・十五間之分ニても可然、早く取調申遣候様存候、

一琉球届之儀も、未タ差扣置候、右は弥出帆之届と、一同ニ出候方可宜と存候間、扣申候、しかし出帆永引申候ハヽ、其内差出可然、来月中旬迄出帆之左右無之候ハヽ、一往届出し可然と存候、尤琉球約条書并ニ下田ニて約条之書面も相添候て差出可然と存申候、

一野戦台打折れ候よし、右は打薬多過とも存候、委細は〔井上〕庄太郎より登方江申遣候事、

右書添申入候事、

同日

〆〔印影〕

書添

嘉永七年寅七月廿九日御書
閏七月廿一日到着、頂戴

〆〔印影〕

書添

書添

一沖之永良部心付代り之義申遣候、右は少々過当之向も有之、其方とも無拠事と此方ニても申事ニて、減少申付候、右之内龍衛等は余り度々之事と存候、右一人計り之事ニも無之処、少々当人不勘弁之様ニも存候得共、此節迄は申付候、江戸之始末上通ニは聞得不申候、右ニ付相応残りも有之候間、差知れ困窮之表方之もの、不願共申付可然存候間、申付調候て仝日便申遣候事ニ御座候、川矢砂糖之買入之義、是迄先例有之候とても、役替不相応ゆへ不申付候、其代りは申付候事、

一堀與左衛門ニは、此方ニて存寄を以て金子遣候間、此段も申入候、以上、

文月廿九日

〔参考　山田為正書翰（新納久仰宛）〕

御別封被成下候間、例之通仙波市左衛門迄御内用ヲ以差廻申候、且亦去ル廿五日町便ヲ以、同人迄一封仕出し置申候御請取被下候筈と奉存候、此段申上越候、以上、

寅七月廿九日　山田壮右衛門

駿河様

御別封御書添之趣ニて跡達ニて御下け被遊候間、別封ニてさし上申候、以上、

七月廿九日　山田壮右衛門

駿河様

〔斉彬公久光公御自筆写等　新納氏蔵」所収（東大史料編纂所所蔵）〕

五六七　三原經禮へ書翰　七月二十九日

一筆申入候、愈無事珍重存候、魯西亜も地中海争乱に

て急々不参由、先々宜敷、乍然英夷は唐国迄参居候哉に承申候、猶於其地聞合専一に候、

一新調反射炉焼石之義、此節江夏十郎より庄太郎（井上）迄申遣候、是は道中より玄碩（董久）江申付、此度は天草石一味にて焼石調候様にと申遣候事にて、不相分訳は無之候、玄碩掛合行違候て、未た手当無之哉と存候、左候はゝ早々手当申付、焼石之分は天草にて取建候様、早々天草土取寄候様可致候、尤上之方格別火之不当処は、星山之土組相用ひ宜敷、此度委細十郎迄庄太郎より掛合申遣候、呉々も未タ天草土不取寄候はゝ、早々手当可致候、

一反射炉之内江鋳鉄之棒入れ候様、此度十郎迄申遣候、石にても宜敷候得共、一大要所に候間、本法之通り鉄にて申付候間、左様心得可申候、

一長さき江蒸気使節参申候よしゆへ、以都合能々探索専一に存候、

一蘭書注文願も相済候、近々可差出候、左候ハヽ多分其地江可相廻候間、蘭人江以通詞願入れ置候様可致候、

一当地にてボートホーイツスル二挺鋳立候、加つゝ原之錫にて候、極上々之金色にて、舶来と同様に御座候、又八十ホント之鋳直しも近々取付候筈ニて候、

一前之濱波戸出来、砲門取掛りと承り申候、右之台場か出来候はゝ、下町之波戸も近々取付候様可致候、江戸一二三も出来申候、五六も当時最中に御座候、

一瓲島之事も、今日便二千両拝借之義申遣候間、仕法立等宜敷可取計候（其外器物にても宜敷品、且船用之コロノメートル時計・遠目かね・返照鏡之遠目かね宜敷品）

一蘭書能々頼入れ、蘭人採用之処にて、取出方相良江可申付候、軍兵書之義其外考次第可取計候、

一唐船参候様風聞有之候、弥々候哉、左候ハヽ唐国様子も可相分候間、聞合可申遣候、別に逃来候には無之哉と存申候、

一御軍政御改正被仰出候、水戸老公万事御差図之よし、多分船軍之事も出来可申候、左候ハヽ夫に基き国之方も改正取極め度と存候、猶追々可申遣候、

一錫此節は余り望手無之候、しかし又追々可有之との事故、先打捨置申候、蘭錫は不残公辺御用に候哉、承合可申候、

一錐通之雛形、此度橋口源右衛門便より差下候、右は滝之上江取立度候間、追々取調考付けにて可申遣候、雛形は江夏十郎方江可差下候、

一軍艦之節并運送船に相用ひ候時ニ人数之事、此節公辺より御尋に付、取調候様国江掛合申候、田中仁右衛門首尾に候、前後勘弁之上、つもり方可致候、船之間数にて増減可致候、先は此節は廿四間・廿間・十五間にて可然、三十間・廿七間は追て可申上との処にても可然存申候、駿河江は認落不申遣候間、其方より可申遣候、

一新製野戦之台折れ候よし申来候、当地にても相糺候処、野戦は台場より小薬にて打候もの之よしゆへ、以来其心得にて打方有之候様可申遣候、壮右衛門より登迄申遣候事、

一天草石之義、玄碩少々失念と存申候、立前に申付、天草土千二百俵平阿彌方江取寄候様申付候事覚申候、右は反射炉用之考にて申付候、其事只今存出し、玄碩江申候得は、漸々考付候様子、弥参居候はゝ、右之土早々江夏江相渡様可致候、平阿彌其焼物用と存候も難計候間、其方より可申遣候、ともかくも早々天草土十郎江相渡、焼石出来候得は宜敷候間、早々可取計候、先は用事早々申入候、以上、

七月廿九日

猶、長さき見聞之義細々可申越候、以上、

〔吉彬公書翰集所収(鹿児島県立図書館ならびに東大史料編纂所所蔵)〕

五六八 櫻田屋敷上番詰等について家老達 七月

櫻田御屋敷通融御門、以前は上番所被召建置候処、文化之度御倹約之砌御引取相成候得共、以来上番相詰候様被仰付候、左候て西向御屋敷之儀同様被仰付、且御門之儀は上番詰所無之候ニ付、御造立被仰付候、

七月 駿河新納久仰

〔石室秘稿中「安政元年甲寅藩内布達類」所収(国立国会図書館所蔵)〕

五六九 長崎奉行へ琉球国米国と和親条約締結の件について家老届 閏七月十六日

一筆啓上仕候、琉球国之内那覇江、当四月廿二日、北亜米理幹船壱艘来着、水主之内給酔候者一人致溺死候段は、先達て御届申上候通ニ候、然処当六月七日、同所江異国船二艘卸碇候ニ付、役々差越、本国・来着之次第相尋候処、唐人乗合、二艘共当正月江戸江罷越候亜米理加国火輪船ニて、一艘は提督乗船、当六月三日伊豆国出帆致来着候旨申出、先達テ致溺死候者諸所江疵付有之、相手致糺方候様、色々難渋申立候ニ付、及糺方候処、前条給酔候水主、人家江押入、不法之仕形

有之、在合候者とも礫投当候由ニ付、其段相達候処、水主ハ大罪之者ニ候得共、相果候ニ付、不及是非、相手之琉球人は、国法通刑法可相行旨申ニ付、其通可申付段相達候処、納得いたし候、左候て、亜国日本国と和好交易之約条別冊之通相済候ニ付、於琉球も其通可致、和好等約条之草稿差出候ニ付、品々申断候得共、更ニ聞入不申、屹と右之通取計、総理官等印押相渡候様申立候ニ付、国王幼少ニて政事向旁決着難成、国家之大事、官人共迄ニてハ何分取計難致、勿論清国之藩邦ニて、彼国江差図を不得候てハ難相成訳合等を以、幼君国政向致差図年輩罷成候迄之間、何れ共相待呉候様、精々幾度も及理解、申断候得共、右之通日本国交通御免相成、下田にて互ニ急度約定取替候ニ付ては、此上於琉球異儀申立候訳合無之と申、鋭気に募、兵卒等引来、猛威を以押付候形ニ付、此上強て申断候ては、既に違変ニも可及機先ニて、別紙ヶ条書之通彼方より認来、押て総理官・布政官印為押調、三通ハ此方江相渡し、彼方江も三通相受取候、左候て先達テ渡来之節申立置候彼国金銀銅蕃銭、度佳喇島金銀と繰替方之儀、程能申断差返候処、相請取、昨年来卸置候都て之石炭、并当正月卸置候亜人拾人本船江乗付、是迄召置候寺敷銀并石炭小屋修理用銀可相渡旨申出候ニ付、是迄寺敷銀相請取候儀無之、不及其儀段強て相断候得共、押て残置候、且去ル午年より致逗留居候唎国之医師壱人、亜船より可致帰国旨申出、荷物等都て積入致乗船候ニ付、当正月押て卸置候唎人妻子之儀も、一同列帰呉候様提督江頼入候処、此儀は於清国唎官江致相談候上、引取候様可取計旨申聞、医師并亜人ニハ惣て亜船江召乗、一艘は六月廿一日、二艘ハ同廿三日致出帆候旨、此節琉球より以飛船申越候、此段為可申上如斯御座候、恐惶謹言、

閏七月十六日　　樺山伊織
　　新納駿河
　　島津石見
　　川上筑後

〔忠篤、長崎奉行〕
水野筑後守様

参人々御中

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収〕

五七〇　幕府へ届（唐船漂着の件）　八月三日

私領薩摩国串木野村之内羽島村浦江、七日廿二日唐船

壱艘卸碇候付、港江挽入、相尋候処、来朝乍出寧波船主江星畬牌名周萬利、船主長崎在留ニて、領船財副程千延乗組百八人、外唐国江致漂来候摂州之者拾壱人致護送、風依不順漂来之旨申出候ニ付、如先規質人請取、番船堅固附置候、依之警衛之者相添長崎江可送遣処、同廿四日夜致出帆候付、為可差留役々差越候へ共、遙洋中〔江カ〕より走出候、質唐人之儀は、警固之者相添可送遣旨、長崎奉行へ委細申達候由、国元家老共より申越候、此段及御届候、以上、

八月三日　　松平薩摩守

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収〕

五七一　幕府へ届（米船琉球へ渡来の件）八月二十日

〔私領分〕〔岡山池田家文書〕私領琉球国之内大島へ、〔六月五日〕〔池田家文書〕当六月火輪船三艘卸碇、橋船二艘より異国人共三人致上陸候ニ付、役々出会、本国・来着之次第相尋候処、言語文字不相通、亜米利加船ニて、江戸出帆致来着、野菜之類払底之様子、手招を以漸々相分り、右品類相与候処、厚致礼謝、左候て橋船より湊口測量致候体ニて、無間も本船へ帰り、午之方へ乗行、無程帆影相見不申候、猶又取締向厳重申付置候旨、此節従琉球申越候ニ付、委細長崎奉行へ申達候由、国許〔家来共申越候〕〔池田家文書〕家来共より申越候、此段及御届候、以上、

八月廿日　　松平薩摩守

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収、他に岡山池田家文庫文書中にも写あり（岡山大学所蔵）〕

五七二　幕府へ届（琉米条約締結の件）八月二十日

〔私領分〕〔岡山池田家文書〕私領琉球国之内那覇へ、当四月廿二日北亜米利加船〔一艘来着〕〔池田家文書〕艘、水主之内給酔候者一人致溺死候段ハ、先達て御届申達候〔候通〕〔池田家文書〕、然る処六月七日、右同所へ異国船二艘卸碇候ニ付、役々差越相尋候処、唐人乗合、二艘共当正月〔江戸江〕〔池田家文書〕戸表へ差越候亜米利加火輪船ニて、一艘ハ提督乗船、六月三日伊豆国出帆致来着候旨申出、先達て溺死致候者諸所へ疵付有之、相手糺方致候様、色々難渋申立候ニ付、及糺方候処、前条給酔候水主、人家へ押入、剰不法之仕方等致候ニ付、在合候者礫投当候由申達候処、水主ハ大罪之者ニ候得共、相果候ニ付不及是非、相手琉球人ハ、国法之通刑法可相行ニて可有之旨承候ニ付、其通可申付段相達候処致納得候左候て、〔亜国日本と〕〔池田家文書〕日本と和好交易之約条別冊之通相済候ニ付、於琉球も其通可致和好等、約定之草稿差出候ニ付、品々申断候得共、更ニ不

聞入、屹度右之通取計、「総理官等」〔池田家文書〕総理官印形押調候様申立、国主幼少ニて、政事向旁決着難成、国家之大事官人共迄ニてハ取扱難成、清国之藩邦ニて、彼国差図を不得候てハ難相成訳合を以、幼君国政向致指揮候年輩ニ「相成候間相待呉候様」〔池田家文書〕相成候迄待呉候様、精々及理解候得共、右之通日本交通相済、下田表ニて互ニ急度約条取替候ニ付てハ、此上於琉球異儀申立候訳合無之旨、鋭気ニ募リ、兵卒等引来、此上強て申断候てハ、既ニ可及異変ニも勢ニて、別紙条約之通り彼方より認来、総理官・布政官印為押調、三通ハ此方より相渡、彼方よりも三通相受取候、左候て、先達て渡来之節申立置候彼国金銅蕃銭、度佳喇島金銀と繰替方之儀、程能申断差返候処相受取候、昨年来卸置候石炭、并当正月致上陸候亜人本船江「乗せ付」〔池田家文書〕乗せ、是迄召置候寺敷銀并石炭木屋修補銀「修補用」〔池田家文書〕可相渡と申出候ニ付是迄仏英人共差置候寺敷銀等相請取候儀無之、不及其儀段強て相断候得共、押て残置候、且去ル午年「午年ヨリ」〔池田家文書〕致逗留居候英国医師一人、亜船より可致帰国旨申出、荷物等都て積入、妻子三人共一同連帰呉候様提督へ頼入候処、「可取計旨申聞、医師並亜人ニは惣て亜船江召乗、壱艘は六月廿一日」〔池田家文書〕此儀ハ於清国英官へ致相談候上、引取候様可取計旨申聞、医師一人并亜人ハ亜船へ相乗、一艘ハ六月廿一日、二艘ハ同廿三日致出帆候旨、此節従琉球国飛船を以申来候ニ付、委細長崎奉行へ申達候由、国元家来共より「家来共申越候」〔池田家文書〕申越候、此段及御届候、以上、

八月廿日　松平薩摩守

〔大日本古文書〔幕末外国関係文書〕所収、他に岡山池田家文庫文書中にも写あり〔岡山大学所蔵〕〕

五七三　士風矯正並に役掛の件について新納久仰へ家老達　八月二十三日

五七三の一

新納駿河

右は当春、御発駕前、士風立直方之儀被仰付置候処、今以不立直哉ニ被聞召通候間、引受急度士風立直候様、可致取扱旨被仰付候、

八月　筑後

五七三の二

新納駿河

右は末川近江在旅中、御勝手方并御軍役方掛寄被仰付置、今般近江罷下候得共、是迄之通近江申談相勤候様被仰付候、

八月　　筑後

〔久仰雑譜所収（久留米市中村採次郎氏所蔵）・新納久仰雑譜所収（東大史料編纂所所蔵）〕

五七四　日本惣船印の件に関する幕令について

家老達　八月

大目付へ

大船製造ニ付ては、異国船ニ不紛様日本惣船印は白地ニ日之丸幟相用候様、且　公義御船之儀は白紺布交之吹貫帆中柱へ相立、帆之儀は白地中黒ニ被仰付候条、〔七月九日、老中達〕諸家ニ於ても、白帆は不相用、遠方ニても見分り易き帆印、銘々勝手ニ相用候筈可致候、〔向々脱カ〕

右不洩様へ可被相触候、

八月

〔石室秘稿中「安政元年甲寅諸内布達類」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五七五　武家諸法度発布一件　九月

〔阿部正弘外五名連署の老中書翰　九月二十三日〕

〔包紙ウハ書〕

松平薩摩守殿

阿部伊勢守
牧野備前守
松平和泉守
松平伊賀守
久世大和守
内藤紀伊守

御用之儀候間、明後廿五日五半時可有登　城候、尤熨斗目・半袴可為着用候、以上、

九月廿三日

内藤紀伊守
久世大和守
松平伊賀守
松平和泉守
牧野備前守
阿部伊勢守

松平薩摩守殿

〔島津斉彬返翰（老中連名宛）　九月二十三日〕

御用之儀候間、明後廿五日五半時登
城可仕候、尤熨斗目・半袴可致着用旨被仰下、奉得其意候、以上、

九月廿三日　　御名

阿部伊勢守様
牧野備前守様
松平和泉守様
松平伊賀守様
久世大和守様

内藤紀伊守様

〔幕府老中達（大目付宛）九月二十三日〕

大目付江

御法令被　仰出候ニ付、病気・幼少ニて出仕無之面々は、老中宅江使者可差越候、在国在邑之面々は、承次第使札可差越候、

但
隠居之面々不及此儀ニ候、

右之通可被相触候、

九月

〔幕府大目付達（浅野斉粛・細川斉護宛）九月二十三日〕

牧野備前守殿御渡候御書付写壱通相達候之間、被得其意、御同列中并御嫡子方江も不残様無遅滞早々可有通達候、答之儀は先々従銘々不及挨拶、各より堀　伊豆守方江可被申聞候、以上、

九月廿三日

大目付

〔浅野斉粛・広島藩主〕
松平安藝守殿

〔斉護、熊本藩主〕
細川越中守殿

右留守居

〔浅野斉粛・細川斉護家来回達　九月二十三日〕

猶以

御嫡子様被成御座候

御方様は、御付衆迄御通達可被下候、以上、

以廻状致啓上候、只今大御目付様より御廻状并御書付写壱通被差越候付、右写各様迄致通達候様、安藝守・越中守被申付、廻状数通相認持廻申付候、以上、

九月廿三日

細川越中守内
清田新兵衛
田中八郎兵衛
福田源兵衛

松平安藝守内
福永小太夫
梶川銀次郎
中野富三郎
福永助左衛門

御次第不同

松平薩摩守様
御留守居中様
松平陸奥守様

御留守居中様
南部美濃守様
御留守居中様

〔半田嘉藤次首尾報告（島津久福宛）　九月二十三日〕

御法令被
仰出候儀付、牧野備前守様被仰渡候御書付御写一通、
大御目付衆御添書一通、只今別紙之通松平安藝守様・
細川越中守様衆より到来候間、本書ハ致返却、写相添
差上申候、以上、

寅九月廿三日　〔歳典、江戸留守居〕半田嘉藤次
〔島津久福、家老〕伯耆様

〔島津斉彬届　九月二十四日〕

〔包紙ウハ書〕御名

私儀疝積気有之、明廿五日登
城御断申達候、以上、

九月廿四日　御名

〔西筑右衛門首尾報告（島津久福宛）　九月二十四日〕

御書付一通

但大守様御疝積気被遊御座、廿五日
御登　城御断之儀付

御用番
内藤紀伊守様
御取次
松橋廉平

右江持参仕、演説之上差出候処、被成御落手候旨、右
御取次を以被仰聞候、
右之通今夕私相勤此段申上候、以上、

寅九月廿四日　〔江戸留守居兼御側御用人〕西筑右衛門

伯耆殿

追て申上候、大御目付衆江御届之儀は、御留守居
付役名前之書付を以、御用御頼堀伊豆守殿江申出
為置候、此段も申上候、以上、

〔西筑右衛門首尾報告（島津久福宛）　九月二十五日〕

大守様御用之儀御座候間、今日五半時
御登　城被遊候様、御老中様御連名之御奉書御到来被
遊候処、御疝積気被遊御座、今日
御登城御断被仰上候付、御本丸於蘇鐵之間、右之趣申

述、御坊主組頭宇佐美俊陸を以御病名札差出候処、御目付遠山金四郎殿被致承知候旨、右俊陸を以被申聞候、右之通今朝私相勤此段申上候、以上、

寅九月廿五日　西筑右衛門

伯耆様

〔西筑右衛門首尾報告（島津久徴宛）　九月二十五日〕

御老中

阿部伊勢守様
御取次
小林兼五郎

牧野備前守様
御取次
稲垣茂一郎

松平和泉守様
御取次
鈴木彦右衛門

松平伊賀守様
御取次
山田宮兵衛

久世大和守様
御取次
鈴木仲右衛門

内藤紀伊守様
御取次
渡邊平五郎

右江参上仕、今日御法令被仰出候旨、大御目付衆より御触達御座候処、太守様御疝積気被遊御座、御登城御断被仰上候付、御祝儀御使者を以被仰上候旨、御口上御相応申述候処、留置追て可申上候旨、御銘々様右御取次より承申候、右之通今日私相勤此段申上候、以上、

寅九月廿五日　西筑右衛門

伯耆様

追て申上候、宰相様よりは御勤向之儀、大御目付衆御触達之通何も無之筋、御先例にも相見得申候、此段も申上候、以上、

〔武家諸法度　九月二十五日〕

〔封紙ウハ書〕
武家諸法度

武家諸法度

一文武忠孝を励し、可正礼義事、
一参勤交替之儀、毎歳可守所定之時節、従者之員数不可及繁多事、
一人馬兵具等分限に応し可相嗜事、
一新儀之城郭構営堅禁止之、居城之隍塁・石壁等敗壊之時は達奉行所、可請差図也、櫓・屏・門以下は如先規可修補事、
一大船製造可言上事、
一企新規、結徒党、成誓約、并私之関所・新法之津留制禁事、
一江戸并何国にても、不慮之儀有之といふとも、猥に不懸集、在国之輩は其所を守り、下知を可相待也、何処にて雖行刑罰、役者之外不可出向、可任検使之左右事、
一喧嘩口論可加謹慎、私之諍論制禁之、若無拠子細有之は、達奉行所可受其旨、不依何事令荷担は、其咎本人より重かるへし、并本主之障有之もの不可相拘事、
　附、頭有之輩之百姓訴論は、其支配江令談合可済之、有滞儀は評定所江差出之、可請捌事、
一国主・城主・壱万石以上、近習并諸奉行・諸物頭私不可結婚姻、惣て公家と於結縁辺達奉行所可請差図事、
一音信・贈答・嫁娶之規式、或饗応、或家宅営作等、其外万事可用倹約、惣て無益之道具をこのみ、不可致私之奢事、
一衣裳之品不可混乱、白綾公卿以上、白小袖諸大夫以上免許之事、
　附、従若党之衣類は羽二重・絹・紬・布木綿、弓鉄砲之者は紬・布木綿、其下ニ至りては万事布木綿可用事、
一乗輿は一門之歴々・国主・城主・壱万石以上、并国大名之息、城主及侍従以上之嫡子、或年五十以上許之医師・僧家は制外之事、
一養子は同姓相応之者を撰ひ、若無之においては、由緒を正し、存生之内可致言上、五十以上十七歳以下之輩及末期雖致養子、吟味之上可立之、縦雖実子筋目違たる儀不可立事、
　附、殉死之儀弥令制禁事、
一知行之所務清廉沙汰之国郡不可令衰弊、道路・駅馬・橋・舟等無断絶可令往還事、
一諸国散在之寺社領、従古至于今、所附来は不可取放之、勿論新地之寺社建立弥令停止之、若無拠子細有之は達

奉行所、可請差図事、
一万事応江戸之法度、於国々所々可遵行事、
右条々堅可相守者也
〔安政元年〕
嘉永七年九月廿五日

〔幕府老中達（大目付宛）　九月二十五日〕
今度御法令ニ大船製造可言上之旨被仰出候、然処荷船は前々より御許し有之事ニ付有来通、製造之儀は是迄之通可相心得候、尤荷船たりとも製造方其外有来と致相違候はゝ、此度被仰出候通相心得可申事、
九月

〔回状順達名書〕
引札略ス　引札略ス　引札略ス　

口上之覚

一御条目御写一通
一御別紙一通

右今廿六日於牧野備前守殿宅、家来之者江御渡被成、大広間四品以上御方江順達可致旨被仰渡候間、右御写一通・御別紙一通以使者差進候、御承知之御届御銘々より備前守殿江御達可被成と存候、御順達相済次第、右御写・御別紙共此方江御返可被成候、御順之御先々別紙相添申候、

右同様松平加賀守殿江も御渡申合、順達可致旨被仰渡候付、御同席残御方江は、則加賀守殿より御通達有之筈ニ御座候、

九月廿六日　　使者
（津山藩主、斉民）松平越後守

〔家老川上久封達（記録座宛）　十二月（十六日カ）〕

一御条目写一通
一御別紙一通
一右ニ付書附五通
一御廻状写一通
　但
御留守居首尾書相添

右は
御代替初て御法令被
仰出候付、右之通江戸より到来候間、先例之通御記
録所江可相納候、

十二月　　（川上久封、家老）筑後

〔参考　包紙ウハ書〕
（朱書）六拾四番

一御条目写等　九通
御留守居首尾書添

右嘉永七年寅十二月十六日、筑後殿より当座江可致格護置旨黒田嘉右衛門致承知、白木御文書拾番箱江納置之候事、

白木十番箱

〔東大史料編纂所所蔵、他に追録旧記雑録（鹿児島県史料旧記雑録追録八）所収〕

五七六　近衛忠凞へ書翰　十月十六日

御造営の義、御遅々の御様子にて、御配慮被為在候趣、委細拝承仕、早速貴報可申上の処、右は書面人伝にても参り兼、閣老対話の上ならては難相叶、夫故彼是延引の段、不悪御恕察可被成下候、当十五日登営の節、阿部伊勢守へ内談仕候処、此儀は御尤千万、兼て耳に

も入候儀に候得共、全以被打捨候儀にては無之、今般の儀は、将軍家にても殊の外御急き被為在、御造営御切組万端江戸にて御出来、運漕の上は、直に御上棟にも可相成やの御手順にて、已に此節三艘程は出帆仕、猶追々出帆と申御事に申聞候、夫故京師にても毎もとは相違、何の御経営も無之様に被思召と奉存候、且又兼て両隅御広の一条も、弥の儀承候処、是以御治定、近日御用にて罷登候もの有之、今日にも可申談やの趣申聞候間、此段御賢慮被易様奉存候、於拙生も右一条先達て申上置候儀も有之、相違は有之間敷候へ共、万一御書面の通にては、如何なる変事も差起候やと、甚以心配罷在候処、先以御同慶奉存候、

一此頃中は、異船難波へ渡来、彼は皇城へ相逼候次第、奉恐入候儀に奉存候、早速退帆、公辺御仕向も此度は厳酷の御処置の旨、伊勢守申聞候、付ては御警衛筋御手薄、御配慮の段奉拝察候、御尤の御儀奉存候、既に兼々建白も致候条々の中に御座候、其外にも同志の輩も御座候間、今度の御一条に付ては、何とか被仰出品も有之やと奉存候、先は要枢尊酬申上度、余は重鳴と閣筆仕候、謹言、

寅十月十六日　　松平薩摩守

近衛忠熙殿下

御取次様

（照国公文書ならびに順聖公年譜稿所収、他に薩藩史料斉彬公）

五七七　安政改元の件について家老達　十二月二十七日

安政

右之通、年号被相改候旨、去ル五日於江戸被仰渡候段申来候間、得其意、去ル五日ヨリ諸書付等モ、安政ト可相改候、此旨不洩様可致通達候、

十二月廿七日　　筑後川上

（斉彬公史料所収）

五七八　幕府へ島津斉彬家来上申書（琉球国救助の件）（安政二年カ）

流球国御救助於長崎表唐物十六種商法御免被仰付、中山王初国中一統

御恩沢之程難有奉存候、就ては琉人共毎年唐国江罷渡、御免品十六種買円方及手当候節は、福州琉球館江出入之唐商共江兼て致約諸買円候事ニて、右之内ニは廣東其外遠省被致駈引候品も有之、然ニ去々秋之儀琉人共

渡唐之上、則御免品買円方及手当置候処、折柄唐国兵乱中ニて、諸所通路も相塞、就中戦争之場所は商売之融通も無御座、唐商共ニも別て及心配、精々買円方相働候得共、去夏琉人共帰帆着掛候ても品物相揃不申、御免品過分之買不足相成候付、外品請取持渡候様唐人共より頻相談承候付、兼て御免無之品持渡間敷との儀は厳敷仰渡も有之事候付、精々相断候得共一切聞入不申、押々相渡候付、右品請取不申候得共、御免品過分之闕斤ニも相成居候付、差当国難ニも相拘、外ニ術計も無之、兼て被仰渡候御趣意ニは振れ、何共奉恐入候得共、別紙品立書之通持渡候段申出、御免無之品持渡間敷と之儀は兼て被仰渡置候趣も御座候付、入唐之琉役共江毎年堅申付遣事御座候得共、只管国難而已を考、右始末中山王初役々承届殆当惑仕候、右付ては則焼捨又は積戻し候取計之外無御座候得共、過半人命ニも相拘候大切之品柄、看々灰燼と成候儀何共歎ヶ敷、且積戻候儀も相調不申、必至と当惑仕候、就ては去ル辰年（弘化元）以来異国船渡来、就中近年は数艘来着長々滞船、種々難題申掛、（ニ）（于）今仏嘆両国の者共も逗留罷在、国力難応莫大之費用ニ相及、旁以不容易時節、其侭召置候ては弥増国中困窮ニ相迫り、生業之道無御座候間、自由ヶ間敷儀共甚以奉恐入候得共、前条通当今琉球国難之時節御憐愍被召加、

御仁恵之御取扱奉願度旨、中山王無余儀愁訴申越候、右付ては御免外の品持渡候儀、別て不束之始末奉恐入候得共、追々申上置候通琉球之儀全和漢通商之潤助を以立行来候国柄ニて、外ニ生計之道無御座、夫形召置候ては弥困窮ニ陥り候儀は眼前ニて、甚心痛仕候、且又当今之形勢異国船諸所往来、就中琉球之儀は繁々来着、多年異人共逗留罷在、種々難題申掛候時節、付ては海外孤立之小国、一涯仁政を施何篇下知行届不申候ては、旁懸念之訳も御座候間、何卒右品々儀は出格之御評議を以、此節限於長崎表此涯一同売捌御免被仰付被下度奉願候、御鴻恩之程難有為奉感服度候間、何卒御憐愍被召加、歎願之旨御聞届被下候儀、幾畳ニも厚可奉願旨薩摩守申付候、別紙品立書壱通相添、此段申上候、以上、

松平薩摩守内

（鹿児島市川上矢吉氏所蔵）

五七九　松平慶永へ書翰　安政二年正月二十六日

貴札忝致拝見候、先以新年之御慶目出度奉存候、愈御壮栄被成御加年候由奉恐寿候、小子にも無事越年仕候、乍憚御休意可被下候、右貴答可申上如斯御座候、恐惶謹言、

松　薩摩守

正月廿六日　　齊彬花押

松　越前守様

猶々、時気御自愛専一奉存候、当春は雪多く寒気甚敷覚申候、追々海船渡来之時節と甚た掛念罷在候、一体之御様子は自若と致候事に御座候、然し浦賀台場は大普請と承り申候、少も早く御参府専一奉存候、小子も先定例御暇之心得、拝眉可仕と相楽申候、御着之上は早々拝顔奉願候、以上、

〔照国公文書ならびに順聖公年譜(東大史料編纂所所蔵)所収〕

五八〇　縮緬羽二重等の着用について家老達　正月

縮緬羽二重等は、去年十二月限可相用旨、〔嘉永五年四月二十八日〕去ル子年被仰出置候処、御供其外旅行等之節、諸士以上は単袷共縮緬羽二重致着用候ても不苦旨被仰付候、左候て兼て致着用候儀は不相成旨被仰渡候、

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収(国立国会図書館所蔵)〕

五八一　諸役人取替沙汰等について家老達　三月

諸人御取替沙汰并訴訟ヶ間敷儀共、御改革御年限中は容易御取揚被仰付間敷との趣、追々申渡有之通ニ候処、近来種々難渋申立、拝借等之内意申出候者も不少、不勘弁之事ニ候、夫々質素節倹を相用、衣食住迄も可為麁品と之趣は、段々厚被　仰出之品も有之、就中当時〔ニ付脱カ〕之海防御手当向旁莫大之御入費、第一御金繰ニも相拘事候付、於向々も右次第深汲受、弥以省略を加へ、御役人初書役小役人等御取替之内意決て申出間敷候、此旨向々江不洩様可致通達候、

三月　石見　島津久浮

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」・「安政元年甲寅藩内布達類」所収(国立国会図書館所蔵)〕

五八二　衣服着用の件について家老達　四月

衣服沙汰之儀ニ付ては申渡置候趣も有之候得共、婦人衣服之儀は、年頭を初め其外式事相拘り候節は、天保之度被仰渡置候通相心得、熨斗目等ニ準し候服合は、応分限縮緬類模様付ニても、持合候品は着用不苦候旨被仰渡候条、此旨向々へ洩様可致通達候、

卯四月　　石見島津久浮

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」・「安政元年甲寅藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五八三　梵鐘鋳換等の件に関する幕令について

家老達　四月

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘、本寺之外、古来之名器及ヒ当節時々鐘（之カ）ニ用候分相除キ、其余可鋳換大砲小銃之旨、従京都被　仰進候、海防之儀専御世話有之候折柄、叡慮之趣深く御感戴被遊事候間、一同厚く相心得、海防筋之儀弥深可相励旨、従（安政二年三月三日、老中達）公義被仰渡候、右ニ付、銅・鉄は勿論、鉛・錫・陶器等ニて相済候品ヲ、右類ニて相調候儀、又は銅・鉄ヲ以新規ニ仏像等鋳造致シ、又は仏器モ木製・陶器ニて相済候分は、以来銅・鉄類を以製造之儀可為無用旨も被仰渡候、

右之趣不洩様可致通達候、

四月　　御家老座印

〔石室秘稿中「安政元年甲寅藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五八四　江夏直義へ書翰　六月朔日

書面相達申候、先月末便より書面可遣と存候処、色々取込候間、書面不遣候事、

一申越候条々、委細心得候、其内追々可申遣候、

一務事此度色々用向有之差越し候間、磯反射炉・蒸気・大砲等之事、万事申談候事と存候間、同人下国中は万事申聞候テ取計可申候、左様無之候ハヽ、色々人々心々ニ申候てはつまらぬ事ニて、役ニ立不申候間、万事心得第一ニ存候、市來（公買）等之事、蒸気一条折田致様不宜候、先々よき程ニあしらひ置候方宜候、何事も道理宜敷とて、人々争候ては万事ニ差支申候、自然と善悪は相分候間、其心得能々市來等江も教諭第一ニ存候、

一去年中より色々申遣度候得共、眩暈ゆへ執筆むつかしく、夫故色々万端不都合も有之候、追々可申遣候、近日務便より猶又可申遣候、今日は書面請取計リ申入候、

前田着候ハヽ、委細可承候、荒田書面尤之事ニ存候、篤と考候て国江申遣様も可有之候、未タ表向より書付着不申候、先は要用申入候、以上、

六月朔日

〔印影（縅）〕　〔印影（縅）〕　〔印影（縅）〕

〃　江

一焼石之土之事、段々相考候得は、立前平阿彌江玄碩（重久）より申付、天草土千二百俵取寄候段申付候、只今考出し玄碩江申候処考出候、此節弥参居候ハヽ、其方江下渡候様掛合申付候、若無之候ハヽ、早々取寄セ候様申遣候間、肝要之場所之分、是非天草一味ニて取建候様可致候、此段早々申達候、玄碩多用ニて失念らしく相見得候、以上、

（斉彬公御達及手簡所収（鹿児島県立図書館所蔵）、他に斉彬公書翰集）

五八五　松平頼學　松平義比へ回達　八月十五日

○この文書の本文は、本巻第五〇号文書中の安政二年八月十五日付島津斉彬回達（毛利慶親・毛利元徳連名宛）・第一九四号文書中の安政二年八月十五日付島津斉彬回達（松平頼誠・松平頼縄・吉川信発連名宛）と同文により略す。本文省略に従い、末部の日付・差出所・宛所のみを掲げる。

八月十五日　　松平薩摩守

松平左京太夫様（伊予西条藩主、松平頼学）
松平攝津守様（美濃高須藩主、松平義比）

（大日本古文書（幕末外国関係文書）所収）

五八六　山内豊信へ回達　八月十五日

○この文書の本文は、本巻第五〇号ならびに第一九四号文書中の安政二年八月十五日島津斉彬回達と同文により略す。本文省略に従い、末部の日付・差出所・宛所のみを掲げる。

八月十五日　　松平薩摩守

松平土佐守（土佐藩主、山内豊信）

以下、魯西亜・英吉利・亜墨利条約ノ写アリ、略之、

（高知市民図書館所蔵）

五八七　新納久仰へ書翰　八月二十一日

御直書　安政二年卯八月廿一日之
九月九日夕方到着、翌十日仙波氏より受取

〔印影（緘）〕

用事

壮右衛門迄申越候郷中稽古所等之儀、荒田より願出も有之由、少々は手当等申付、行届候様取計可然と存候、

一諸郷薬店之儀尤之事、取締行届候へは、諸郷之為可然と存申候、市中申出等〆売之訳かと存候、

一此度豊後迄申越候板鼻（清太夫）之事、是は色々意味有之、当時手を付ケ候ては不宜訳も有之候、いつれ豊後下着可申談候間、其侭ニいたし可然、豊後より細事可申越候、此儀色々意味も有之候、最早万事相済候事、此上手を

付ケ候ては、〔黒田斉溥、福岡藩主〕美濃守又々色々可申は案中ニ候間、先々壱人ニて口外無之様存申候、下総も少々掛り合も有之候、此方江委細之訳は相知れ候事ニ御座候、鮫嶋は庄助と申もの幽昌は少しも不存事、豊後より下着之上可申、猶其外豊後も不存儀有之候、下国之上直ニ万事可申聞候間、左様心得可申候、不快も最早快よく御座候、来月初メより平常之通ニ可致と存候、色々考も有之、追々長引申候、極内々申入置候、以上、

八月廿一日

〆〔印影(緘)〕

用事

〔参考　山田為正書翰(新納久仰宛)〕

御直書一封

右御内々被下候間、御廻し申上候、差掛り少々御用向御座候間、別段書状不奉差上候、左様御承知可被成下候、此段申上越候、以上、

八月廿一日　　山田壮右衛門

駿河様

〔斉彬公久光公御自筆写等　新納氏蔵〕所収(東大史料編纂所所蔵)

五八八　諸役場御用筆墨について家老達　八月

諸御役場御用筆墨之儀、此以前より専京都注文相成、〔「一ケ年ニは過分御買下」(石宰秘稿中「安政元年甲寅藩内布達類」)〕一ケ年ツヽ御買下相成来候得共、今般右両品共、製作所被召建、追々職人等も御雇下ニて御治定相成候付、〔来辰年ヨリ(藩内布達類)〕筆之分ハ来辰年御用分より、御国製勝林堂までを以、〔御役場ニ依ては(藩内布達類)〕致用弁候様被仰付候、左候て御役場よつて御国製ニて致弁別兼候向も候ハヽ、其形行を以可得御差図候、此旨向々江可申渡候、

但墨之儀、一ケ年も不相過候てハ、枯方十分無之趣ニ候間、追て何分可申渡候、

安政二卯八月　　駿河

〔石宰秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収(国立国会図書館所蔵)〕

五八九　徳川齊昭へ書翰　九月二十一日

尊書難有奉存候、益御機嫌能被遊御座、恐悦奉存候、然は時候御尋仰戴、殊に鰡拝領被仰付、重畳難有奉存候、右御礼奉申上度、如斯御座候、恐惶頓首、

九月二十一日

猶々、時気被遊御厭候様奉存候、豚肉不珍敷候得共、御礼迄進上仕候、以上、

〔照国公文書・順聖公年譜所収、他に薩藩史料斉彬公・島津家書簡集〕

五九〇　江夏直義へ書翰　九月二十九日

一筆申入候、愈無事珍重ニ存候、此八月末よりは封書も不参、多分園川引移候故と存候間、此度壮右衛門江申付候て、其方迄申遣候は、此節園川引移候付ては、以来御封もの被下候ては目立候間、其方江渡候様務・藤九郎江申遣候間、以後御請其外園川より差上候節は、其方請取候て、務・藤九郎両人之内江差出候様被仰付、既ニ此節も其方江相渡候様両人江申遣候間、届き候ハ、、園川江相渡候様被仰付候段申遣候筈ゆへ、其心得ニて園川江も申談、心配なく封物差遣候様可致候、

一拠先日成上り濱田之事申遣候、尤ニ存候得共、右之書面不請取前ニ、表より伺書出候て、伺通申付候後ニ書面披見候間、何分致方なく、残念なから此度は申付候事ニ候、右ニ付此後之処は、横目其外目付役之義は、町人より召出候家之もの三代不過内は、以来不申付様可相達と存し居申候、左候得は最早伺書申出し難叶候間、宜敷と存候、此度外之事ニて名分を正し候義申出候間、其返答可有之候間、其節家老中江申遣候考ニ候事、

一其地之義、細々申越候様可致候、蒸気船未タ廻り兼候よし、其後廻り出候哉如何、当地之は存外よく廻り申候、江戸大評判ニ有之候、下国之上ニて廿七間造立之心得ニ候事、此義先内々ニ候事、

一中原云々事、尤ニ候得共、先ツ下国迄相待チ可申候、都合よく差出し可申候事、

一兒玉より之書面、其外も請取申候、追々心得申候、

一此度遠島人返候と存候、如何之様子ニ候哉、細々申越へく候、

一高輪（斉興）御下向之上様子も、細々申遣候様可致事、

一鎌田郷左之事心得申候、此度庄太郎も申付、製薬掛り之義用部やより申付候様申遣候事、色々申遣度候得共、長文はのほせ候間、先後便ニ可申入候、先は要用早々申入候也、

九月廿九日

猶々、未タ昼も表江不参候、少々考も有之候、来月初より表江参候考ニ候事、反射炉ニて鋳立候大砲は如何ニ候哉、早ク鋳立候て試申付度存候、此度庄太郎より三原江申遣候間、達ニ可相成候事、

一錐通之水車、其後如何之事哉承度候事、

一高輪も御下国之事故、万事其心得ニて、不目立様取計専一ニ存候事、

一高輪御下向後之様子、細々申遣へく候、間便ニても園川よりと申候得は宜敷候間、封書可差出候、養正江差出候ても宜敷候得共、夫ニては急ニ不相届、其上目立候間、矢張園川之名目ニて遣候方宜敷候事、

緘〔印影(緘)〕　〔印影(緘)〕

用事　江

書添申入候、製薬掛り之義、先鎌田一人召入申候、いつれ下国之上、又外ニ召入候義可取計候、

一物入多ニ付、万々一出米・出銀等之事申出候ては如何との事、尤之至ニ存候、此義けして掛念ニ不及事ニ候、中々右様之訳ニては無之、又三原等之申候義、訳之有之事ニて、秘中秘ニ御座候、申遣置候趣も有之故、三原事わざと申候義と相考候、先比大坂借入三万両之事も、差掛差支候て借入候事、来春末迄ニハ右之跡補も見当有之候、また諸口々より取替ニ相成居候株も、不残来春は入込ミ候見当も有之、其外見当も附ヶ置候事ニて、中々出銀・出米可申付訳ニは無之、下国之上は諸士困窮之面々江は、先年よりは多分ニ救等も可遣と存居候程之事ニて、此義は必す心配無之様存申候、此義は誠ニ秘中秘ニ候間、決して他言いたすましく候、十万両余別ニ這入り候手数も有之候、此度製造之二艘之大船は物入無、自然と出来候訳ニ相成候手段ニ御座候、此義極大秘事ニて候事、三原は不差心得居申候、必す色にも出し申間敷候、以上、

〔印影(緘)〕

〃　江十江

〔斉彬公御達及季翰所収〈鹿児島県立図書館所蔵〉、他に斉彬公書翰集〕

五九一　犬追物古伝書等格護について家老達

十二月二十八日

〔包紙ウハ書〕

「書附写」

一犬追物聞書壱冊、

一左手をイテハ左手へカヘシト書出候壱冊、
一射手の馬場に打入候ハと書出候壱冊、
一犬追物日記壱冊、
一犬追物ハかていよりはしまりてと書出候壱冊、
一犬追物書小笠原光清在判壱冊、
一凡右大将家御時ハ弓箭の中と書出候壱冊、
一射手方聞書壱冊、
一犬追物之稽古之日記壱冊、
一騎射之聞書壱冊、
一検見聞書壱冊、
一犬追物雑聞書壱冊、
一犬追物聞書壱冊、
一犬条々可心得事と書出候壱冊、
一頓露書秘抄問答壱冊、
一此日記努々不可有他家ニ見事と書出候壱冊、
一犬追物日記壱冊、
一聞書壱冊、
一聞書壱冊、
一犬追物書壱冊、
一騎射秘抄小笠原宗中在判壱冊、
一犬追物日記壱冊、
一検見之しんたいの事き丶書に仕置分と書出候壱冊、
一犬追物ハかていよりと書出候壱冊、
一矢ところハ縄にてハと書出候壱冊、
一検見故実可覚悟条々と書出候壱冊、
一右同書出候壱冊、
一遠笠懸事と書出候壱冊、
一八廻口伝聞書壱冊、
一検見之条々壱冊、
合三拾冊、
一馬道具日記壱巻、
一山内以上六拾六ヶ条矢形と書出候壱巻、
一犬追物検見之事と書出候壱巻、
一犬追物譜肩ニ小笠原宗中と有之壱巻、
一犬追物矢形履裏履二三之書壱巻、
一犬追物検見次第壱巻、
一六拾七ヶ条矢形壱巻、
一犬追物射手方之事壱巻、
一犬追物手組之事と書出候壱巻、
一此矢遠近之やと書出候壱巻、

一犬追物日記壱巻、
一右同口伝日記壱巻、
一右同日記壱巻、
一右同日記壱巻、
　合拾四巻
右鎌倉流犬追物
御伝書等従古来
御伝来御記録所御格護被仰付置候処、
大守齊彬公思召之御訳被為
在、於御記録所臨写被仰付、被預置候旨被
仰出候条、至後年亀抹之儀共無之様
可有秘蔵者也、依て如件、

嶋豊後
継印印判
久寶〔花押〕

安政二年卯十二月廿八日

川上十郎左衛門殿

〔参考　包紙ウハ書〕
〔木書〕
六拾六番
御書附写壱通
但鎌倉流犬追物御伝書等、古来より御記録所格護被仰付置候処、於御記録所臨写被仰付、川上十郎左衛門江被預置候旨被　仰出、豊後殿より御用人島津藤馬を以、十郎左衛門江被相下候御書付、

右安政二年卯十二月廿八日、豊後殿より江田五郎左衛門江被成御渡、白木御文書拾番箱江納置之候事、

〔白木十番箱
東大史料編纂所所蔵、他に追録旧記雑録
（鹿児島県史料旧記雑録追録八）所収〕

五九二　上屋敷等取広めの件について家老達

十二月

大久保隼人殿屋敷千五百六拾四坪、家作其外有形之侭此御方様江御取入被下度、内々御願之趣有之、被応其意、西向御屋敷之内名目は不被差出、御相対替被仰付度、其通被仰付候は、上御屋敷ニ御囲込一ト御屋敷ニ被遊度と之御願書、御用番内藤紀伊守様へ八月七日被差出候処、同十一日御願之通被仰渡候ニ付、西向御屋敷之内隼人殿名前之屋敷は、其侭御借置之御願書是又内藤様へ被差出候処、御聞置被成候旨被仰渡、御受取渡相済、上御屋敷へ御囲込相成、左候て右間ニ百五拾七坪余之永御拝借地有之、御差加地之御願書御同人様へ被差出候処、御願之通被仰付、地所御曳渡有之候段

申来候、此旨向々へ可致通達候、

十二月　　筑後川上久

〔石室秘稿中「安政元年甲寅藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五九三　大乗院鎮國殿参詣について家老達　十二月

大乗院鎮國殿江是迄士以上参詣被仰付置候得共、以来身分無差別末々迄も志之者参詣不苦候、依之拝礼之節々無刀ニて、諸士以上は外陣、右以下は御縁頬ニて拝礼被仰付候条、此旨向々江可致通達候、

十二月　　豊後

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五九四　質素節倹の件に関して家老達　十二月

質素節倹相守、文武之修業不取失様心掛、徒之不致集会様と之儀は、追々被仰出置候通にて、祝事等之儀ニ付ては、

宰相様御家督中応分限応し（衍カ）振舞向等も被定置候、一統旧染之習俗も相改候得共、依御役場ニ昇進等之節々、奉行頭人書役等ニも夫々同席相招候仕来之向も有之由候処、間ニは今以旧弊相流、分限不相応之致振舞等候も可有之哉ニ相聞得、甚以不勘弁之至ニ候、難有御趣意も汲受薄筋ニ相当、屹と

御沙汰可被為及事候得共、此節迄ハ御寛宥被召加候条、以来は礼節ニ拘候儀は、天保之度被定置候通相守、猶更質素節倹相用、文武之修練無怠様可申渡旨、

御内沙汰被為　在候段申来、誠ニ以奉恐入次第候条、難有御趣意之程奉汲受、右之趣無相違屹と旧弊改候様向々江不洩様可致通達候、

十二月　　豊後　下總　筑後　近江

駿河　伊織

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

五九五　島津久豊墓所について家老達　安政三年正月二十一日

御記録奉行江

御八代

久豊公御事、應永三十二年正月廿一日被遊御逝去、

義天存忠大禪定門と奉号候処、御遺骸御葬埋之地不被遊御知、安永三年穆佐悟性寺境内

義天様御塚と申伝之場所より、骸骨相蔵居候大甕堀出、

焼物之香炉一器・唐金之鈴一入付有之、至極疑敷、細密相糺候得共、証拠可相成廉無之、

御遺骸と難見定候付、本之通致埋方、其節石碑被建置、其後天保十二年丑年相良甚大夫穆佐江被差越候節、悟性寺境内より義天之二字彫刻有之候石塔、并右之笠石堀出（掘）、旧文書等は勿論、古老之者共申伝等迄も巨細相糺、万端及勘考、

義天様御廟所無相違旨吟味申出候、然処

義天様御事、於鹿児嶋御逝去、御葬式於福昌寺被為遂、四拾九日より拾三回御忌迄、御法事御執行も於福昌寺有之候御祭文等慥ニ有之、殊ニ義天之二字彫刻之御石塔は、諸所江も有之、旁以堀出候石塔は御廟所之石塔ニ有之間敷、福昌寺西之卵塔

怨翁様（島津元久）御相廟ニ有之候御石塔、

御霊骨又は、

御遺髪被納置候儀は不相知候得共、

義天様御石塔之儀は無別条、

御廟所は福昌寺ニ相違無之哉ニ相見得候段、御記録奉行申出、御決着調兼、是迄夫形被召置候処、右甚太夫堀出候御石塔片付方之儀、去ル丑年所役々得差図候付、尚又為糺方上村休兵衛・榎本新兵衛被差越候処、古代之墳墓と相見得候得共、多年埋居、諸所蝕損、文字瑕と分兼候儀共有之、今更決着難致、安永之度堀出候骸骨之儀も旧記等相糺候得共不相知、右枯骨は全体相備居、頭骨大振りニ相見得、土葬之取置ニ有之、

御元祖様より

寛陽院様（光久）迄

御代々御火葬被為執行候御事候処、右通土葬之取置、付ては旁以

義天様御遺骸ニては有之間敷、尤葬埋之場所宜、土中取置之仕置入念候間、平人之取置共不相見得、穆佐之儀積年伊東家よりも領地いたし居候時代有之、大檀那駿河守祐満を初幾人か埋葬いたし候処ニ可有之、是以彼是今更御治定難被成趣共申出、是迄数十年御糺方有之候上之事候間、最早此末御証拠等慥ニ可相顕訳迚も無覚束、無是非御次第、いつれ福昌寺

怨翁様御相廟無相違被遊御治定、前条堀出候石塔は、此節発遣之上文字摺消、後年紛敷無之様、寺内江堀埋候様被仰付候、左候て多年穆佐江

御在城、悟性寺之儀は、為御菩提（提）所御再興、寺領迄も被召附置、被遊

御崇敬候御訳合、且又御灰塚招魂墓等之訳は不相知候

得共、寛文十年比迄は現在御石塔有之候儀は無相違候付、此節別段
御石塔一基御建立被仰付候条、穆佐中は勿論一統奉尊信、御祭式等是迄之通入念執行いたし候様被仰付候、左候て枯骨之儀は前条通慥成証拠無之候付、右之処江瘞骨塔と銘文彫刻之石被建置候、左候て是迄被召建置候石碑之儀は、故障之儀も有之候間、取除被仰付、碑文之形行は別段書付を以寺家江屹と被渡置、後年紛敷無之様被仰付候、
右之通被仰付候、
御石塔恰合并場所之儀は追て申渡、寺家江被相渡候書付も、追て可被相渡旨、寺社奉行并穆佐地頭江申渡候間、
御石塔恰合并場所之儀致吟味、寺家江被渡置候書附も、取しらへ可申出候、
正月　豊後

〔参考　包紙ウハ書〕
〔朱書〕
六拾七番
穆佐悟性寺江

義天様御石塔新規　御再興被　仰出、右ニ付御石塔御恰好・御場所柄等致吟味可申出旨、豊後殿より被仰渡候御書付壱通、安政三年辰正月廿一日上村休兵衛江被成御渡候付、白木御文書拾番箱江納置之候事、
〔東大史料編纂所所蔵、他ニ追録旧記雑録〕
〔鹿児島県史料旧記雑録追録八）所収〕

五九六　名越盛光へ書翰　正月二十九日

一此度千鰯掛り之義申付候、右は発起之事ニて損失も有之候間、人により不案ニ相考候様子も有之哉と存候間、其方江も掛り申付候、何事ニよらす手広ニ利益相成候儀は、取発は損亡も多き訳ニ候間、損失出入之事は、四五ヶ年之内は無構取計可申候、初発より利益相見得候様成事は、後年大益は無之物ニ候間、此段能々心得可申候、
一金子之出所無之候ては、十分ニは参兼候、右は昨年承候へは、沖永良部惣買入後之一昨年分之益七千両程有之段は申来居候、昨年も大かた六七千之益ニ相成居可申、右之内田中と申呉服所之拝借二千両は差出候様、先比申遣候間、跡ニ少ナク候共一万二千両は可有之と存候、此金筋は初発より存寄有之候間、外ニ手掛不致様申置事故三嶋方ニ其侭可有之と存候間、右之内より

二千ニても三千ニても、務より申出次第ニ取上候て差出候様可取計候、左候て右在金之員数も昨年と一昨年取合セ如何程之積金ニ相成居候哉、三嶋方より委細為申出候て、届申遣候様可取計候、様子次第ニては不残用部屋江取揚置、庭之土蔵江入付候様可致と存候間、先一昨年之員数、昨年之員数為書出申遣候様ニ存申候、大坂近権之一条等ニて、〔大坂銀主、近江屋権兵衛カ〕不行届之事も御座候間、以後明細ニ承届候考、且手元ニ少々無之候ては、万事之為不都合ニ候間、旁右之金筋様子次第取揚置可申哉と存候事ニ候、此節地震ニ付ても頓と差支、無拠手元計ニて、町人ニ無之四万両程借入申候、左候て当年は大坂より臨時之金は成丈ケ不取寄相済候手段ニ御座候、借入返済之金筋も大かた心当も有之候、大砲船入用代金、金山前借等ニて見込み置申候、趣法方申出次第用部屋より金子相渡申候、余程取締ニ可相成と存候、近権格式申付候等之儀、豊後も余程不念之訳ニ有之候、務より申遣候書面ニは朱書ニて返事申遣し、同人江遣候間、同人より見セ可申と存候条、能々無手抜可取計候、

一地震之儀、中々筆紙ニ難尽候、上屋しき住居は来年迄其侭ニて、夫より建替と存候、奥は別ていたみ、書院等は柱折れ候も不少候、

一近来郷中之振舞不行儀多く、別て高見馬場等不宜哉ニ粗承り伝候、此方より申遣候ては余り事立申候、弥右様之義も有之候ハヽ、家老より少々厳敷申渡候ても可然と存候、はま投ケ様之事差留メ申度事かと存候、見聞勘考之上、駿河江申候て可然と存候事、

一当春御暇之願も出候へ共、未タ何とも不相知候へ共、辰之口気むつかしく、且又例之御縁辺之一条少々ツヽ、動き候様子ゆへ、いつれ来春之下向ニ可相成と存候、弥之事相知候得は、雪庵中暇可申付候、左候へは地震之恐れ御座候間、表休息之辺、大奥寝間建替度事も有之候間、委細同人ニて可申遣候、宜敷可取計、尤極上之材木ニは不及、手丈夫之処第一ニ致度考ニ候、此段も序故申遣置候、先は用事迄申入候也、

正月廿九日

〔印(繊)〕　〔印(繊)〕

〔奥封ウハ書〕
用事

彦大夫江
〔鹿児島市磯尚古集成館所蔵〕

五九七　琉球国大里王子・三司官へ琉米条約取計振の件について家老達　正月

琉球北亜米利加合衆国和約之箇条書、互ニ取替候付、以来取計振之覚、

琉球江唐船異国船渡来之節取計向之儀、寶永元申年、其後嘉永元申年、夫々御条書等を以て被仰渡置、属島迚も是迄右之御規定ニ基被取計来候処、嘉永六丑年、合衆国之使節提督日本江戸江渡来、和約之儀申立、翌七寅年、御免許を受、互ニ約条書御取替し相成候処、帰帆之砌琉球江も渡来、於日本和約御免之条書差出、琉球も是非可致和約旨申掛、彼方より箇条書認来、総理官等印押調候様頻ニ申立候付、琉球は前明以来唐国之藩邦ニて、国家之大事彼国江不得差図候ては難相成、殊ニ国主幼少ニて、今程難致決着趣共品々理解、精々被及断候得共、更ニ不致承引、既ニ手切ニも可及勢、進退危急ニ迫り、不得止事、夷人方差引川上式部・在番谷川次郎兵衛其外御役々江相談之上、箇条書之内故障付候文句相除、総理官等印押調被相渡、彼方よりも同案相渡、互ニ約定書取替候趣共、委曲被申越候付、形行を以江戸・長崎江被及御届候処、於日本亜人共志願之箇条御約諸相成候末之儀ニて、何そ御不都合之訳も無之、御老中阿部伊勢守様・松平和泉守様、長崎御奉行水野筑後守殿御聞置相成候、然は於琉球ハ、去ル辰年以来佛・蘭両国より夷人迄も差渡置、和好交易等之儀種々難題申掛候得共、国難を凌、法律被守居候処、前文通於公辺約定御取替しの上は、今度約定丈之儀ハ、以来其通取計無之候ては、亜人共致承服間敷、勿論約定之趣も、大抵是迄会釈来候訳ニて、格別国中之妨相成候廉も不相見得候付、箇条書迄之儀は、何れも琉球手限りニて、永年ニ至り精々厳格之取計候様被　仰付候、左候て諸品雑人共夷人相対之取遣は急度不相成、日本之御約定も其通ニ候間、右江基万事無手抜様可被取計候、其外彼等ニ随従いたし、彼国政令を信仰、且は夷人共江馴親ミ、密々西土之邪宗ニ被引入候様之儀共有之候ては、以之外成事、第一日本之御大禁を乱し、国家之滅亡ハ申迄もなく、被対

公儀御末代之御瑕瑾、誠以不容易御訳合之事候付、重役初末々迄も其旨を厚存、後年ニ至り聊以緩之儀共有之間敷候、将又此以後は属島之内江も亜船追々渡来、薪・水・野菜等致所望、其序ニ種々之難題申掛候儀も

可有之候間、是迄より一涯手堅、毎物厳格ニ可被致取締候、

一大島・徳之島・喜界島・永良部島之儀は、琉球属島之内ニ候得共、先年来其許在番同様ニ、御役々之内より代官并見聞役等被差遣置、一島之仕置諸事差引候、然るニ右島々江亜人共渡来、野菜類所望いたし候位之儀は、島役計ニて可相済候得共、依時宜ては何程之難題欤可申立も難計、然は去ル午年佛蘭西大総兵其許江渡来之砌、琉球三十六島之内八ヶ島は、度佳喇島江借米為償用、其島之産物直ニ彼島江致取納、何も彼島構之旨被申聞置候付ては、大島其外島々江は日本人罷渡、諸事致差引候儀、夷人共案内も可有之候付、此末自然島役共手限りニて難取鎮儀致到来候ハ、様子次第代官等出向、其場相応可致取計、勿論島々ニて日本人夷人江出会候ハ、寶島人と相唱候様以前より御規定ニも相成、従往古寶島と琉球島々互ニ通融之段は差知候付、右島々之儀前文之通訳合も有之候得は、寶島人等致差引候儀、仮令唐国等江響合候ても何そ故障付候儀も無之、向後右通可取計候間、其通可被相心得候、

一亜米利加江約定取替し相成候付ては、亜人は勿論其外異国船、猶以繁々渡来も可有之候間、第一国中之政事万端可被入念、反覆ヶ間敷夷人共国法を妨、己か権威ニ誇り、強情ニ罵、或奸智を以人を懐、彼等意中ニ落し入、属国同様ニ押付、何様欤悪様之所業取企候半も難計、中々以一切油断難成者共ニ付、向後役々は勿論、士并末々百姓ニ至迄、律義を守、聊卒爾之儀無之様、急度可被致取締候、万一何そニ付小事之行違有之、随分此方道理雖有之、大国と小国之取会、彼是難応訳合も可有之、折角此方之越度無之様可入念儀、専要之事ニ候、

一琉球之儀、只今通異国船繁々致渡来候ニ付ては、漸々及疲弊、終ニは国中難立行儀必定之事故、急度趣法を替、以来異国船より諸品所望ニ於てハ、仮令雖為小、品柄ニ応し、金・銀・銭之間を以代料可被相受取候、尤琉球之儀金銀不致通融国柄候共、是迄通蔵方致格護置候ては、猶以国中迷惑も可有之候ニ付、右は役々方江相請取置、追て琉地通融之品を以金銀等之員数ニ応し、水引之者江可被相渡候、

一亜人共用向付致上陸候ハヽ、公館又は寺内等江招入可被致用弁候、何様無余儀筋合申立候共、人家江為致出

入候儀急度不相成、於日本も武家町家江立寄候儀は御停止ニて、御約定ニも其通相成居候付、御法令ニ基緩之義無之様可被取計候、

一琉球那覇於別処ハ、薪・水・食料迄其所之役々より可相渡、其外何程雖為軽品不可致取遣、強て於求申ハ那覇ニて可相渡候間、彼地ニて相求候様丁寧相論、精々申断候様可被致候、

一琉球は勿論、支配之島々ニて亜船致破船候ハヽ、其所之人数を掛、人荷物共可成程致救助、最寄之寺中又は人家明除召入置、昼夜堅固ニ番人付置、丁寧致介抱、就中荷物之儀入念、何程雖為軽品夷人相対ニ取集、能々可為致格護、勿論其島江は諸事為差引、首里役々之内より一左右次第直ニ可被差越、船之儀加修復用立候ハヽ、夷人相談之上取繕帰帆可被申付、自然大破ニ及用立兼候ハヽ、夷人共立会見届船滓迄も可被致焼捨候、左候て人荷物は、追て亜米利加渡来之節、其船之乗頭江申入、人荷物破船等之形行委曲一帳書記、夷人共江堅固ニ引渡、自から手抜ハ無之筈ニ候得共、爰許江も可被申越候、尤右破船之場所小島ニて、夷人共長々召置、迷惑可相成候ハヽ、委其訳を夷人共江申論、琉球地方之内江列越、致介抱置候様可被取計候、右通難民取扱候費用之目料は、亜人共より可致償約定相成候付、双方後患無之様慥ニ証書迄も取替置候様可被致候、

一亜船渡来之節、夷人共諸所歩行等之節は掛役々付添致取締事候処、其儀は絶て相断、今度之約定ニも、地方之人付添不致窺探様、万一夷人共人家江踏入妨婦女、或押買其外不法之所業取行候ハヽ、其人を搦捕、船頭、乗頭江可引渡、左候ハヽ、彼方ニて其罪を行候ニ付、非道ニ不致打擲様約定相成候得とも、其通而已ニ相心得候ては緩相成、下々に至り候ては国禁礼法も弁薄く候ニ付、何様行違之儀出来も難計候付、夷人共歩行等之節は何程差咎候共、精々隠密ニ忍役々付添手堅可被致取締候、右体之儀緩怠過候ては国難差見得候付、聊不可有油断、且又夷人共不法之挙動有之難差置時宜候共、随分其場致堪忍、手荒不致取扱、精々穏便ニ取計、其者相捕乗頭江子細申分厳格ニ可引渡候、万一此方越度有之候ては、却て殃を求、違乱之基候間、能々可被入念候、

一亜人死失之者琉球江葬度申出候ハヽ、極置候場所江土葬可被申付、尤破船等之節、死失之者を可成極置候場

所江可葬儀、当然之事候得共、端島之場所も可有之候付、其節之時宜次第後患無之様可被取計候、

一亜米利加船渡来之節は、約定之通水引船港外江差出、風波之患等無之場所江案内可為致船懸、左候て水引之者江は、為謝礼西洋銀等船中より可相渡候、右金・銀・銭は相屯置、時々御国許江可被差登候、左候ハ右銀高ニ応し、琉球為筋可相成品物等可被差下候、金・銀・銭被差登候付ては、夷人共相尋候節、差支ニ相成候との事ニて、是迄格護相成居候段尤之事候得共、前条通約束も相済候上は、年限も無之、無益ニ格護相成候ては、迷惑眼前之事ニ候間、以来夷人共相尋候ハヽ、当国通融無之候間、無致方寶島人江相渡候段可被相答候、

一寶島人江夷人応対之儀申掛候ハヽ、此儀は日本堅制禁ニ候間、琉人共申聞候儀不相叶段可申聞候、

一亜米利加船之儀、其許は勿論日本江も追々可致渡来、左候ハヽ琉球表始終之次第は、時々下田・箱館等ニて、何も有筋可申出候付、諸事取計振之儀共は前条之通ニて、是迄よりハ猶又万端入念、乗組人数、又は滞船中之形行、聊タリ共間違筋之儀無之様書面ニ相記、且又不見馴品物は絵図面等ニて、届向之儀ハ何廉先年来規定之通、摂政・三司官連名を以、拙者共江可被申越候、

一西洋金銀之儀ハ、琉球其外島々迄も通融之儀不相成候、且又西洋金を唐国江持渡候儀、又は日本之武器類・金・銀・銭・銅・鉄夷人共江相渡候儀、急度差留候条、支配之島々迄も禁制可被申渡候、

右は此度北亜米利加国江和約之儀取極、互ニ箇条書迄も被致取替候付、後年ニ至り合衆国迄は何も約定之通可被致取計候、尤唐船其外異国船渡来之節は、是迄之通寶永又は嘉永度之仰渡ニ基、夫々被差渡置候御役々江も時々致相談、諸事無手抜可被取計候、且又阿蘭陀は勿論亜米利加・魯西亜之船々は、追々日本江も渡来、欠乏之品は長崎・下田・箱館等ニおいて可被成下旨、御約定も有之、英吉利・佛郎西ニも追々相願候ハヽ、同様可被　仰出御様子ニ被相伺候付、其心得ニて、薪・水等所望次第被相渡、代銀可被受取、尤品物を以交易之儀は、是迄之通急度令禁制候、自然違背之族於有之は、可被処厳科候条、末々迄も聊緩之儀無之様、堅固ニ可被致取締者也、

安政三年辰正月　　樺山伊織
　　新納駿河

末川近江
島津石見
川上筑後
島津下總
島津豐後

大里王子
三司官

（大日本古文書（幕末外国関係文書）所収）

五九八　年頭七夕等着用衣服について家老達

二月

一年頭ニ付熨斗目着用之儀、以来朔日より三日迄相用、
四日六日（より脱カ）迄不洗麻、七日・十一日・十五日熨斗目、御
式台向其外御式ニ相拘候面々は、是迄之通朔日より七
日迄、十一日、十五日熨斗目着用被仰付候、
一七夕之儀、依家格等白帷子致着用来候得共、以来都て
染帷子着用被仰付候、
右之衣服汰汰之儀、此節従　公義被仰渡趣も有之候付、
以来右之通被仰付候旨、於江戸申渡相成候段申来候、
此旨向々江不洩様可致通達候、

二月　下總　近江　駿河　伊織

一正月廿八日并上巳ニ付、熨斗目相用来候得共、以来服
紗・麻、
一八朔は是迄之通、
一重陽、青物依役場致着用来候得共、勝手次第可致候、
一節分ニ付、奥向之面々熨斗目相用来候得共、以来服紗・
麻、

右之通被仰付候旨辰二月仰渡、

（石室秘稿中、藏藩古今要章漫録所収（国立国会図書館所蔵））

五九九　諸役人等着用衣服について家老達　（二月カ）

一年頭ニ付、諸御役人以上并家格ニ付朔日より三日迄熨
斗目着用、四日より七日迄不洗麻、八日より平服、十
一日より十五日、廿八日熨斗目致着用来候得共、以来
不及熨斗目候、
但御式ニ相拘候面々は是迄之通熨斗目致着用候様被
仰付候、
一上巳之儀、不及熨斗目服紗物、
右之通被仰付候、左候て服製ニ付ては、去ル子年被
仰出置候通、御製禁之品ニ紛敷古物迄も一切不相用様、

御供之節も木綿類相用候ても不苦候、肩絹袴等之儀は、時節ニ不拘麻木綿単物等相用、衣服之儀も右ニ準、且平日出勤其外御祝儀事等之節は、時服相用候様被仰付候条、被　仰出之　御趣意屹と相守り、乍此上成丈ケ麁服可相用候、此旨向々江可致通達候、

（二月カ）
正月　　下總　筑後　駿河　伊織

本ノママ
（石室秘稿中「藩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵））

六〇〇　震災救恤のため江戸城等修復の課役献金を免ずる幕令の藩内布達　二月

六〇〇の一　大目附江

近年異船（渡カ）到来ニ付御備向御用途多之砌、今般地震ニ付ては御城内外（寛永寺・増上寺）両山御宮御霊屋等及大破、其上東海道筋關東筋川々御普請御入用等莫大之儀ニ付、此度禁裏御所御普請ニ付ては、天明度先格之通、五万石以上之面々江御築地方御入用献納被　仰付儀ニ候得共、於諸家も近来海岸防禦武備手当等物入多候折柄、此度之震災等ニて猶又入費不少儀ニ付、格別之思召を以、今度之御築地方は献納ニ不及旨被　仰出候間、其段五万石以上之面々江可被達候、

（二十九日、幕府老中達）
十二月

六〇〇の二　大目付江

近年異国船渡来ニ付御備向御用途多候砌、禁裏炎上且今般地震ニ付ては、御城内外両山御宮堤除迄も夥敷致破損候付、夫々御手伝被　仰付筈ニ候得共、何も江戸屋敷其外地震ニて及大破、致難儀候折柄ニ付御城内外并両山御宮御霊屋御普請ニ至迄、思召を以、公義皆御入用被仰付御手伝は被仰付間敷旨被仰出候、万石以上之面々江寄々可被相達候、

（二十九日、幕府老中達）
十二月

辰二月

（石室秘稿中「藩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵））

六〇一　松平慶永へ書翰　三月六日

○在江戸島津齊彬贈在江戸松平慶永書（安政三年丙辰三月六日缺）

尊書辱奉存候、愈御清栄奉賀寿候、昨日は御光駕無之、残情不少奉存候、扨勢州江申遣候儀云々奉拝承候、中々書中にて申候共相分候義無覚束、いつれ対面ならては知兼可申候間、十五日逢候節に様子相探り、万々可申上、尤様子相分り候はゝ、御発駕前へ御取込と奉存候得共、鳥渡罷出可申上、しかし手紙にて相分義に候

ハ、、以書面可申上、御発駕前一度ハ拝顔仕度奉存候、其外申上度(義脱カ)も有之候、近日万事可申上候、頓首、

三月初六

猶々、御自愛専一に奉存候、取込乱筆御仁免奉希候、以上、

春嶽公閣下　　齊彬拝

(旧幕府所収(戸川安宅編)、他に昨夢紀事(日本史籍協会叢書))

六〇二　近衛忠熙へ書翰（使者口上による）　三月十四日

右府様

松平薩摩守

弥御勇健被成御座、珍重御義奉存候、然は私義先月二十八日登城仕候処、阿部伊勢守より別紙之通御縁組可被仰付旨、御内意御達承知仕、難有仕合奉存候、就ては御所様御養女御内談被仰進候由、何共難有仕合、冥加之至奉存候、猶又此末御余光之程奉仰候、依之側向以使者御内々御礼、且御吹聴申上候ニ付、目録之通進上之仕候、

三月　　内使者

川上郷兵衛

〔参考　阿部正弘より島津斉彬へ達（二月二十八日）〕

公方様御年若之御儀に付、姫君様方并本壽院様より御再縁之儀厚御願之趣も有之候に付、御聞届被遊、御縁組可被為在旨御沙汰に候、併御再三之御事、殊更当時厳敷御倹約中之折柄にも候間、諸事格別御省略御手軽に御縁組御取結之思召に候、就ては其方娘廣大院様之御先例を以、近衛殿御養女に被仰出、御縁組被為在候はゝ、御親みも弥増恐悦之御事に候間、右之趣京都表へ御内談被仰進候に付、彼地よりの答有之次第、表立可被仰出候得共、此段為心得無急度申聞置候様にとの御沙汰に候事、

(順聖公年譜稿所収(東大史料編纂所所蔵))

〔参考　阿部正弘より近衛忠熙へ書翰（二月二十八日カ）〕

公方様御年若之御儀ニ付、

姫君様方并

本壽院様より

御再縁之儀厚御願之趣も有之候付、

御聞届被遊、

御縁組可被為　在旨、

御沙汰ニ御座候、併御再三之御事、殊更当時厳敷御倹約中之御折柄ニも御座候間、諸事格別御省略御手軽ニ御縁約御

取結之
思召ニ被為　在候、就ては松平薩摩守娘兼て之御由緒柄、諸事廣大院様之御振合を以御養女ニ被　仰出、御縁約御取結被遊度
思召ニ付、其段御熟談いたし、取極候て、表向申上候様薩摩守江相達候旨、年寄共より申越候、右ニ付此度薩摩守娘御養女ニ被成候儀、表立被仰入御座候様仕度奉存候、尤御先格之趣とは自然相違之御振合も可有之哉ニ候間、此段も申上置候、

〔陽明文庫所蔵〕

〔参考　近衛家より島津斉彬へ返翰〕
愈御勇猛被成御座、珍重思召候、然は先月二十八日御登城被成候処、阿部伊勢守殿より御別紙之通御縁組被仰出候御内意御達之旨被成御承知、就ては此御方御養女御内談可被仰進由に付、御側向より以御使者、御内々御挨拶御吹聴被仰進、御口状之趣委細被成御承知、於此御方も御大慶之御義幾久敷目出度、猶追々可被仰合と思召候、右に付御目録之通被進之、深御満足思召候、仍御返答被仰入候事、
三月
右に付大納言殿へも御目録之通被進之、御満足思召候事、
〔順聖公年譜稿所収（東大史料編纂所所蔵）〕

六〇三　書役小役人願に付音物沙汰并に勤方拝命の節集会等の厳禁について家老達　三月二十九日
書役小役人勤方被仰付候節、集会沙汰之儀不相成段は、前々より申渡有之通候処、間ニは心得違之向も有之哉之由、且亦右勤方願等ニ付ても夫々音物差送り、願意不相達候節は困窮成面々甚致迷惑候も有之哉ニ相聞得旁以不可然事ニ候、依之右式勤願ニ付前以進物いたし候儀は勿論、勤方被仰付候後手軽儀ニても、色々と名付集会堅令禁止候条、たとへ音物差贈候ても、奉行頭人等決て致受用間敷候、此旨向々江不洩様可致通達候、
三月廿九日　　下總
筑後
近江
駿河
〔新納久仰雑譚（東大史料編纂所所蔵）・石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」（国立国会図書館所蔵）所収〕

六〇四　諸郷・私領・町家の者等願筋に付音物沙汰の厳禁について家老達　三月二十九日
諸郷私領或町家之者共、諸御役場江願筋之内意申入、

又は願書内見等差出候節、色々音物差贈、其内ニは賄賂ヶ間敷致進物候も有之哉ニ相聞得、此儀第一風俗乱れ立御政事向之妨ニ相成候間、曽て右体之儀無之様、天保五午年申渡、猶亦嘉永五子年町人等之進物一切不相成段、分て被仰出候趣も有之、昨乙申渡置通ニ候処、頃日猥ニ相成、賄賂ヶ間敷進物差贈候も有之哉ニ相聞得、別て不埒之事ニ候、向後内意事等は勿論、軽品たり共音物差贈候儀は一切不相成候条、諸郷私領江不洩様申渡、町家江は分て厳敷取締可申付旨、町奉行江申渡候間、向々於御役場も承置、致壁書等置候儀は其通ニて、御奉公筋廉直ニ可令精勤旨、向々江不洩様可致通達候、

三月廿九日　下總

筑後

近江

駿河

（新納久仰雑談所収（東大史料編纂所所蔵））

六〇五　諸役場御用取扱方並に賄賂沙汰の厳禁について家老達　三月二十九日

一何その願事且内意向之儀ニ付、其掛を迦し、或下役等より頭人を差越へ直進達等無之様との儀は、従前々申渡通ニ候、猶亦手寄を以内意等曽て不申込様、寛政之度分て申渡之趣も有之候処、近年みたりニ相成、別て不都合之事ニ候、向後右様之儀共一切無之様、急度可相守候、

一町人其外商人等より向々江相付訴訟事之節、諸役場取扱之面々依訳は等閑ニいたし、願人共より内意音物等ニ預り、且又差て入組も無之儀を事ヶ間敷振合ニて、長々手前ニ扣置候故、内意音物等も再三ニおよび、自然と賄賂之筋ニ成立、願人は物入いたし候上、依吟味願意不相達儀とも候得は、猶以及迷惑ニ候も有之哉ニて、旁以不可然事候付、右式之儀取扱之面々一涯身分を嗜、諸事無私廉直ニ遂吟味、速ニ相片付可申候、惣て諸向共右ニ応し、頭人下役共専役職を相励、御奉公之本意を不取失様、寛政・天保之度分て申渡有之候処、近年内意音物等甚敷、就中蔵方等之御心付向、且ハ御領内旅行勤等相願候面々、音物沙汰みたり之聞得有之、縦令軽品たり共賄賂ヶ間敷、第一風俗乱れ利欲ニ趣候媒ニて、御政事之妨相成、別て如何至極ニ候、夫々糺方等ニも可及事候へとも、其通ニては致迷惑候者も可

有之候間、此節迄は被成御宥免候間、以来寛政・天保之旧制通急度取違無之様、万端正路ニ可相守候、自然乍此上訴訟事等之節、前以音物等差贈候はゝ、都て差返し、於向々御用向不苦分は宅江持帰り取しらべ、吟味事等決て不及遅滞様、一統励合可致精勤候、右ニ付てハ大目付江相達、見聞をも掛置候条、若哉違背之者も候ハヽ、無用捨屹と可及迷惑候、右之通向々江不洩様、御役場毎ニ壁書記し置、堅固ニ可相守旨可致通達候、

三月廿九日　　下總
　　筑後
　　近江
　　駿河

〔新納久仰雑譜（東大史料編纂所所蔵）・石室秘稿中「藩法古今要章漫録」（国立国会図書館所蔵）所収〕

六〇六　吉野馬追等の見物について家老達　三月

吉野御馬追其外何そニ付、町人又は家来末々之者共、見物ニ差越候節、陣笠相用候者共有之哉ニ相聞得、別て不相当之至候条、以来屹と不相成候、老人家来砲術調練等勤務ニ付相用候儀は、是迄之通可相心得候、此旨向々江不洩様可致通候、（達脱カ）

但吉野御馬追ニ付、三町年寄年行司串目立為差引差越候節、野袴着用為致来由候得共以来着用不相成、股引可相用候、

三月　　近江

〔石室秘稿中「藩法古今要章漫録」・「安政元年甲寅藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六〇七　諸役人勤務心得等について家老達　三月

諸御役人并書役・小役人・軽者迄も年功を申立、類列（例カ）を以規之様相心得、転役昇進等之儀向々より申出、其御取訳被仰付候も有之候得共、向後勤方一篇之年功迄ニては容易ニ御取揚無之、格別御用立勤功有之者は、吟味之上被仰付候儀は別段之事ニ候、

一諸御役人其外以前より定数被究置候処、過上之御役場而已ニて、近来は猶更多人数及過上候付、過上之御役場より下之御役場ニても、欠跡等之節は差繰可被仰付候、且又依御役場御用差支候ても、可成丈定人数ニて繰合可致精勤、書役・小役人等も追々助役等之嵩ミ申出候儀有之候ニ付、同断繰合致精勤、嵩ミ等は向後屹と不被召入候条、是迄過上之定（脱アルカ）数通り減少之儀、迷惑

ニも可有之候得共、此涯成丈ケ繰合可致減少候、今般分て被仰出候趣も有之候付、諸向深汲受早出可致精勤候、尤難仕応御用向は、長詰等いたし夜入燈等相入候ては念遣も有之候付、仕課兼候御用向、不苦分は家江持帰り取調、御用向速く相弁、不及遅滞様致精勤候儀肝要ニ候、

一諸役人之内長々病人ニて罷在、兎角出勤難叶向は、御役御断可申出儀当然候処、長々病気ニて引入候者も百日目毎ニは別勤等之筋、又は一日致出勤、百日引入之届不申出、間を合せ置、百日引入候向も有之哉ニ相聞得、別て不束之事候条、向後右体之者は同役中等よりも気を付、屹と御断申出候様可取計候、書役・小役人等は奉行頭人専気を付、同断可取計候、

右は文化之度、其後も追々被仰出置候趣も有之候処、近来年功を申立、転役昇進等之儀内意申出候向も有之哉ニ相聞得、又は別て多人数相嵩ミ候御役場も有之、取扱不束之処より右次第ニ付ては屹と御沙汰も可被遊御事候得共、過去候儀は被遊御宥免、不被為及　御沙汰候間、向後屹と前条之ケ条ニ基キ、心得違之儀無之様可致取扱候、尤向々奉行頭人等江も申渡置候様被仰出候、右之通去ル午年被仰出、翌未年も細々申渡置、人々奉承知候通ニて、聊忘却は有之間敷事候処、間ニは勤は四ツ八ツ限候事之様相心得、人数減少等之儀汲受薄向も有之哉ニ相聞得、又は転役昇進等之儀不勘弁内意申出候向も有之、第一仰出之御趣意ニも相戻り、別て不可然事候条、前文被仰出候趣、聊以心得違之儀共有之間敷候、此旨向々江不洩様可致通達候、

三月　下總　筑後　近江　駿河

〔石室秘稿中「藩落古今要尊漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六〇八　島津久寶外へ篤姫養女成並に縁組の件について島津齊彬側役達　四月（朔日カ）

島津豐後

右は

篤姫様御儀、

近衛様御養女御取結、

公義江御縁組御内意に付、御用掛被仰付候条、可申渡者（旨カ）被　仰出候、

四月　　竪山武兵衛

竪山武兵衛

山口直記
蒲生郷右衛門
三原藤五郎
半田嘉藤次
早川五郎兵衛
西筑右衛門
中山次右衛門
山田壮右衛門
岩元太右衛門
重久其悦
上村良節

右は
篤姫様御儀、
近衛様御養女御取結、
公義江御縁組御内意に付、御用掛被仰付候条可申渡事、

御用人
菱刈杢之介

御使番
高崎喜兵衛
長崎助左衛門

御広敷御用人
入江市郎左衛門
福永仁右衛門
梶原清右衛門

御右筆
亀山甚之丞
大迫藤十郎

御目付
三原喜之助
迫水孫次郎

御広敷番之頭
相良四郎兵衛
吉崎壮八郎
伊集院卯十郎

長崎御付人

奥掛書役勤
迫田甚蔵

御右筆
右同
養田傳兵衛

御家老座
書役　山口喜三右衛門
　　竪山郷之丞

右は
篤姫様御事、
近衛様江御養女等之儀被
仰出候は、右之通御用掛可被仰付哉之事伺相済、四月
朔日被　仰付候事、

御用部屋書役勤　伊東正兵衛
右同書役　能勢権之助
　　有馬仁右衛門
〔順聖公年譜稿所収（東大史料編纂所所蔵）〕

六〇九　近衛忠熙へ書翰　（使者口上による）　四月八日

右府様

松平薩摩守

愈御勇健被成御座、珍重御義奉存候、私事去る朔日登城仕候処、別紙写之通、阿部伊勢守より承知仕候ニ付、御請御礼申上置候、右ニ付早速家老差登、御熟談可申上候得共、其内右之趣以使者申上置候、

使者　四月　伊集院太郎右衛門
〔陽明文庫所蔵、他に順聖公年譜稿所収（東大史料編纂所所蔵）〕

〔参考　近衛家より島津斉彬へ返翰〕

弥御勇猛被成御座、珍重思召候、然は去朔日被成御登城候処、篤姫様御事此御方被成御養女御縁組可被為在旨、就ては御熟談被成御取極候て、表向より御申上有之候様、阿部伊勢守殿より御別紙を以御達被申候に付、為御熟談御使者為御差登、御口状之趣委細被成御承知候、此御方も公辺並其御方様被為対、御由緒柄御親みも弥増、幾久敷御満足思召候、則右府殿御養女之義目出度被成御領掌候、就ては禁中へ御養女之御願書、早々可被差出候、仍て御返答被仰入候事、

四月　〔順聖公年譜稿所収（東大史料編纂所所蔵）〕

〔参考　阿部正弘より島津斉彬へ書翰（四月朔日）〕

先達て内々相達候通、其方娘近衛殿御養女に被仰出、御縁

組被為在候はゝ、兼て之御由緒柄御親みも弥増恐悦之御事に候間、右之趣京都表へ御内談被仰進候処、思召も不被為在旨申越候、就ては御養女之義、近衛家江熟談被致取極候て、表向より右之趣被申上候様可被致候、最委細之義は京都表へも申遣候事に候間、右之心得を以能々被致示談候様にと存候事、

〔順聖公年譜稿所収（東大史料編纂所所蔵）〕

〔参考　篤姫より近衛忠熙へ書翰〕

右府様

あつ

愈御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、然は去ル朔日私事御養女御熟談申上候様被仰出、誠以冥加至極、恐入難有仕合奉存候、猶幾久敷御余光之程偏ニ奉仰候、此段以使者申上候、

使者

四月　　平田伊兵衛

〔陽明文庫所蔵〕

六一〇　近衛忠熙へ書翰（使者口上による）　四月

中旬

右府様

松平薩摩守

兼て及御内談置候通、篤事当御所様御養女被為成候儀、弥以御熟談仕申立候様、別紙之通、阿部伊勢守より御内意致承知、難有安心仕候、依之表向為御引結、以使者申上候、

〔十四日カ〕　使者家老

四月　　島津伯耆

〔陽明文庫所蔵、他に順聖公年譜稿所収（東大史料編纂所所蔵）〕

〔参考　近衛家より島津各彬へ返翰（四月十五日）〕

弥御勇猛被成御座、珍重思召候、然は去朔日被成御登城候処、篤姫様御事、此御方被成御養女御縁組可被為在旨、就ては御熟談被成御取極候て、表向より御申上有之候様、阿部伊勢守殿より御別紙を以御達被申候に付、為御熟談御使者為御差登、御口状之趣委細被成御承知候、於此御方も公辺並其御方様へ被為対、御由緒柄御親みも弥増幾久敷御満足思召候、則右府殿御養女之義目出度御領掌被成候、就ては禁中江御養女之御願書被差出候処、昨十四日御願之通被仰出畏思召候、依ては御返答被仰入候事、

四月

〔順聖公年譜稿所収（東大史料編纂所所蔵）〕

六一一　近衛忠熙へ書翰（使者口上による）　四月

中旬

右府様

松平薩摩守

篤姫様御養女之儀、弥以御熟談仕申立候様、阿部伊勢守より御内意致承知候付、表向御引結之議以使者申上候処、速ニ御領掌被成下難有奉存候、仍て不取敢以使者御礼申上候付、目録之通進上之仕候、

使者

嶋津伯耆

四月

〔陽明文庫所蔵、他に順聖公年譜稿所収（東大史料編纂所所蔵）〕

〔参考　近衛家より島津斉彬へ返翰〕

松平薩摩守様へ

御返答

愈御勇猛被成御座、珍重思召候、然は今般篤姫様御養女為御引結、御使者島津伯耆為御差登、依之時候為御見舞御目録之通被進入、御念候儀御満足思召候、

大納言殿

雅君御方

信君御方

右御同様ニ付、御見舞御使者被進御満足思召候、

薩摩守様

御奥方様

右御四方より

右御同様御満足思召候、

〔陽明文庫所蔵〕

〔参考　近衛家用人へ京都留守居伺（四月十七日）〕

〔封紙ウハ書〕

「松井丹後介様　伊集院太郎右衛門」

林縫殿様

来ル廿辰半刻

参殿事

以手紙得御意候、然は側用人平田伊兵衛、此度篤姫様より之御使者として昨夕致京着候、就ては其御殿江右御使者何日何時比相勤候て宜御座候哉、御都合奉伺候間何分被為仰知被下度、仍て此段為可得御意如是御座候、以上、

四月十七日

〔陽明文庫所蔵〕

〔参考　篤姫より近衛忠熙へ書翰〕

一晒布　五疋

一御肴　一折

右府様

あつ

愈御勇健被成御座、珍重御儀奉存候、今般使者為差登申候ニ付、時候御見舞申上候、仍目録之通進上之仕候、

大納言様
雅君様
信君様江

右御同様御見舞申上候、

四月　　使者　平田伊兵衛（陽明文庫所所蔵）

六一二　篤姫養女成並に縁組の件について家老達

四月二十六日

大守様月次ニ付、去ル朔日御登城被遊候処、篤姫様御事近衛様御養女被仰出、御縁組被為在候は、御由緒柄御親モ弥増、恐悦之御事候間、近衛様へ御熟談被為在候処、阿部伊勢守様ヨリ被遊御承知候段御到来候、此旨御内々奉承知候様、月次御礼罷出候面々へ可申渡事、

四月廿六日　　駿河新納久仰

（石室秘稿中「安政元年甲寅藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵））

六一三　徳川齊昭へ書翰

四月廿七日

上　　薩摩守

申上

薄暑之節御座候処、益御機嫌能被遊御座恐悦奉存候、然は其後久々御機嫌モ不相伺恐入奉存候、此豚肉砂糖漬、此節従国許相届候間、御機嫌伺申上候印迄ニ進呈仕候、

琉国モ其後先静謐ニ御座候、佛国船（安政二年九月二十七日）モ去秋渡来仕候テ、約条（安政二年十月十五日）取カハシ候後、未タ渡来不仕候、唐国乱之儀モ少々鎮候様子ニ相聞申候、先ハ御機嫌伺申上度如斯ニ御座候、恐惶頓着、

四月廿七日

（島津家書翰集所収（日本史籍協会叢書））

六一四　諸役場吟味用書類の取扱い等について家老達

四月

諸向吟味しらへニ相下書付、至此（比カ）日殊之外隙取御用差支候儀共有之、不可然事ニ候、依品日延相成候儀は、其訳可申出旨分て申渡有之通ニ候処、兎角心掛薄所より吟味事等不致急斗、自分勝手向之訴訟又は年功沙汰

等之内意ハ遮て申出候哉ニ相聞得、平日忠之心掛及致精勤候上ニ候は、右様勝手向等之儀は、御取訳ニも可被仰付儀候処、向々勤向四つ八つニ為限事之様存、縦令仕掛之御用有之候共、八時差越候得は夫形召置、就中手紙差越書類為申知事迄も等閑ニ打過、当人及催促候得は却て事ヶ間敷振合ニて、色々ひねり掛諸向之者共猶以及迷惑候向之聞得も有之、弥其通ニ候得は甚御奉公方之本意を失ひ、第一風俗も不宜、旁別て不埒之事ニ候、向後急成儀は勿論、何そ入組之儀は早出長詰等ニて速ニ取しらへ、屹と御用筋致弁別候様、誠実ニ可心掛候、尤奉行頭人ニては下役之面々猶更等閑之風俗押移候付、役頭より万端ニ気を付、一涯差はまり、殊ニ当時は彼是御用多之砌ニも候間、於向々聊たり共費筋之儀共無之様、鎖細ニ遂吟味致精勤候得は、おのつから自然書役小役人等之重も申出ニ不及可相済事候条、自然勤方等閑之向も候ハヽ、同役より申諭、互ニ励合一統申談、各正路ニ可令精勤候、乍此上不守之勤場も候ハヽ、蔵方其外勝手向等之訴訟、先規も相替、平日之精疎を以可及吟味候間、至其節否申出間敷候、此段は前広申聞置候、

一支配有之候諸向、支配下之者共より何そニ付申出候儀共、奉行頭人江不相達、書役前等ニて差返、又は別て隙取相成儀も有之哉ニ相聞得、不可然事ニ候、奉行頭人承届差知難取揚儀は左も可有之儀候条、向後申出候書付等無滞様申談、無延引可遂披露候、

右之通向々江不洩様可致通達候、

四月　駿河

（石寄秘稿中「藩落古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵））

六一五　家老へ逗留佛人住家の件について琉球在勤の家来上申書　五月朔日

此節異国一件被仰渡候事々、何れも吟味仕、左ニ申上候、

佛人共辰年以来天久寺住居ニて相済来候処、何様之訳ニて引移相成候哉、住家向差支候は作足等ニて可相済、如何様無拠趣申立候ても、是非可断付之処無其儀、昨年被仰渡候趣も有之、商館等取建候様之儀欤、地面買取方申出るは（候カ）、尽術計是非可断付旨、玉川王子在番（蕃）方江、駿河殿より分ケて御達相成居候処、何とも御存外成事ニて、第一御懸念ニ被思召候箇条、暗ニ謀計に踏入（陥カ）候ては誠ニ御残念成次第、摂政・三司官抔如何心

得居候哉、自然亜・英国人共渡来ニて場所柄見立、松尾同様住家申付候時は、如何断ニ及候吟味ニて候哉と被仰越候事、夷人共江地方売渡、住家作立させ候儀、誠ニ不容易難題にて、最初より聖現寺江相住居、自然手狭候は作足ニて相済候様、段々相談申入候得共、聞取無之、強猛者共乱妨成立、然共地方売渡候儀は不相成、人家借住之方取計候様提督江相達、箇条ニも其通書記置候処、其後寺并人家抔借住ニては、主々追出、為及迷惑候故、不安心罷成と申、段々利解歎願も汲入無之、暴怒を以押付不及是非、聖現寺東表之松原は村迦ニて、右松原江造立之方致相談候処、坊主之様人家離江相住居候方相考居候段申候ニ付、他国人首里内江相住居させ候儀不被成段相達、猶又泊蔵屋敷并上泊辺、格別不差障場所柄見合相達候得共落着不致、場所柄等押々見分家作申立、強て相断候ては故障筋出来候機先差見得、小国之分力何分可取押様不罷成所より、応置候形行ニ候得は、重て本船渡来之節、時宜都合見合、箇条通借住之方ニ相談申入、其内取締向之儀、猶以厳格行届候様取計、且亦亜・英人共渡来、松尾同様住家申立儀も候は、当地之儀全体不自由之小邦、佛人共逗留ニ付ては所望物調弁旁、至て及難儀事ニて、住家作逗留之儀段々断も不聞入、押々之取計ニて国家必至と及難儀居候付、逗留佛人等も引取之方、彼提督重て渡来候は願可申入と含居候処、御方等迄致逗留候は敝(弊)国難立行、顕覆ニおよひ候次第相察、道そ取止度、幾重にも断申入可宜と奉存候、

一万一此後家之賃を出候上は、地面買取候は勿論なとゝ威張候時ハ、如何いたし取返候評議ニて候哉之事、住家之儀、前文通寺并人家抔借住ニては安心不罷成、何れ新ニ作調、尤此地計を以作調候付ては、料銀も不相渡は不本意候間、算面書ヲ以請取候様申募、段々断も聞分無之、賦書見せ候処、料銀内端ニして蕃銭八百枚押々差出候ニ付、先以後患不相成様請取候、証書も房屋一棟木料并細工価銀と書付差出、且箇条ニも地を借屋を借候と書付候付ては、家作料差出置候迚、地面迄買取候筋之申立は無之筈候得共、自然右様之申立共有之候は、請取書并箇条等之趣意を以、幾重ニも申達候方可然哉と奉存候、

一佛人より料銀八百枚相渡、本船渡来之上細工人共為見、公平之代銀可相渡申立候付、胸中ニは高銀と存候半、

若代銀引下方ニても申出候は、入目丈は代銀為差出候吟味ニて候哉之事、家作料之儀、最初普請取付候節賦方ヲ以大抵之員数申聞、既ニ普請成就住家引渡候砌は、現入目何程と相達置候付ては、本船渡来、細工人江為見、高銀と申候迚引下候ては、最初之達方不実之様取請、故障筋相成可申、尤右之普請料可成程請取不申方、平穏之取計ニ候得は、提督等渡来之節、他国人仮ニ相住居候房屋作料請取候儀不本意、勿論箇条書ニも地方房屋等為致借住候筋候間、内場相渡置候蕃銭は箇条通致返進、貨銀を以借住有之候様、相談申入候て可然と奉存候、

一松尾江手広住家造立、永住之姿ニ相成候付、追ては領事官等召置候底意欤も難計、御懸念至極付、左様之節断筋吟味之事、領事官召置候儀提督申立、箇条書も組入為有之事候得共、当地之儀至て不自由之小国、去辰年以来西洋船度々渡来、佛・英・亜人等長々逗留、日料所望物弁達方ニ付てハ、官役百姓那覇江詰込、国中之雑費不大形、夫故近年蔵方始諸郷ニ至、別て及困窮居候処、領事官迄相残候ハヽ、不自由之小邦何篇難応、猶更窮苦ニ蹈(陥カ)入候間、一国之人命救助之一筋を以、此儀は被取止度、段々手数を尽、頻ニ頼懸候付、其汲取為有之哉、領事官不残置、箇条書よりも、右一件は相除置申候、就てハ重て渡来、領事官召置候段申立候儀も候は、以前ニも申入候通、小国難応訳、平ニ申達、屹と断申入可然と奉存候、

一佛人住家之四壁江竹虎落ニても結廻し、精々縮置候方可取計と之事、佛人等住家之儀、松尾江所柄取窮、普請も早々取付候様申出候付、右松尾は四方通路筋多不締ニ候間、囲等可為致申入候処、囲ニは不及段達て断有之、就てハ押々仕調候様にも不相成、住家近辺以前より山内小路蹈明置候所江、あたん・ふくる木等植付させ候処、是又住家普請見分之砌、最初とハ相替、あたん・ふくる木植付置候儀、彼者共を恥め候仕形、甚落着難成、自然一々抜取無之候は、迚も之事別所江可引移と申、却て事煩敷成立候体差見得候付、不及是非応置候次第ニて、虎落等結廻し候儀、別て嫌居候付てハ、当分何分謂を立、加相談候ても聞取無之、却て夫にすがり、首里辺抔江場所柄見合、引移候企共出来候は、至て故障筋成立可申哉、先以関番人那覇中取締向等、猶又訳て厳重申付、先寄時宜都合見合、盗人・無

調法者抔取締向等ニ事寄、加相談候様被仰付度奉存候、
右は、異国一件ニ付ては、従御国許御手厚御指揮被仰付、誠以珍重難有仕合奉存候、就てハ精々心肝を砕、猶渥々得御相談、後患不相成様取計仕可申候間、御都合向之儀、何分にも宜様御取成奉願候事、

辰五月

爰許逗留之佛人共并唐人儀、近辺歩行等いたし候迄ニて、別段御届申上候儀も無御座候、且又異国船も当分渡来無之候、追々大和船も出帆之時節御座候間、此末相替儀は追々御届申上候様可仕候、且取締向等之儀、折角無手抜様時々琉役共江相達、詰役中は勿論、末々迄も手堅取締申渡置申候、圓通丸今日出帆之段届申出候付、御役々江も申談、此段御内用を以御届申上越候、以上、

但換銭并所望物代銀之儀、別紙を以申上候、

辰五月朔日　谷川次郎兵衛

諏訪數馬
郷原轉
川上式部

嶋津豊後殿
嶋津下總殿
川上筑後殿
嶋津石見殿
末川近江殿
新納駿河殿
樺山伊織殿

別紙

一京銭四拾壱貫七百六拾文
枚ニ壱貫四百四拾文
蕃銭弐拾九枚
銀子ニして弐百八匁八分

一京銭弐拾八貫八百文
枚ニ壱貫四百四拾文宛
蕃銭弐拾枚
銀子ニして百四拾四匁

一蕃銭五枚
銀ニして三拾六匁

一京銭百文
京銭ニして七貫弐百文

蓄銭ニして六リ九毛四シ四等、銀子ニして五分
右は、当二月より三月中、佛人江時々致換銭、且所望
代として相渡候付、蓄銭等格護申渡置候由、右之通御
座候事、

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収〕

六一六　幕府へ届（佛船琉球渡来の件）　五月十四日

去月廿七日午ノ下刻、琉球アシフト海岸江追々異船入
津ニ付、彼地先詰之家来共并琉球国番士之者等、早船
を以追々乗寄り、様子相尋候処、フランス国之由、其
次第は、去々月上旬朝鮮国訳官之者より、是迄之約定
書差戻し、以来は内々ニても売買之儀は堅相断、且其
上是迄彼国海測量等いたし来候処、是以不相成候段、
彼国王より旁申渡候趣、厳敷申来候間、此方使節を以、
再三論談ニおよひ候へ共、一切取り上ケ不申故、相好
不申候へ共、無余儀次第ニ付、軍艦弐拾八艘・小船九
艘を以、朝鮮江押寄候処、其頃雨天故、少々日和見合
居り候へ共、追々日数相立候事故、本国より又々軍艦
七艘渡来候ニ付、右人数調合之上及上陸、此節未タ合
戦最中、然ル処此琉球国ハ、元来朝鮮国より相開ケ候
国故、彼ノ国同意ニ候哉、尤朝鮮国より差越候書面之
内、琉球国王之印章も有之候事故、相違有之間敷とハ
存候へ共、為念承知致来候様、国王より申聞候ニ付、
使節イシラウ渡来いたし候段申聞候、尤船数之儀は、
軍艦八艘、其外種々之船共拾三艘、都合小船共弐拾六
艘程渡来いたし候、尤追々琉球国江申渡し、否相分り
次第、フランス使節江可申渡と奉存候へ共、先は先詰
之家来共申立候段、国元家来共より申来候ニ付、不取
敢此段御届申上候、以上、

松平薩摩守

辰五月十四日申ノ上刻

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収〕

六一七　家老へ逗留佛人の件について琉球在勤の家来届　五月二十四日

爰許滞留佛人共事、先度も御届申上候通平穏罷在、式
日毎ニ師匠差越候位之事ニて、外ニ何も申立候儀も無
御座候、稀ニ近辺致歩行等差障候儀無之候、当春以来
異船も不参、当分静謐罷在候、御役々江も申談、此段
以御内用御届申上越候、以上、

但佛人換銭以別紙申上候、

辰五月廿四日　谷川次郎兵衛
諏訪數馬
郷原轉

島津豐後殿
島津下總殿
川上筑後殿
島津石見殿
末川近江殿
新納駿河殿
樺山伊織殿

別紙

京銭弐拾八貫八百文
枚ニ壱貫四百四拾文
蕃銭弐拾枚
銀子ニして百四拾四匁

右は当四月中佛人江致換銭候付、蕃銭格護申渡置候由、右之通御座候事、

辰五月

〔大日本古文書(幕末外国関係文書)所収〕

六一八　家老へ逗留佛人住家の件について琉球在勤の家来上申書　五月

(朱書)「辰八月廿七日、　評定所一座　海防掛　大目付　伊勢守殿、立田録助ヲ以、　辰八月廿七日　一覧仕候、評定所　長崎・浦賀　江御渡」　一座　下田・箱館　奉行　御目付

此節逗留佛人転居一件之儀、細々被仰越趣具承知仕候、右ニ付ては去年佛国提督船来着、種々難題申掛、既ニ及大事候勢故、無致方応其意、十月十二日(五カ)約条書取替候都合成立、其段は委細御届申上越候通ニて、約書之内何方ニても地を借、屋を借、船を借等之ヶ条有之、此儀難応大切之ヶ条故、応接之砌、段々及断候得共不聞入、彼国船々渡来滞船中、何欤借宿不致候て不叶節は、天久寺可借渡、彼国之船破船等之節天久寺迄ニては不相済、那覇ニても人家勝手次第相借候様申立候付、其節は別段木屋相調、住せ可申候間、天久寺ニて相済呉候様段々申入候処、唉人は那覇江も相住せ、佛人は小国ニて相欺不差免候哉、色々申ニ付、唉人は此方より借宿差免候儀ニ無之、押々相住居候段申入候処、是

は不法之仕形、佛国は互ニ相談之上約条相立、公道を以可申之処、右様之申分落着不致、於其儀は此方ニも勝手次第可致、屹と那覇之内望次第人家可借渡抔と、別て六ヶ敷申立、琉役共ニも必至ニ差はまり、只管及歎願候得共不聞入、渠等猛威を示し、終ニ総理官等を庭上迄引卸候時宜成立、直ニ引次、十四日ニは逗留佛人より通事係吉里筑登之親雲上江参呉候様、承差越候処、提督若狭町学校所江日延一件申入、左候て神父事天久寺より別所江引移度、海辺は風気不宜候間、吉里ニて所柄相考呉候様申出、最早屋を借等之儀、約条取替候末ニ御座候得は断も難成、天久寺東表之松原江家を作、相住居可仕哉と、吉里申入候処、坊主之様人離ニ相住居候儀不相好候間、首里江相住居候ては何様候哉と申立候付、他国人罷居候儀不相成段申達候処、住家之儀、人家を借可宜哉、又は琉球より家作為致候方可宜哉、迚も人家を借候儀不相好、琉球より家作立候時は佛人より入料銀可相渡、勿論此地商買は不致、多人数滞留も不致、神父弐人住居可致と申候、其後泊蔵屋処相応可致申入候処、彼所は市近く静ニ無之、其上海辺ニて風気も不宜候ニ付、海辺より弐合程内江場所柄見合呉候様申ニ付、上泊辺は何様可有之哉と申入候処、人之住家主他所江為引越、相住居候ては不宜、畠地ニても宜所江家作調、借候は可相済候間、上泊并泊近辺所柄見合呉候様とも申、左候て若狭町公館辺は所柄可宜内存ニ候旨申出、同十八日ニは、大灣親雲上并吉里同伴ニて、久米村松尾西表江参り、此所江住居作立度取究申出、前条借宿之儀ニ付ては、提督六ヶ敷申立候儀ニて、若狭町那覇辺殊ニ其前渡地相応之出火有之、右焼失跡度々差越致見廻候儀も有之候ニ付、右場所又は首里等江、是非借宿相住居度申立候時は、誠ニ不容易儀にて、前条約条書ニ、何方之地を論することなく、地を借、屋を借等之儀相載置候付ては、右を則変易いたし候ては滞船中之儀にも有之、又候何様之難事引起候も難計勢御座候故、応其意差免候次第ニ御座候、就ては家作絵図面相添、右両条折田平八江細々事情旁申含、御届申上置候得とも、未上国無之内、右家作致成就引移候付、形行琉球方雇艘船帰帆便より御届申上越候処、初発之御届も未相達内ニて、央より之御届早目相達、誠ニ御不都合奉恐入候、右様之儀、其節猶又同案を以御届可申上筈御座候処、甚行届不申、尤

大荒目之御届振ニて、公辺御届も御取調被成兼、旁別て御不都合相成候段、細々被仰越趣具ニ承知仕、転宿之儀余事とは相替、必死ニ差はまり断付可申之処、何とも行届不申、重畳大形至極奉恐入候、右ニ付ては、被仰越候廉々并取締向聊無手抜様、就中天主教沙汰之儀、尚以厳重可致取締旨、摂政・三司官江委細申達、猶又候仰出候ヶ条之内、書取を以致吟味申出候様相達置申候間、追て何分申上候様可仕候、且詰役中は勿論、船主末々迄も手堅取締申渡置申候、尚此末万端入念、精々厚申談取扱可仕候、追々川上式部・谷川次郎兵衛上国仕候付、右旁之事情細々申上候様可仕候、此段極御内用を以、御受答申上越候、以上、

但松尾江転宿一件、折田便差上候同案、并絵図面弐枚相添差上申候、尤郷原轉・諏訪數馬儀も、追々琉着仕候付、連名を以申上候、

張紙

本文、折田便差上候同案、圓通丸便よりも差上置候付、此節は絵図面迄差上申候、

辰五月　　谷川次郎兵衛

諏訪數馬

郷原轉

川上式部

嶋津下總殿

川下筑後殿

米川(末)近江殿

新納駿河殿

樺山伊織殿

〔大日本古文書(幕末外国関係文書)所収〕

六一九　諸役場役人等採用について家老達　五月

諸向勤方之儀は、夫々奉行頭人より第一生質人柄等細々及味(吟カ)味申伊候事候処、他役より内々頼入候儀共有之候由、且其身以下軽キ者共之儀を、大目附以上格別之向より頼入等致間敷旨、寛政三亥年別紙之通被　仰出、同七卯年ニも申渡有之候処、程過緩相成、当時は右様之内意訴詔も不少、別て不都合之事候、依之今度分て申渡趣有之候条、此段諸向江も急度可申聞置候、

五月　　筑後　駿河

〔石室秘稿中「藩藩古今要章漫録」所収(国立国会図書館所蔵)〕

六二〇　諸役場への内願沙汰等禁止の件について

家老達　五月

御領国中御政務之儀、高下共奉行頭人より支配下之者生質人柄等之吟味を以向々勤方申付候事候処、他役より無拠内願等之趣意を以内々頼入候儀共有之由相聞得尤勤場江不相応之ものハ、相互ニ其心得可有之事候得共、其身以下軽キ者共之儀を大目附以上格別之向より頼入等有之候ては、外見も如何敷、其上頭人之吟味も不行届不都合ニも可有之候間、以来は御役場方より軽キ者共儀は勿論、御目見以上之人たりとも内分取揚間敷儀(ママ)不致様有之度候、夫共無拠訳合を以他役江頼入不致候て不叶儀は、訳柄ニも可依事候、

御役場之所江出入沙汰ニ付ては、夫々被定置候趣も有之候処、程過候得は緩せ相成、就中大目附以上之宅江御用之外差越候儀共不相成、且何そニ付願事并内意向之儀、其掛を迦し、式下(或カ)役より頭人を差越直進達等は勿論、手寄を以内意等曽て不申込様、先達て分て申渡置通候間、自然心得違押掛面会申込、色々訴詔等申出候てハ、別て不都合之事ニ付、先年来申渡有之候通、内意等申出候儀も候ハヽ、御用人等江相付可申出候、此旨向々江不洩様可致通達候、

五月　下總　筑後　近江　駿河　伊織

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六二一　町人共内意訴訟申出の禁止等の件について家老達　五月

町人共願事等之儀町奉行江不相付、其向々江直ニ申出事も有之段相聞得、不都合之事ニ付、町人共申出事はいつかた之儀迚も都て町奉行江相付可申出旨、天明・文化之度申渡有之通候処、比日商人等之内ニは其向々江内意訴詔等申出者も有之哉ニ相聞得、別て不届之至候、仮令向々江相掛候ものニても、第一可依訳柄事ニ候条、身分沙汰抔は猶以町奉行江相付可申出事ニ候、向後右体心得違之於族有之は、屹と可及迷惑候、此旨町奉行江申渡、可承向江も可申渡候、

五月　筑後　駿河

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」・「安政元年甲寅藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六二二　諸役人出勤の件について家老達　五月

奉行頭人并書役小役人等出勤之儀ニ付てハ従前々被仰出置趣、先年来分て申渡有之通ニて候処、緩相成、依向々御座明方并出勤も不同有之由、畢竟御奉公方不心掛之所より右次第不可然事ニ候、向後明方之儀は弥

以正五時ニ罷出、其外も随分心掛、四ツ前ニは一統打揃、御用筋決て不及遅滞様誠実ニ可致精勤旨、向々江不洩様可申渡候、

五月　筑後　駿河

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六二三　礼譲等の件について大目付達　五月

一礼譲之儀ニ付ては、先年来追々被仰渡事候得共、尊卑之弁薄、比日郷士与力又は一身以下凡下ニ至迄、間ニは麁礼ニて罷通候者も有之候由、第一主人并頭役共も罷居候付、以来屹と不敬之儀共無之様、主人支配頭江可申渡候、

一町人并凡下体之者共長脇差を帯、又は日笠相用、身分不成合之為体ニて、士以上江対し致麁礼、剰歯付下駄を履致徘徊間違（敷カ）と之儀は、先年以来厳敷仰渡之趣も有之候得共、程過候得は緩せ相成、間ニは心得違之者も有之由相聞得、不届之至候、且又雪駄等ニ至迄天鵞絨（ビロード）（得脱カ）は勿論、革緒付相用、又は御法度之衣服等致着用候儀、屹と差留候、右ニ付ては見聞をも掛置候付、心違之者は屹と可及迷惑候、

五月　大目付

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六二四　高木主水正澁谷拝領屋敷等の購入に関して家老達　五月

一高木主水正様下澁谷御拝領御屋敷之内
　壱万四千二百弐拾坪余
御同人様同所御抱屋敷
　千百八拾八坪
一青山主水殿同所拝領屋敷
　壱万四拾四坪

右之通永年御譲受相成候、是迄御用部屋計被仰付置候得共、御約定向等御治定相成候付、以来何篇表計被仰付候段申来候条、可承向々江可申渡候、

五月　筑後

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六二五　江戸澁谷屋敷拡張に関して家老達　五月

此内御譲受相成候下澁谷高木主水屋敷、御相対を以御借置澁谷御屋敷と御一囲之御届、御用番阿部伊勢守様江被差出候処、承置候旨先月五日御付札を以被仰渡候段申来候条、可承向々江可申渡候、

五月　筑後

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六二六　近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について

家老書翰　六月二十九日

一筆啓上仕候、厳暑之砌御座候処、

右府様

大納言様益御機嫌能被遊御座、恐悦御儀奉存候、各様愈御堅勝被成御勤務奉珍重候、然は先達て北小路刑部権少輔殿御下向ニて、則より御用向之儀彼是承知仕、去ル七日、

御養女之御願書、御双方共御同日公辺江被成御差出候処、無御滞御落手相成、先以目出度御儀奉存候、不遠内自ラ御願之通可被仰渡儀と折角奉待儀御座候、此末

御縁組

御入輿等付ては、

其御許様江相掛候御用向、猶亦多端ニ可相成儀と奉存候間、北小路殿可相成は

御入輿迄は爰許江

御逗留被下候様仕度、遮て奉願候、左様御座候は、是より先万端御談も申上、御用弁仕、到私共別て仕合奉存候、依之右之趣各様迄申上候間、何卒其通

御許容被成下候様、何分ニも御都合向宜御取成被下度、私より御頼可申上越旨、薩摩守申付候間、此段奉得御意候、恐惶謹言、

嶋津豊後

六月廿九日　久寶〔花押〕

中川讃岐守様

今大路民部権少輔様

参人々御中

〔陽明文庫所蔵〕

〔付紙〕

然は先達て北小路刑部権少輔被差下、則去月七日御養女之御願書、御双方共御同日公辺へ被成御差出候処、無御滞御落手ニ相成目出度奉存候、不遠内御願之通可被仰渡、此末御縁組御入輿等ニ付ては、此御方へ相掛候御用向多端ニ可相成候ニ付、刑部権少輔義御入輿済迄滞留ニ相成候様被成度段、御紙面之趣委曲致承知候、被仰越候通り御婚礼済迄其侭逗留ニ相成候得は、其御方御都合も御宜敷候得とも、無拠外御用向も有之候ニ付、御都合如何と被思召候得とも、御養女御願済之上

営中江御礼御使相勤候ハヽ、一先帰京有之候様被成度候、猶又当多御婚礼御治定ニも相成候ハヽ、以前ニ同人御差下ニ可相成候間、此段宜致可及御報被仰付、如斯御座候、

〔陽明文庫所蔵〕

六二七　大元丸見分受取の件について幕府へ島津齊彬家来届　六月三十日

御用船大元丸檣廻於阿州修復相済、彼地致出帆、海上無恙、今朝品川沖へ致着船候間、御届申上候、尤も御見分并ニ御受取の儀は、為足入積荷等も御座候に付、荷卸相済、追て御届可申上候間、其節御受取相成候様仕度段可申上旨、薩摩守申付候に付、此段申上候、以上、

六月晦日　　松平薩摩守内
西　筑右衛門

〔順聖公年譜稿・薩藩史料斉彬公所収(東大史料編纂所所蔵)〕

六二八　学問武芸試業の件について家老達、並に親書諭達　六月

学問武芸等之儀に付、別紙写之通　御書取を以て御沙汰被為　在、於江戸申渡相成候段申来、誠以難有御趣意之御事に候条、一統奉承知、文武の修業無怠可相励旨、向々へ不洩様可致通達候、

六月　　下總

先達て被仰出置候通、諸向学問武術近々差懸り御覧可被遊、右之次第、

一前夕又は当朝、名差を以て何某へ罷出候様、御側役へ御沙可汰被　遊候間、御用人御目付へ相達、早々向々へ可相達候、但文武之儀に付ては、縦令御目見以下之者にても修業の次第、且業合宜しき者は被　召出、相手に被　仰付儀も可有之候間、兼て其段支配頭より可申聞置候、

一刻限は昼飯後罷出可申候、若亦刻限相違之節は可相達候、

一勤場差支の由にて不罷出儀不相成候、譬へ勤場差支候とも、御用の儀は同役へ次渡置候て、是非罷出可申候、表方御使者等の儀も、同様同役へ繰替候て可罷出候、

一病気御届申上置引入居候者は、其段可申出候、仮令不快又は痛所等有之、押々なからも日勤致居候者は、澁谷御屋敷迄は罷出、其段御届可申上候、御暇不被　仰

付候内は相詰可罷在候、

一武術被　仰付候節、学問手跡の試業も可被仰付候、尤も詩歌文章等心掛候者は、是亦被仰付儀も可有之候、但学問試業の節は、御記録奉行並に重野厚之丞可罷出候、其外堀仲左衛門・上原源之丞の内一人宛可罷出候、

一砲術調練、又は武芸組合調練被　仰付儀も可有之、其節は流義の無差別打込相勤候様、兼て心得可罷在候、

一弓馬小筒の儀、是迄諸流打込可被　仰付候、且又直心影乃流、師範区々に候得共、都て打込に可被仰付候、其外澁川・海老原・堤三家の儀も同様可相心得候、尤も業合の儀は罷出候人数に応し、其節々可被　仰付候、但他所師範の者も依時宜被召呼、相手被　仰付儀も可有之候、

一馬術の節は、御厩より御立馬の内三四、稽古馬十四、御軍馬方より五匹宛可差出、御召馬乗御馬乗の内一人宛付添可罷出候、但当朝乎前日御小納戸より御馬預へ可申越候、

一名差にて罷出候上は、文武の内不得手の儀も有之、御断申上候とも、諸事相済迄は可相詰候、

一着服の儀は、平日の服にて罷出、稽古の節は銘々流義勝手次第可相用候、

一夕刻に及候は、軽き御賄又は蕎麦切等可被下候、御酒は一切被下間敷候、

一罷出候節は御目付へ届可申出候、

一御覩場所の儀は、御側役へ得差図、差引等の儀は、御側目付・御目付可申談候、

一御覩の節は御側役一人・御小納戸・御側目付・御目付・奥医師・御茶道一人宛、前以より相詰居可申候、其外は御供にて可差越候、

一学問武芸被　遊御覩候御次第、別紙之通被仰付、一統奉承知候様可申渡旨、　御沙汰候事、

六月

（順聖公年譜稿・薩藩史料育彬公所収（東大史料編纂所所蔵））

六二九　願事に付諸役場への音物沙汰厳禁について家老達　六月

何そ願事等ニ付、諸役場取扱之面々江音物差贈候てハ、賄賂ヶ間敷相成、軽品たりとも堅可為無用旨、先達て申渡置通ニ付、おのつから心得違は無之筈候得共、万一も取違、音物等不依何色諸品引替札抔取仕立、陰ニ

て相贈候儀とも有之候ては、第一御取締之妨相成不可然事ニ付、不限何品札、又は目録等ニて差贈候儀は、軽両種又は肴一折迄現品可差贈候、其外反布類食物等ニ至迄、何色ニても一切不相成候、右ニ付てハ別段見聞をも掛置候付、乍此上違背之者も候ハヽ、不差置可及迷惑候条、支配下江は夫々奉行頭人より、可申渡旨向々江不洩様可致通達候、

六月　駿河

〔石室秘稿中「藩藩古今要章澄録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六三〇　着出立の節土産餞別沙汰の厳禁について

家老達　六月

一質素節倹は勿論、着出立ニ付土産餞別、親子兄弟之外可為無用旨、先年来毎度被為及　御沙汰、追々申渡置通ニ候処、至比日又々以前之振合ニ成立、畢竟餞別ニ預り、送物等受用いたし候付、土産も不相止ニて可有之、如何至極ニ候、依之以来左之通被仰付候、

一不依誰人仮令為餞別相招候ても堅相断、送物等都て可致返脚候、

一出立之節預送物居候ても、最早此節より土産等一切差遣間敷候、

一御当地并江戸着出立之節、同役中待付餞別且送物、此節より堅令禁止候、親子兄弟迄も決て可為麁品、

一道中之儀、随分致作略罷通、折角失費無之様可心掛候、

一持高五百石以下之諸士、冠婚葬祭ニ付取りかはしハ、銀弐匁を限り、其外可為無用、右以下減少ハ勝手次第、

一持高五百石以上九百石迄之面々は、右同断之節は銀一匁限、其以下減少ハ勝手次第、

一持高千石以上は、右之振合ニ応し減少は勝手次第、

一江戸詰等被仰付候得共、近来御役場毎ニ御取替訴詔申出、畢竟以前より之仰渡不守故、一統驕奢之風俗押移り、自然と入費は勿論、所帯方宜者ニても終ニは致困窮、重て江戸詰等不相調様成立、繁々往来之面々は、右体之処より猶以無故及失費、且他所勤等無之向迄も色々内意訴詔ヶ間敷、如何様内証之驕ニ所帯方令衰微候哉、彼是不勘弁至極之事共ニ候、当時海岸御手当向且は江戸地震旁ニ付、莫大之御入費、乍御改革中無拠御新借ニも被為及、別て御入用多之砌ニ候間、於諸向も右次第奉汲受、平日質素節倹を加、前条之通相守候得は、江戸詰等も御賄料ニて可相済事ニ候、向後御取替一切被仰付間敷候条、得其意、兼て同役又は朋輩類

中互ニ申合、音信贈答・無益之集会急度相止、御軍役は勿論、学文武芸第一可心掛候、
右之趣達貴聞申渡候間、堅固ニ可相守候、乍此上違背之向も候ハヽ、可及迷惑候条、御役場毎ニ致壁書可置旨、不洩様可致通達候、

六月　下總　筑後　駿河　伊織

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六三一　在府家老へ清国騒乱の件について在国家老書翰　七月二日

唐国兵乱一件、渡唐之琉人江相糺候形行、琉球官聞役等申出候付、猶又御軍賦役を以、細々為致尋問候得共、格別委細之訳不相知旨、別紙之通申出候付、弐通相添此段申越候条、可被達貴聞候、以上、

辰七月二日　新納駿河
嶋津下總

嶋津豐後殿
嶋津藏人殿

覚

一唐之儀、去年十一月頃、江南之内瑞州・臨州二府長髪賊ニ被攻落候由、且又江西省城之地方計相保、余は被攻落候共承候由、右付、福建省・浙江省等之諸所江官兵差遣、厳敷防方有之候由、
一河南省江賊匪相起、民間之財物を却し、官民殺害致し、同年十二月歸徳府攻破候段及奏問、折節臺灣之道台徐宗幹と申人、北京江罷登居候付、河南督一同軍務取計候様皇命を受、北京致出立候処、右徐宗幹河南至着（到カ）無之内、静語（謐カ）相成為申由、
一当正月頃、江南之内徐州府賊匪相起、攻擾之仕形有之候付、協鎮と申大将官兵引率攻戦候処、右賊匪ニ被打亡、兵民も都て致殺害候由、
一当正月十七日、大雪降り候砌、長髪賊民兵白衣裳着、雪ニ紛れ楊州城江罷登候を、壱人は被捕付被相糺候処、同与八人城上之石火矢口相塞き候ため、罷登候処、七人は逃去りたる由、同十九日ニは長髪賊千人余右城江攻来、其時楊州は兼て計策を備置、防方堅固有之候故不被攻破候由、
一当正月頃、一与之長髪賊河南ニて合戦、勝利無之南京城江罷帰候処、彼賊首より城中江入候儀不差免候付、

右長髪賊江寧（寧）一帯之地方江走来り、同廿四日江寧（寧）府之内句容県攻取候由、右ニ付江蘇撫院常州府属地江兵卒差遣、路々堅防方有之候由、

一当春之頃、長髪賊数千人鎮江一帯之地方江攻来候付、丹徒県居民半方程は他所江逃移り、店市閉門致し候付、官兵連日丹徒ニて相戦、右城之四方陣屋を張り、厳敷防有之候付、当二月十四日右長髪賊相退候由、且前文通長賊鎮江一帯之地方へ攻来候付、丹陽県城も四方江陣屋を張り相防、城囲石垣并石火矢目等作添、堅固防方有之候由、

一長髪賊罷通候所は、地方財物取掠、官所倉庫并民間之房屋、且神廟仏像等焼払候由、

一去年七月頃、楊州府江河賊相起、越河往来之客商財物取却し、浙江（浙カ）省主副考官挙人科、為御調部、北京より浙江（浙カ）江被差越候砌、右越河にて箱荷等被盗取候由、右ニ付江蘇撫院兵卒差出、右河賊百二三十人捕付、死罪被召行候由、

一当正月、南京城江罷在候長髪賊共数千人威勢を振、江西省之内武昌府江踏入、米穀財物奪取、或は民間之婦女蹧躂、或は人家致焼失候付、其所之男女大略弐千余人、福建省之内建寧府崇安県・永安県・砂県抔江逃去、乞食を成候段、福建総督撫院江承及、万一賊人共難民ニ入紛れ候儀も可之有哉と、早速督糧道と申官人江兵八百人余召附差遣、建寧府官一同探方江申付、難民共江は飯米相与、江西省江差帰、官兵共は崇安県江致防方、当分無事有之候由、

一先年以来、上京之通路丹陽県より鎮江・揚州・瓜州・部伯江罷通候処、咸豊（嘉永五年、一八五二年）二年冬之頃、長髪賊鎮江攻取候以来、鎮江江通用難成、丹徒県練壁之地方より越河江行廻り、越河より三江営万福橋部伯江罷通候、越河より長髪賊罷居候処は、三四里程相離候処、九華山相隔、彼之賊は山之南表ニ罷在、往来之人々山之北表罷通、且欽差大臣并江蘇撫院彼所江兵を設、路之防方有之候由、

一此節進貢使下京之節は、小新豊江致着泊筈候処、越河以下小新豊より前条丹徒ニて長髪賊相戦候処は、僅一里二合程相離候付、小新豊着船早速出船、大新豊江着泊いたしたる由、

右清国兵乱之次第、実否之所は儘ニ相分り不申候得共、河口通事共より、右之通承候段、勢頃大夫より承届申

候間、此段申上候、以上、

琉球館聞役
辰六月　　新納太郎左衛門

在番
浦崎親方

去年五六月頃於福州、佛国人より茶可取入地下之者江致相談候処、茶之儀は暎人共前以代銀過分ニ貸付置、一手ニ買取候付、外国人江売渡候事不相成迚、色々相さとし候処、其より事起り、右両国何欤事六ヶ敷相成候由、暎人共福建諸所家屋を過分ニ買広メ、上館をも相建居候由、福州辺異船四五艘宛往来は不絶由、

一大黄之儀、蜀都四川之地より出産之品にて、福州迄は数百里相隔、村々賊共侵取候国々を数日通行、其上近年暎人茶同様過分ニ買入候故、別て相少由、

一福州辺米価、去年冬頃より當正月ニ掛、大概倭米ニして五斗代銭拾四貫文位ニも相及候由、且廣東・福建等より、年貢之諸物粮米陸地より持越候儀、長髪賊於諸所相支候故不相成由候付、諸色別て無多事、金銭も不通融ニ有之由、

一右賊は南京城江相籠り居、近辺致侵掠候由、当分鎮江府丹徒之辺、専官兵より相防候由、此所江犯取候得は、北京江廣東福州より之通路相絶候程之処ニ候由、全体賊之勢ひ強、官兵共邂逅防守ニ出張候ても、兵粮等不相続候て、却て賊ニ与し候も有之由、

一魯西亜と土耳兒之戦争一巻承候得共、右之一条全不承旨申出候、

一唐王当年二十三才と相見居、此節ハ別て懇意ニ、琉球より北京迄之地数(里カ)、又は琉国王年輩等も直被承候由、冠船願之一条も唐国右通之振合故、近年中相調候丈ニは有之間敷候との事ニ候、

右之通、御軍賦役より渡唐之琉人江承届候旨申出候事、

（大日本古文書（幕末外国関係文書）所収）

六三二　在府家老へ琉球人在唐中の次第について

在国家老書翰　七月二日

渡唐之琉球人致上国候付、在唐中之次第、別紙弐通之通申出候間、相添、此段申越候条、可被達貴聞候、以上、

辰七月二日　　新納駿河

嶋津豊後殿
嶋津藏人殿

覚

一去年十月六日、那覇川出帆、追風好、直如唐通船仕、同十日台と申外山見掛、同十一日定海潮掛仕申候、
一同十二日、同所出帆、五虎門乗入、同十三日怡山院参着仕申候、
一同十五日、閩安鎮諸衙門参官仕、早速改相済、湊内江乗入候儀免許被申渡候、
一同十六日、怡山院出帆、同日林浦潮掛仕申候、
一同十七日、林浦碇を起、同日南臺着船仕申候、
一同十八日、封堵珍盤相済、御物館屋江卸、安掉仕申候、
一同十九日、諸衙門参官仕申候、
一十一月九日、許価免許被申渡、御買物取附申候、
一十二月廿日、船修補之願申出、免許被申渡候、
一当正月廿四日、船修補取附、二月三日迄相仕舞申候、
一二月八日、
孔子御祭祀之時、方府大通事官舎新古存留、参拝相勤申候、
一五月二日、御買物相仕舞候段報竣申出候、
一同四日、海防官館屋江被罷出、看鑑相済申候、
一同五日より七日迄、御物并自物積入申候、
一同七日、諸衙門辞官并離駅、登船仕申候、
一同日南臺碇を起、洋嶼潮掛仕申候、
一同九日、回文并出鎮禀出、同日洋歟碇を起、官頭潮掛仕申候、
一同十日、官頭碇を起、壺口潮掛申候、
一同廿一日、壺口碇を起、五虎門出帆仕候処、風不順ニ有之、琉球江難乗行、今月四日山川江漂着、同八日御当地上着仕申候、
一唐所ニ兵乱有之、山海之賊も出来、水陸之往還不自由有之由候得共、接貢船は、往還共賊船等相逢不申候、
一世振之儀、作毛中作位、米壱升代古銀壱匁ニて商売仕申候、
右之通、唐往還并滞在之形行又は世振之次第、如斯御座候、以上、

返上物宰領大筆者
辰六月　眞境名親雲上
同才府

覚

一去々寅年、進貢謝恩兼務之使者にて渡唐被申付、十月六日那覇川出帆、同九日台と申外山見掛、同日定海汐掛、同十日同所碇を起、五虎門汐掛、同十一日同所碇を起、怡山院着船、唐大平之段承申候、

一同十二日、於閩安鎮改を請可申之処、去々年は唐着遅成、北京仕舞方差支候付、上京人数は下館被申付度旨禀帖差出、弥其通被申付、同日館屋到着仕申候、

一十一月二日、諸衙門(衙カ)参官、表文貢物於布政司衙門、諸官人見分相済、宴被給候、

一去々年上京之儀、賊乱未相鎮、進貢使上京之道路差支候間、通路相成候節、上京被仰付度、福建総督より及奏文居候間、此旨承候様、海防官より在唐之存留江、前以被申渡置候付、通路筋被相替ニても、年内上京朝見之勤被申付度願立候処、賊気未静候付ては、容易上京難成、其上総督より奏文之

勅

敕答も未到来無之ニ付ては、是非相待候様、海防官より被申渡、追て兵を用之省分未粛清無之、若道を繞り上京被申付候ては、仁愛之道不相叶候間、此度之進貢使上京不致様、

敕諭之段、布政司より被申渡候付、使者役々阿口通事共江も致吟味、此節之儀、謝恩慶賀等之表章并献納物等有之、常例之進貢とも相替事候間、道そ上京被申付度、猶又願立候処、取請宜、通路相成候節、上京被申付度趣、総督撫院より及奏文候付、去年二月至十五日は、弥右奏文之通

敕許有之候間、日限被申渡次第、無支致出立候様、海防官より被申渡候、

附

敕書并例式賜物、且私大夫以下末々江例式賜物及奏文被差下置候間、請取候様、海防官より被申渡候付、先以布政司方江格護ニて、北京之勤相済候上、請取度趣願出候得共、許容無之ニ付、相請取申候、

一去年五月三日、北京江出立仕候様、伴送官より被申渡、既ニ其手段仕居候処、賊乱未相鎮由ニて、猶又出立相扣居候様被申渡候、

一右通被申渡置候処、同年八月上京被申付、同七日福州

府出立、水路罷通、同十一日水口着船、同十三日陸地出立、九日（月カ）八日清湖参着、乗船仕申候、

一九月十日清湖出船、同廿二日杭州府着船、諸衙門参官之儀免許有之候、

一同廿六日杭州府出船、同卅日蘇州府着船、諸衙門参官杭州府同断免許有之候、

一十月六日蘇州府出船、同廿二日清江鋪着船、同廿三日陸地出立、十一月廿一日良郷県参着、同廿三日城可仕段、禮部衙門江為引合、阿口通事先達て差越、追て良郷県出立、彰義門外罷通候砌、禮部大使被出迎候付、則

皇帝御機嫌相伺、四譯官江到着仕、同廿四日同人案内者ニて、禮部衙門江罷出、例之通表文差出申候、

一十二月朔日、

皇帝大高殿江行幸ニ付、於神武門之外、送鴈之勤被申付、相勤申候処、以禮部大人国王平安可罷在哉之旨、御諭之趣御座候付、阿口通事を以、平安罷在候段申上、添て御膳下之、羊肉一方・饅首一盤・乳餅一碟・蒸糕一碟被下候、

一同三日、於鴻臚寺衙門、演礼相勤申候、

一同五日、進貢物并謝恩慶賀献上物相納申候、

一同十四日、私大夫以下末々江、帽子并衣裳等先格之通被下候、

一同十五日

聖廟参拝仕申候、

一同十八日、於禮部衙門、禮部大人相伴ニて、例之通下馬宴被下、同日公館江上馬宴被贈給候、

一同廿八日、

大廟御参拝ニ付、於午門之外、送鴈之勤被申付、相勤済て、御膳下之、羊肉一方・饅首一盤・蒸糕一碟・乳餅一碟被下候、

一同廿九日、官人以御使、宴三台・鵞一羽・鶏一羽・魚二十一尾・棉羊三疋・南鮮果二桶被下候、

一元旦ニ付登

城、諸官人并朝鮮・琉球二国之使者一同朝拝相勤申候、

一同日、官人以御使、私江色々巻物十四疋・宝蔵六、大夫江色々巻物十疋・宝蔵六被下候、

一同二日、重華宮江被召呼、従

皇帝、僧王爺ニ付て、琉球より何月為致出帆哉と御尋御座候付、去々年十月、出帆仕候段申上候処、琉球よ

り北京迄之通路何里ニて候哉と、猶又御尋御座候付、
一万里程有之筈候段申上、且国王何歳相成候哉と御尋
御座候付、当年十四歳相成候段申上候処、帰国之節、
国王平安可罷在哉之旨相達候様　御諭之趣御座候付、
則叩頭仕、済て班戯拝見被仰付、其時御膳下之、菓盆
二個・糖餅二碟被下、且玻璃器二件宛、玻璃鼻烟壺一
個宛、磁器一件宛、宝蔵四宛、茶葉二瓶宛、磁盤一件
宛、九年母入付被下候、
一同五日、私并大夫江、御製詩章和韻可被仰付、以思召
国王江蠐縦二疋・福字方一百幅・絹紙四巻・筆四匣・
墨四匣・硯二方・雕漆器四件・玻璃器四件拝領、私大
夫江緞子一疋宛・筆二匣宛・墨二匣宛・箋紙二巻宛被
下、御製詩章和韻は不被仰付候、
一同六日、於午門之外、諸聖安回国之段、禮部大人より
被達　皇聞、御暇被下、其時大人を以、致帰国候は、
国王平安可罷在哉之旨相達候様　勅諭之趣承知仕候、
一同十日京城起身、二月朔日清江鋪到着、大平船江乗付同
二日出船、同十九日蘇州府着船、参官之儀免許有之候、
一同廿五日蘇州府出船、同廿九日杭州府着船、参官之儀
蘇州府同断免許有之候、
一三月五日杭州府出船、同十五日清湖着船仕候、
一同十七日清湖より陸地出立、同廿日浦城県到着、同廿
四日乗船仕、同廿五日出船、四月五日福州府下着仕候、
一同七日、諸衙門参官、例之通相勤、宴并下程被下候、
一唐賊乱之儀未相鎮不申候付、所々道筋被相替罷通申候、
一五月十日、諸衙門辞、離駅、登船仕候、
一同廿一日、五虎門出帆仕候処、風不順有之、琉球之様
難乗行、今月四日山川漂着、同八日同所出帆、同日御
当地上着仕候、
右之通、唐往還并勤方等之次第、如斯御座候、以上、

辰六月　　久手堅親方印

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）所収〕

六三三　在府家老へ琉球逗留佛人等の件について

在国家老届　七月二日

川上式部

右は先月十一日致着船候付、滞琉中之成行承候処、追
々御届申上候通、何も相替儀無之、逗留佛人にも近辺
歩行等致し候迄ニて、平穏罷在候、左候て当春異船渡
来も無之、且佛人共松尾江家作調引移候付ては、以来
取締向手厚申談、琉球共江も細々申渡置候旨承届候、

此段以御内用申越候条、可被達
貴聞候、以上、

但諏訪數馬等より、別冊并絵図面相添申越候ニ付、
相添差越候、

辰七月二日

樺山伊織
新納駿河
嶋津石見
川上筑後
嶋津下總

嶋津豐後殿
嶋津藏人殿

〔大日本古文書〈幕末外国関係文書〉所収〕

六三四 徳川齊昭へ書翰 七月四日

上 申上 薩摩守

大暑中御座候処、益御機嫌能被遊御座恐悦奉存候、然ハ其後色々取込旁ニテ御機嫌モ不相伺、恐入奉存候、先比ハ日本史之儀被 仰下、重畳難有奉存候、何卒拝領被 仰付候様奉願候、扨又当屋敷庭モ広ク御座候間、野菜仕立候処可也ニ出来仕候間、 御慰ニ進上仕候、先日帆柱痛候大砲船モ、一艘ハ品川江着船仕、大安心仕候、先ハ御機嫌伺旁申上度如斯御座候、恐々頓首、

七月四日

猶々、当季御自愛被為在候様奉存候、例之通不珍敷候得共、豚肉・カステラ進上仕候、以上、

〔島津家書翰集所収(日本史籍協会叢書)〕

六三五 島津久福役掛の件について家老達 七月

二十三日

知覧
嶋津伯耆殿

六三五の一
一御家老

右之通 御名代島津三次郎殿ニて被 仰付、加判同役同前、席順川上筑後殿次罷在候様被仰付候条、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方へも可相達候、

七月廿三日

駿河

六三五の二
一

嶋津伯耆殿

右来々午年琉球人就参府、往来被召附候旨、今日 御名代嶋津三次郎殿ニて被仰付候、此旨末同断、

七月廿三日

駿河

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収(国立国会図書館所蔵)〕

六三六 官規士風の矯正について親書諭達 七月

二十五日

〔内包紙ウハ書〕
御筆仰出

領国中政務ニ付ては、〔斉興〕宰相様御家督中多年被遊御配慮、殊ニ改革且海岸手当向等、訳て御規定被遊置、諸役場も差はまり致精勤、追々質素之向ニ候処、兎角程過候得は、緩怠相成、花美驕奢には赴安く、段々不行儀の事も有之、無益の酒会は勿論、賄賂等数進物等も有之、且士道取失候所業も有之哉ニ相聞得、甚タ歎かしき事ニ候、当時は異国船も諸所江渡来、従公辺も訳て文武之御沙汰も有之、士風御振興之事ニ候得は、一統奉得其意、末々迄も質素節倹相用、其程ニしたかひ、身分励候様との趣は、毎度申渡置候処、今以段々心得違之義も有之、甚不可然事ニ候間、各初役場末々迄誠実ニ心掛、屹と致精勤、就中勝手方其外町人等致支配候向は、訳て廉直ニ可相嗜、且又大目付始目付役之儀は、無親疎善悪之事実令見聞、筋々遂吟味、賞罰明白ニ不行届候ては不叶儀ニ候得は、至て重き役職ニ付、銘々身分令謹慎、脇々誹謗不受様可心掛、其外諸役場職分を尽し、支配之面々江も、応身分正道ニ相はけみ候様申諭、就中町家之者共売利ニ迷ひ、不相当之願意も有之哉ニ候間、支配之向々屹と等閑之儀無之様可心掛旨、訳て可申渡候、

右之趣意、各始諸役場深く汲受、聊無等閑申談、来春下国之上、急度其詮相見得候様可心掛候、以上、

〔照国公文書・順聖公年譜稿にあり〕
〔辰七月〕

〔参考　外包紙ウハ書〕
〔朱書〕
六拾八番
御筆仰出壱通

右安政三年辰八月四日、駿河殿より可致格護置旨春山彌兵衛致承知、白木御文書拾番箱江納置候事、

〔朱書〕
白木十番箱

〔東大史料編纂所所蔵、他に照国公文書、鹿児島県史料旧記雑録追録八、順聖公年譜稿等所収〕

六三七　近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について

家老書翰　七月二十六日

一筆啓上仕候、

右府様

大納言様倍御機嫌能被為成御座、恐悦御儀奉存候、各

様愈御勇健被成御座珍重奉存候、然は
篤君様御入輿迄北小路刑部権少輔殿爰許江御逗留之儀
先達て御願申上越候処、
其御方様御用向も被為在候付、御養女御願済
営中江御礼御使勤相済候は、一先上京又々御同人御差
下可被遊段被仰下趣、逐一承知仕、則薩摩守江申聞候、
然処是迄は
篤君様御入
城御比合も聊と相分り不申候処、既ニ当十一月上旬御
広敷
御入之儀も被
仰出候付ては、最早格別御間も不被為在、
其御方様江相掛候御用向も多端有之、心配仕候事ニ御
座候間、
御入　城迄は各様方之内御壱人、爰許江不絶御逗留御
座候様仕度奉存候、北小路殿是非此節上京被仰付御事
御座候は、各様方御壱人此涯御下向被仰付、御代合之
上、北小路殿御上京相成候様被仰付度、左候得は諸事
至極御都合も宜、安心仕候間、何卒領領掌被成下候様
偏ニ奉願候、北小路殿此地御出立後御壱人も無御座候
ては、御相談御相手も無之、薩摩守ニも心配被致候付、
呉々も右様御取計被成下度、此段猶又私より各様方迄
御願可申上旨薩摩守申付候、付如斯御座候、恐惶謹言、

嶋津豊後
久寶〔花押〕

七月廿六日

中川讃岐守様
今大路民部権少輔様

〔陽明文庫所蔵〕

〔参考　幕府より島津斉彬へ達〕

写

松平薩摩守

其方娘篤姫事、近衛右大臣殿御養女之儀、願之通被
仰出、当十一月上旬
御広敷江
御入之儀被
仰出候間、可被得其意候、

〔陽明文庫所蔵〕

六三八　近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について

家老書翰　七月二十九日

貴札拝見仕候、

右府様倍御機嫌能被為成御座恐悦奉存候、然は篤君様御事御養女御願之通被
仰出、且当十一月上旬
御広敷江
御入之儀被
仰出候段、脇坂淡路守様より御達相成、就右依
御諚被仰下趣、薩摩守江申聞候処、被為入御念儀被存候、恐惶謹言、

七月廿九日　嶋津豊後　久寶〔花押〕

中川讃岐守様
今大路民部権少輔様

〔別紙〕
追啓
禁中江御縁組御願之儀、去十六日伝奏衆江御差出被成候段被仰下趣承知仕、薩摩守江申聞候、以上、

七月廿九日

〔陽明文庫所蔵〕

六三九　領国中政務に関する家老達　七月

御領国中御政務之儀ニ付、御別紙之通細々　御筆を以被　仰出、何共奉恐入事ニ候条一統謹て可奉承知候、右ニ付ては被　仰出之通緩怠ニは成安く、段々不行儀之事共被聞召通、無申訳も次第ニ候間、一統猶又誠実ニ心掛、只管差はまり致精勤、学文武芸は勿論、質素節倹等屹と
御趣意相貫き、渥々其詮相立候様可心掛候、此旨支配下下役等江可被申含候、

七月　下總　筑後　伯耆　石見　駿河　伊織

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収〔国立国会図書館所蔵〕〕

六四〇　篤姫の生母養女成一件　七月～八月

〔袋紙のウハ書〕
六拾九番
篤君様御事、君号并御諱被進候御折紙之写入付之白木箱壱ツ、并御生母之儀ニ付御書取六通、
右安政三年辰八月二十八日、伯耆殿より可致格護置旨、春山彌兵衛致承知之、白木御文書拾番箱江納置之候事、

〔折紙に〕

篤君

〔折紙に〕
敬子

〔島津斉彬指示書〕
伊勢守江

篤君御方生母之儀、向後恒姫と相定候様被仰出候旨、難有奉承知候、右ニ付ては表向御届替仕候方ニても御座候や、又は直ニ其事ニ心得、御届不申上候ても宜敷や、御内々相伺申候、以上、

右之趣ニて伺可申、尤以壮右衛門差出候間、文言吟味之上、清書いたし、此方江可差出候、

新御殿　富印江は、年寄迄側役より申上候て宜敷候事、

一新御殿より右ニ付、御礼女使可差出やと伺有之可然と存候、

一平常文通有之向江は、奥より鳥渡為知可申遣候事、

其外御祝義等ニは不及事、

松平薩摩守娘篤姫産母之儀は、向後薩摩守妻女恒姫を生母ニ相定候様、御噂も有之候間、此旨相達置候事、

屋敷中江は、

別紙之通阿部より達ニ相成候間、致承知候様相達可然候事、

此度生母之儀被仰出候儀は、深き御訳合も有之候間、一橋初両敬之分江為知有之方可然旨、辰之口より内々申来候間、其通可取計候、左候て国元江も其段申遣候方可然、系図之儀も其訳相記し置候様可申達候、

篤君様御事国元出生ニ候処、此度産母之儀、以思召恒姫を生母と相定候様

公辺より被仰出候付、御吹聴申達候、

右之趣ニて可然存候、右は全く内実之処、後年異論無之様ニとの事ニて被仰出候よしゆへ、其心得ニて取計可然候事、

〔以下二通の文書の包紙ウハ書なり〕
篤君様御生母之儀ニ付御書取六通

〔島津斉彬伺書七月二十五日〕

篤君御方御生母之儀、向後恒姫江相定候様被
仰出趣、難有承知仕候、就右は表向御届替仕候方ニて
も御座候哉、又は直其筋相心得、別段御届不申上候て
も可然哉、此段相伺候、以上、

七月二十五日　　松平薩摩守

〔幕府指示書〕

書面之趣は、被
仰出候儀ニ付、分て届書被差出候ニ不及候事、

〔近衛忠熙書翰（使者口上による）、篤姫宛　七月〕

篤君様江

右府様御口状

今般御養女被成進候ニ付、君号并
御名字等幾久敷目出度被進之候、

御使

七月　　北小路刑部権少輔

〔家老達（記録奉行宛）　八月〕

篤君様御事

近衛右府様御養女御願之通被
仰出候付、北小路刑部権少輔御使を以、　君号并御諱
御折紙を以被進、　御本書は
篤君様被遊御所持、写被差越候付、格護可致置候、

八月　　伯者

〔東大史料編纂所所蔵、他に追録旧記雑録〔鹿児島県史料旧記雑録追録八〕所収〕

六四一　近衛忠熙へ篤姫入輿の件について島津斉彬使者口達　七月

篤姫様御事

右府様御養女御願之通被仰出、当十一月上旬御広敷江
御入之儀被
仰出候、就右薩摩守大隅守より御祝儀之使者、番頭肝
付左門江被申付、薩摩守内使者并篤姫様より之御使、
広敷用人梶原清右衛門江被申付、去ル十日江戸表出立
ニて上京之筈御座候得共、其内以使者此段被申上候、

松平薩摩守使者

七月　　伊集院太郎右衛門

〔陽明文庫所蔵〕

〔参考　篤姫縁組の吹聴　七月十七日カ〕

松平薩摩守殿息女篤姫方、右府殿御養女被成、篤君御方被称、

大樹公御縁組御願之通被仰出候、

御吹聴、

〔陽明文庫所蔵〕

六四二　篤姫近衛家養女成に関して家老達　七月

篤姫様御事　近衛様御養女成御願之通被仰渡候付、御順之儀は　御前様御次被　仰出、此様文字相用候様被仰付候、左候て

公義より表向御縁組被　仰出候上は、此様文字相用、

御順　太守様御頭ニ被　仰出候、

篤姫様御事　近衛様御養女被為成、君号被進候ニ付、何そ付（ニ脱カ）　御名内ニて認候節は、田安様・御三家様其外

外様之御方江は、　篤姫御方と相認、一橋様之儀は御由緒柄別段之儀ニ候間、篤姫様と相認、御両殿様江も

御同様相認、御口上ニも都て右通奉称候様被仰付候、

右之通被仰付候旨被　仰出候段申来候、此旨向々江可致通達候、

七月　　駿河

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」・「藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六四三　近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について

家老書翰　八月五日

貴札拝見仕候、然は

篤君様御事

公方様江御縁組之儀、

禁中江被　仰上候処、御願之通被

仰出候付、被仰下趣薩摩守江申聞候処、入御念儀被存候、恐惶謹言、

八月五日　　嶋津豊後　久寶〔花押〕

中川讃岐守様

今大路民部権少輔様

進藤式部権少輔様

〔陽明文庫所蔵〕

六四四　近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について

家老書翰　八月五日

貴札拝見仕候、

右府様倍御機嫌能被為成御座恐悦奉存候、然は
篤君様御事
公方様江御縁組之儀、
禁中江被　仰上候処、御願之通被
仰出候付、依
御諚被仰下趣、薩摩守江申聞候処、被為入御念儀被存
候、恐惶謹言、

八月五日　　嶋津豊後
　　久寶〔花押〕

中川讃岐守様
今大路民部権少輔様

〔陽明文庫所蔵〕

〔参考　近衛家用人へ京都留守居書翰〕
〔封紙ウハ書〕
「〆　松井丹後介様
　　林縫殿様　　伊集院太郎右衛門」

以手紙得御意候、愈御堅固被成御勤珍重奉存候、然は篤君
様当十一月上旬御広敷江
御入之節御見送之儀、阿部伊勢守殿江被相伺候処、別段御
用人不及出府、北小路刑部権少輔殿御壱人御見送御勤ニて
宜段被仰渡候付、其段北小路殿江御達申置候付、右之趣は
自ら御同人より被申上越候義と存候へとも、尚又私より申
上置候様嶋津豊後より申越候付、早速参
殿右之趣可申上之処、来ル廿一日迄難罷出候付、此段各様
迄申上置候間、宜御取計可被下候、此等之段為可得御意如
斯御座候、以上、

八月十八日　　〔陽明文庫所蔵〕

六四五　川上久連役掛の件について家老達　八月十五日

一若年寄　　川上矢五太夫

右之通　御名代嶋津又四郎殿ニて被仰付、御役料高是
迄之通被下置候、席順嶋津登頭可罷在候、

八月廿五日　　伯耆
〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六四六　篤姫生母の件について家老達　八月

篤姫様御事御国許御出生ニ候処、此度御産母之儀以思
召御前様を御生母と被遊　御定候様被　仰出候旨、御
老中阿部伊勢守様より被遊　御承知候、此旨奉承知候
様向々江可致通達候、

八月　　伯耆
〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」「藩内布達類」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六四七　近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について

家老書翰　九月十八日

猶々、御端書之趣委細承知仕候、以上、

貴札拝見仕候、

篤君様御入城之節、御見送并御結納御婚礼付
営中江御祝儀御使御下向之儀、讃岐守様江被
仰付候段、被仰下趣承知仕候、御紙面之趣薩摩守江も
申聞候、恐惶謹言、

嶋津豊後
九月十八日　久寶〔花押〕

中川讃岐守様
今大路民部権少輔様

〔陽明文庫所蔵〕

六四八　島津久徴役掛の件について家老達　九月二十七日

御軍役方
惣奉行

島津下總殿

右之通被仰付候条、此旨表方江致通達、奥掛御勝手方へも可相達候、

九月〔二十七日〕　駿河

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六四九　近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について

家老書翰　九月二十九日

〔包紙ウハ書〕
中川讃岐守様
今大路民部権少輔様

島津豊後

一筆啓上仕候、

右府様倍御機嫌能被遊御座、恐悦奉存候、然は
篤君様御事、当十一月十一日御広敷
御入之儀被
仰出、左候て同十九日比
御結納、十二月十八日比
御婚礼御日取ニ被
仰出ニて可有之旨、阿部伊勢守様より御達有之候、右
付御結納并御婚礼翌日皆子餅御取かわし等之節、
近衛様より御使者御先例は御所司代様迄御達之御事候
得共、此度は北小路

御入之節御見送相勤候賦ニ付、両条之御使も相勤可然、
其趣北小路江兼て達申置候様、左候て其御地江は別段
不被
仰遣候付、無差支様可取計旨、阿部様より薩摩守致承
知候付、則北小路殿江其段申上候処、御持病之御疝癪
折々御差起付、格別之御慶事到其節自然難被成御勤事
も難計、勿論讃岐守様江
御入城御見送并御結納御婚礼等之御使被仰付、十月初
旬御着府之御賦付、御同人様御勤之筋ニ被仰付度旨承
知仕候付、成行薩摩守江申聞候処、其趣阿部様江被申
上候得は、讃岐守様御着之御比合未御治定無之御断申
上問ニ合候儀ニ候はゝ不及御出府、北小路殿御病気押
ても被成御勤候との趣、別紙之通猶又被仰渡候、尤中
川様ニは疾ニ御地御発足之御事と奉存候間、不及御交
代ニ御重合御都合被成下候は旁可宜候付、右之趣可奉
願旨、薩摩守申付候間、其通御都合被成下度奉願候、
別紙阿部様より之御達書写等相添、此段為可申上如斯
御座候、恐惶謹言、

嶋津豊後

九月廿九日　　久寶〔花押〕

中川讃岐守様

今大路民部権少輔様

〔陽明文庫所蔵〕

六五〇　某氏へ書翰　（安政三年カ）十月十二日

別紙極密申上候、
水府御父子様之御間之事、兎角御不熟之様、諸方より
取沙汰承り申候、弥左様之御様子ニ候や、
老公ニも嘸々御配慮之御事と奉存候、扨々困入候事ニ
候、実ニ当時之処ニては此義小事ニ無之候間、御両人
能々御勘考之上、以御工夫新御守殿より之御取計ニは
相成申間敷、右は水府御一国之事ニは無之、天下之安
危ニも相掛候訳ニて、何卒一日も早く御和熟ニ相成不
申候ては、
老公之御命令も届兼候事ゆへ、能々御考可相成候、手
荒之御事無之、只々御双方御和熟専一かと奉存候、右
ニ付、若何そ御入用之義も候ハヽ、
天下之御為　老公之御為ニ候間、無御伏臓可被仰聞候、
左候ハヽ、外入用之筋ニは如何様とも御用立可申候間、
左様御承知可被成候、宜敷御勘考御取計可被成候、極
内此段申上候、以上、

十月仲二　　薩拝

〔斉彬公書翰集所収（東大史料編纂所所蔵）〕

六五一　篤姫御広敷入日限の件について家老達

十月

六五一の一

篤姫様御広敷江　御入日限之儀、御用番阿部伊勢守様より被仰渡候段申来候、此旨向々江可申渡候、

十月　　下總

六五一の二

松平薩摩守江

篤姫御方御広敷江　御入

十一月十一日

右之通被　仰出候間可被得其意候

十月　　下總

〔石窓秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六五二　松平慶永へ書翰（安政三年十一月カ）

○在福井松平慶永贈在江戸島津齊彬書（安政三年丙辰十一月五日）

齊彬朱書答之（安政四年丁巳四月二日）　務蔵

一翰謹啓、寒冷次第ニ相募候処、先以愈御清安被成御興居奉恭寿候、陳は英夷渡来之条追々略伝承之、今更駭然之至御座候、於其表は定て事情委縷御見聞之御儀と奉存候、今般櫻閣へ別段懸り被仰付、且貿易之儀に付取調方夫々被仰付等も致承知候、何分にも一層之大患不容易時勢に御座候、追々開港交易も広大相成可申、右に付ては幕庭如何之御所置相成候事に候哉、定て貴兄には種々良案御工夫も可被為在と存候、当今閣老勘局之光景如何に候哉、辰之様子如何と存候、辰并勘局へも時々御面談も可被為在、右等巨細之訳も多々可有之、深密之光景御承知之条も可有之、尤他漏泄不仕筈に候間、極密々垂諭奉希候、千里之隔地何事も委曲承知不仕、殊更御案し申上候（老中佐倉藩主堀田備中守正睦、佐倉桜音訓同十月七日正睦外国事務取扱）

〔島津斉彬朱書カ〕

櫻閣之儀専らと申なから、矢張辰閣之所置に御座候より、弥交易被仰付候様子に相聞得申候、所置次第にては格別之富強之皇国にも可相成候得は、如何可相成哉、光景頓と相分不申候、此節は色々取込候間、何事も探聞不仕候、夫故何事も存不申、又是より追々閑暇にも可相成候間、委曲承り可申上候、

○水老公之光景は如何、近頃は波静かに相成哉、相伺度、例之御登営御六ヶ敷儀と奉存候、

〔島津斉彬朱書カ〕

中々御登営所には無之、当公愛妾下宿之大失策有之、姫君

様御逝去旁又々大不評判、頓と致かた無之候、

○御結婚も近々に可被為在、恭寿無彊、貴兄にも嘸々御安堵御満悦と奉存候、当今之世態ゆへ定て御質素之御儀とは奉存候へ共、尚又後宮御附々如旧法被仰付候哉、又は多分之御減少に候哉、其他至密之義迄巨細御承知可被成、尚又右辺之御模様相伺度候（当公即水戸藩主徳川慶篤姫君、即慶篤妻、名線、将軍家慶養女、有栖川幟仁親王長女、小石川彊当御守殿十一月九日逝、斉彬女、近衛忠煕養女、結婚将軍家定）（作疆）〔島津斉彬朱書カ〕十一日無御滞相済、誠に安心仕候、御礼万々申上候、委細之光景追々可申上候、少々御減少之事にて候得共、格別詮立候程には存し不申候（〔ママ〕是歳十一日引移〔十一月十八日婚〕〔十二月十八日の誤カ〕）

○西城之義は兼ても御咄合申上候義にて、貴兄には今般之御結婚後は御工夫も被為在候由伺居、別て当節と相成候ては、御建立無之候ては不相叶義と奉存候間、何卒右儲弐御建立之御場合に相成候様、御周旋願は敷事に候、右等之儀当世態一体之模様、前文之趣時々之伝承にては熟知も不致、日夜懸念仕居候事に候間、乍御面倒事情巨細共為御聞被下度候、尚心得にも可相成は渇望之事に御座候、何卒貴兄之心事御見詰無御伏蔵示諭之程偏奉伏希候、

〔島津斉彬朱書カ〕
水戸府老公之御所置誠大失策、両田不居候ては闇と奉存候、又々姦物再発可仕と奉存候、如仰工夫も御座候処に先比之一橋之事并に此節御逝去一条にて、水府之事誠大不評に候間、中々急々申出候義無覚束奉存候、紀之方に候得ば申出候ても可然候得共、当時之光景にては水戸え掛り候義は、中々むつかしくと奉存候（水戸謀臣藤田誠之進・戸田忠太夫安政二年十月二日夜饗死、慶篤妻線十一月十九日逝、紀伊孝相慶福即家茂）

一内密なからジカタラ行之事評決に相成候よし、承り申候、姫君御病発、当公手つよき事被仰候て之事かと申事に御座候、以上（姫君即線当公即慶篤）

先は右時下御見舞旁如此に御座候、恐惶謹言、

霜月五日

二白、時下為天下御自愛奉専念候、次に小生無異乍憚御降意被下度、本文之趣何卒委縷垂教奉伏願候、

以上、

〔旧幕府『戸川安宅編』所収〕

六五三　篤姫縁組婚礼の件に関して家老達　十二月十四日

六五三の一

先月惣出仕月次御礼も有之候段、前日大御目附衆御書付を以被仰渡候付

太守様御登　城被遊候処御礼済、大廊下江御一統様御

官順之通御列居、御老中内藤紀伊守様より　篤姫御方
近衛様御養女ニ被　仰出、兼て被仰合も有之候付、
御縁組御弘且御結納当月中、　御婚礼之儀は十二月中
たるへく旨被仰出、
篤君御方　姫君様と可奉称旨、御演達有之候段御到来
候、依之御一門方并諸大身分、其外月次御礼罷出候面
々、明十五日御礼後居残、　御両殿様江御祝儀於席々
謁可被申上候、
右之通表方江致通達、奥掛御勝手方江も可相達候、
十二月十四日　伯耆

六五三の二
先月十五日御縁組被　仰出候御祝儀ニ付、従　姫君様
太守様江鯛一折
宰相様江御肴一折料金千疋
御前様江鯛一折御奉文を以御内々被遊
御拝領候段御到来候、依之御一門方并諸大身分、其外
月次御礼罷出候面々、明十五日御礼後居残、御両殿様
江御祝儀於席々謁可被申上候、
右書同断、
十二月十四日　伯耆
〔石室秘稿中「藩藩古今要章漫録」所収(国立国会図書館所蔵)〕

〔参考　徳川斉昭書翰(島津斉彬宛)〕
寒威無御障扑躍々々、過日は御臺所御広敷入相済、且今日
は御結納之由、御安心と存候、乍然彼是御入費令深察候、
御祝義旁申進候也、
十二月十一日　水隠士
薩州殿江
〔山田三次氏所蔵〕

六五四　島津久徴外三名役掛の件について家老達

十二月

一宗門方掛　嶋津下總殿
一壽國寺掛
一千眼寺掛
一唐船方掛　嶋津伯耆殿
一御数寄屋掛
一御薬園掛　若年寄　川上矢五太夫殿

右之通掛被仰付候、
右向々江可致通達候、
十二月　筑後
（石室秘稿中「藩落古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵））

六五五　生子殺しの禁止について家老達　十二月

一生出之子を産所ニて直ニ殺候国柄も有之段相聞得不仁之至候、以来右体之儀無之様、村役人共は勿論百姓共ニも相互に心を付可申旨、明和之度従公義被仰渡置候付ては、御領国中繁栄郷村之余勢相成候付、右等之儀急度有之間敷、万一不守之者は糺方之上其科可被仰付旨被　仰出、安永・天明・天保之度申渡有之候付、人々其心得は有之筈候得共、若哉所帯方不如意之者共生計方之儀抔存し過、末々ニ至り産所ニて流産血荒等之筋取扱候族も有之候ては不仁之至、別て不可然事ニ付、猶又此節稠敷可申渡置旨
御沙汰被為　在候付、難有　御趣意之程弥以無忘却様堅可相守候、此旨向々江不洩様可致通達候、
十二月　下總　筑後　伯耆　駿河　伊織
（石室秘稿中「藩落古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵））

六五六　鎌田正純役掛の件について家老達　安政四年正月（上旬カ）

一若年寄
一御役料高三百石
鎌田出雲殿
右之通御役替被　仰付、御役料高被下置、席順川上矢五太夫上可罷在候、

一　右同人
右守衛方ニて当詰被　仰付候、
右之通旧蠟廿日（十二月）　御直ニ被仰付候、
右同人
右は当詰中御家老方御用も承、御家老名前を以致取扱、月番繰廻相勤候様、右内々被仰付候、
右之通於江戸被　仰付候段申来候条、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方へも可相達候、
正月　駿河
（石室秘稿中「藩落古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵））

六五七　島津久包・川上龍衛役掛の件について
家老達　正月十三日
島津　登殿
一御家老

右之通　御名代嶋津又四郎（貴敎、垂水領主島津讃岐嫡）殿ニて被
仰付、加判同役同前、御役料高千石被下置候、席順新
納駿河殿頭罷在候様被仰付候、
一大目附　川上龍衞殿
右之通御役替被　仰付、御役料高弐百石被下置、席順
頴娃織部（久武）次罷在候様被仰付候、
右之通被　仰付候、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手
方へ可相達候、
正月（十三日）　伊織
〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六五八　蔵方心付の件に関して家老達　正月

一蔵方御心付之儀、奥向勤之面々其外諸御役場書役等江
以年限申付候儀ニて、是以多人数之事候得は繰合調兼、
両人相中又は三四人も割合乍漸繰合事候処、近年奉行
頭人之内同席訴訟自分願、御役場毎ニ規模候様差向心
得、内意申出候向及多人数、右ニ付ては一御役場より幾
人も願出間敷、就中江戸詰等之御役場は掛合之上申出
候様、先年より度々申渡置候趣も有之、勿論蔵数之儀
も為差知事候処、其心得も無之、一統等閑ニ相心得候
処より、右次第別て不勘弁之至候、向後差知実々困窮
之向は、依訳は吟味も可有之、尤内意等申出候儀比合
も有之候処、差掛内意申出候向も有之猶更繰合至て六
ヶ敷候付、以来四月限願書可差出候、乍此上差掛内意
申出候ても取揚不申付候、此旨向々江不洩様屹と申可
渡事、
〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六五九　政務改革年限延期について家老達　正月

御改革御年限去辰年迄ニ候得共、当巳年より五ヶ年嵩
被　仰付候旨　御沙汰被為在候段、江戸より申来候、
此旨向々江不洩様可致通達候、
正月　駿河
〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六六〇　松平慶永へ書翰二月二十八日

○在江戸島津齊彬贈在福井松平慶永書（安政四年丁巳二月廿八日書四月二日発送石黒務蔵）
要用左に奉申上候、
一水府之儀、追々龍士より申上候義と奉存候、何分世上
之評判不宜、乍然先年は老公之方あしく、当公は宜敷

向に申者多く候処、去年線様之事（「御事」照・順）より大奥其外共、当公之義あしき処相分り、老公之方宜敷様申候よし、しかし御登城等之事は、先御六ヶ敷様子に相聞得申候、当時之処にては、先静謐之様子に御座候得ども、薄々承候得は、未だ国は治兼候哉に相聞得申候（伊予宇和島藩主伊達遠江守宗城卿在麻布龍土、老公即斉昭、線即慶篤妻）

一異船之事、下田官吏色々申立候よしにて、去冬奉行通詞立帰、段々言上に相成候よしながら、何分未た御治定之義無之、兎角勘定奉行等色々申候計之よしに御座候、此間承候得ば、官吏より軍船参り候はゞ、約条に違候事ワシントンえ可申遣、左候はゞ（左カ）大統領何とか手強之取計も可有之、又は官吏之義は、日本之異船参候節万事取扱候事故、七里に不構日本中通行勝手に可致などゝ申立、或は通用銀不相当に候段色々申立、閣老も当惑之様子に相聞得申候、

一御城之様子先相替候事もなく候得ども、此比は例之おしか（おしか即将軍家定妾）少々色々申候哉に聞得申候、其外先づ無事に候得共、兼て御打合せも申上候西城等之御事、御直にと存候処、当時は詮立候御都合にては無之、いづれ本印・歌印（本寿院（歌橋））より出不申候てはむつかしと奉存候、委敷事は何分筆紙に難尽御座候、拝眉ならでは申上兼候、扨々困り入候事に御座候、小子早御暇之考に候間、若拝眉不相調候はゞ、伊達え委敷咄候間、御聞可被下候、先は此段要用申上候、以上（本寿院跡部氏即家定生母上臈歌橋佐藤氏）

二月廿八日認置

〃　二月廿八日認

添書　　済（此一字慶永筆）

（旧幕府所収（戸川安宅編）、他に照国公文書・昨夢紀事・順聖公年譜）

六六一　島津貴敦役掛の件について家老達　二月

御軍役方

御名代　　垂水（垂水領主島津豊後嫡、貴敦）

嶋津又四郎殿

右之通被　仰付候、左候て御用之節は御軍役方江も出席御用被承届候様被　仰出候、右之通　御名代嶋（久治、音之城領主）津圖書ニて被　仰付候条表方江致通達、奥掛御勝手方へも可相達候、

二月　　駿河

（石室秘稿中「藾藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵））

六六二　式日等の衣服着用について家老達　二月

二十九日

諸事簡易之御製（制）度ニ被為復候御旨も有之、殊ニ地震ニ

付ては諸向一同難渋ニ及ひ、格外省略可致候付ては、殿中を始着服当分省略方之儀、去卯（安政二年）年十月被　仰出候処、右之内式定候節熨斗目長袴并熨斗目白帷子花色小袖等着用之廉々は、来巳（安政四年）年より都て前之通可相心得候、尤質素節倹（検カ）可相守旨度々被　仰出之趣は、弥以違失無之常々麁服着用可致儀勿論之儀ニて候間、木綿紋附単肩衣袴等着用之儀は、先般被　仰出候通可相心得候、

右之通向々江不洩様可被相触候、
（安政三年十二月二十八日）
十二月

別紙之通被　仰渡候条、此旨組中支配中諸郷江不洩様可被申渡候、

二月廿九日

御家老座印

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六六三　松平慶永へ書翰　三月四日

○在江戸島津齊彬贈在福井松平慶永書（安政四年丁巳三月四日書、四月二日発送石黒務蔵）

一筆致拝啓候、愈御清安奉賀候、然は去冬は御引移御婚礼万端無御滞、幾久敷目出度御儀奉存候、小子誠に大安心仕候、右に付ては、先年以来種々御配慮被下候故、何事も無御滞被為済、御礼筆紙に難尽、難有奉存候、神田橋えも不取敢御礼申上候得共、猶又宜敷奉願候、扨又此品御礼呈書仕候印迄致進上候、早速御礼可申上候処に、当春早々差合旁にて大延引に相成、恐入奉存候、其後風気流行いたし、存外延引仕候条、呉々御仁免奉願候、恐惶謹言、

三月四日　　松　薩摩守

齊彬花押

松　越前守様

済（此一字慶永（筆カ）年）

（斉彬女近衛篤子婚家定）（家斉第十一女浅嫁松平越前守斉承、斉承卒後号松栄院住神田橋邸、称神田橋御住居、慶永養祖母也、斉彬称松平）

〔旧幕府（戸川安宅編）所収、他に斉彬公書翰集（東大史料編纂所所蔵）〕

六六四　幕府へ届（琉球へ佛船渡来の件）三月五日

拙者領琉球国之内那覇江、去年九月廿八日、異国船壱艘卸碇候ニ付、役々差越、本国・来着之次第相尋候処、佛蘭西国之船ニて、去年着之提督乗船、人数六百人之内唐人拾人乗組、上海より寧波江渡海、彼地より渡海之趣申出候、左候て乗組之弐人上陸、逗留佛人住家江差越、一同本船江連行為致一宿、同晦日提督使を以、去年約条書為替置、残置候佛人、通行之砌窃ニ人相附、

人家門戸店打開置、品物等望之侭不為相調、就ては約条書ニ致相違候ニ付、無其儀様可取計、向後於相背ハ、其罪可相糺抔種々難題申聞、尤逗留神父壱人可列帰、右為代神父弐人・唐人壱人可残置旨申出候ニ付、此上人数相重り候てハ、尚以会釈不行届段、遮て申断候得共不聞入、逗留神父壱人ハ本船江列行、右三人残し置、十月二日出帆、未申之方江乗行候、依之取締向之儀、猶又厳重ニ申付置候旨、此節琉球より飛船を以申越候間、委細長崎奉行江申達候由、国元家来より申越候、此段及御届候、以上、

三月五日　　松平薩摩守

（大日本古文書（幕末外国関係文書）所収）

六六五　古金銀貨引替に関する幕令について家老通達　三月十四日

慶長銀百貫目付代銀弐百拾四貫六拾五匁三分ニて候処去ル卯年銀之双替相増候付、以来弐百五拾八貫五百五匁三分之積、仕来之通六拾目替を以、金ニて四千三百八両壱分、永百七拾壱文六分六厘六毛之割合を以被差出候様従　公儀被仰渡、三月十四日御家老座御通達、

大目付江

張紙

銀弐百五拾八貫五百五匁三分

六拾目替ニて割ハ

永銭四千三百八貫四百弐拾壱文六分六厘六毛ニ成ル、

永壱貫文は金壱両故

此金四千三百八両ト四百弐拾壱文六分六厘六毛

永壱貫文を四ニ割弐百五拾文ニ成る、是則金壱分也、右之四百弐拾壱文余之内弐百五拾文を引、金ニ直シ候得は

金四千三百八両壱分ト

永百七拾壱文六分六厘六毛ト成也、

右を現金銀ニて相渡時ハ、永百七拾壱文余ハ六拾目を掛戻し、銀拾匁三分ト成候て相渡賦ニ可有之候、

（石室秘稿中「蕉藩古今要套漫録」所収（国立国会図書館所蔵））

六六六　松平慶永へ書翰　三月十五日

○在江戸島津齊彬贈在福井松平慶永書（安政四年丁巳三月十五日書送石黒務蔵）

四月二日発

先日は尊書忝奉存候、愈御清安奉賀候、此程申上候通に去年来御不沙汰申上候義、申分之次第も無之恐入奉

存候、扨西条之一条細々被仰下、重畳御尤至極、実に一日も早御治定無之候ては人心無覚束、御同意に奉存候間、早速大奥へも申通候て建白仕度事に候へ共、先便申上候通り、極内実は如何に候や難計候得共、一通り御内々之処ニては御間柄も(家定与篤子夫婦間親睦、所謂中よきを云)宜敷、此上は御たん生を奉待候との事、大奥専ら申居候様子之処へ申出候ても、気請如何可有之哉、折角申出候て不都合之節は、却て以後之障にも可相成と、小子は勿論藍山君(伊達宗城号藍山、尾張権中納言慶恕後慶勝)同様に被存候間、幸尾公御参府に付、内々申上試候処、是また御同意にて、何分未た時節に不相成と思召候間、当年中も様子見合候て可然と被仰下候、其上に水老(斉昭)・(慶篤)当公共何分評判不宜、申出候て調候とも、紀之方(紀伊宰相慶福即家茂)必定と被存候間、今少し様子見合候方可然哉、其上御引移(斉彬自分の女なるも、幕府に嫁したる以上は主あしらひにて敬辞を用いたるなり)前夜にも委敷申上置、右様之御直話出来候哉、又一と紀之処等上之処如何に候哉、委敷御さくり被成候様申上候得共、未た何事も不被仰下候間、今少し時節見計ひ候方、却て可然哉に被存候、此節御参府之上、世上之光景御覧御座候て、弥宜敷と思召候はゝ、被仰下次第、道中よりにても大奥へ内々申上通候(置カ)様可仕、先は此段貴答旁申上候、且又当地光景等之事は、伊達(宗城)より細事申上候由ゆへ、別だん不申上候、何分勘定奉行之勢ひ甚敷、中々外より之申立は被行不申様子に御座候、河内伊勢守(松平近直)と内々申上候よし、御着之上御見聞被成候はゝ可相分、御勘考ものと奉存候、先は先日之貴答迄早々奉申上候、恐惶謹言、

(勘定奉行松平近直老中阿部伊勢守正弘の殊遇を得て権勢弥大なるより近直を目して河内伊勢守と嘲唱せるなり)

三月十五日　　齊彬

越前中将公閣下

猶々、今日御暇御礼申上難有奉存候、来月三日出立之内定に御座候間、拝眉出来兼可申候、残念奉存候、しかし若途中御行逢申上候はゝ、駕籠なから拝眉申上度奉存候、若二日御着に候はゝ、廻勤より推参可仕、此段兼て申上置候、以上、

〃　三月十五日すむ(此七字慶永筆)

越前賢明公閣下　　齊彬

(旧幕府(戸川安宅編)所収、他に昨夢紀事・照国公文書・順聖公年譜)

六六七　松平慶永へ書翰　三月十五日

○在江戸島津齊彬贈在福井松平慶永書(安政四年丁巳三月十四日書送石黒務蔵)

一琉球之義何も不相分候処、此節飛船参候、去年九月末佛船壱艘参候て、直に帰帆之段申来候、兎角約条に相違之事色々申掛、以後右様之義有之時は国王之恥辱に可相成段、品々申立候よしに御座候、皇国にても御存知のとをりゆへ何分いたし方無之候間、条約に基き取計ひ候外有間敷段申遣、天守教之事は弥厳重に取計ひ候様、急度申遣候事に御座候、万事手後に相成候得は、猶更難題申掛候間、手早に下知も致度候得共、遠海にて行届兼、残念に奉存候、唐国弥朱氏盛に御座候段、評判申来候、賊船益多盛に候との事、佛人申候よしに御座候、先此段申上候、以上、

別啓　三月十五日

〔旧幕府(吉川安宅編)・島津家書翰集(日本史籍協会編)所収〕

六六八　島津齊彬の江戸城内席詰の件について

家老達　三月（十五日カ）

六六八の一

〔幕府老中達（大目付宛）〕

松平薩摩守

朔望其外登

城之節、向後大廊下下之休息所ニ罷在候様可被達候、尤年始・五節句等は、先是迄之通可被心得候、此段も可被達置候、

大目付江

〔家老達〕

○この文書は、本文第五四〇号文書（安政四年三月記録奉行宛家老島津久徴達）と同文重複により略す。

〔参考　包紙ウハ書〕

〔宋書〕

「七拾番」

太守様御事、朔望其外御登　城之節々、大廊下下之御休息所江被遊御座候様、大御目附衆江御達相成候御書付壱通、右付下總殿御添書壱通、安政四年巳三月十五日下總殿より、橋口與一郎江被成御渡、白木御文書拾番箱江納之置候事、

〔東大史料編纂所所蔵、他に追録旧記雑録（鹿児島県史料旧記雑録追録八）所収〕

六六八の二

〔家老達〕

先月十五日（二月）大目付伊澤美作守殿ヨリ、御留守居御呼出シニ付、御留守居付役仙波市十郎罷出候処、美作守殿御出席ニテ、大守様（齊彬公）御儀、朔望其外御登城之節向後大廊下下之御部屋御休息ニ可被成御座、

年頭・五節句等ハ先ツ是迄ノ通リ可被成　御心得旨御書取被相渡、左候テ阿部伊勢守様ヨリ御直達ノ筈候得共御不参ニ付御留守居ヘ御達被成候段御到来候云々、

三月　下總

営中ニ於テ各藩侯登城ノ時夫々扣席ノ規定アリ、此ノ御方ニハ大広間ノ御席ナリシカ、大廊下下之御部屋御休息所ニ御扣云々ハ、特別ニ出タルモノナリ、右ハ篤姫様御続柄等ヨリノ事ナリト云フ、右御扣所ハ上中下ノ数間アリテ、三卿清水・田安・一橋、三家紀・尾・水三藩、又ハ御家門（幕府族家ヲ御家門ト通唱ス）ノ面々扣所ナリ、斯ク御扣所迄モ特別ニ御承知アリシハ、当時御名誉ノ御事ナリキ、

（順聖公年譜・藩史料斉彬公・斉彬公史料（公政五年の部）所収（東大史料編纂所所蔵））

六六九　松平慶永へ書翰　三月二十九日

過日は尊書忝奉存候、先以愈御清栄奉欣喜候、然は御細書を以被仰下候西城之義、委細奉承知候、先比中より申上候通り、御引移後は早速にも可申上と存罷在候処、別紙申上候通り、御間柄も宜敷との御事にて、此上は御出生御一段と大奥にても申候由、其上余り御引移り当座には、先何事も御沙汰無之方よろしくと申事之由、本壽院（家定生母）様御格直り等の事も、歌印（歌橋）へ被仰出候よしなから、御とめ申上候との事に御座候、夫に上へ御直に被仰上候事相叶候へは宜敷候へ共、中々左様の訳にては無之、尤御上り前西城之義は能々申上含置候間、上にて右様の御はなしにても御座候へは、御進めの処は御承知之事、此間も内々申上置候事ながら、何分此節右様の事被仰上候義は、むつかしく様子に御座候、御両人様もつほねも能々相心得居候事なから、無程被（理カ）仰出候ても詮立候事は有間敷、却て害に相成候ては不宜との御模様に御座候まゝ、御忠志の処は御同意候へ共、今少し御猶予の方、却て可然と奉存候、其上小石川の評判散々にて御座候間、当時とんと不申出方かと乍恐奉存候、兼て申上置候事故、都合宜敷候へは、無相違可被仰上筈に御座候、

一尾公へも被仰上候由、是以未た時節到来不致候間、先は扣置候方と被仰候、

一此間辰の口へ参候節、彼方より貴君御心配御尤に候へ共、何事も時節御座候ものにて、折角の御忠志も時節あしき節被仰候ては、同列共にも如何存候も難計、却て一橋貴君の御為にも不相成候間、猶又小子よりも申上候様、御着の上は御直にも可申上段申候間、委細相

心得候、小子も右の義は相願度、奥へ可申上哉と存候
旨申候処、当時は以の外の事、何にいたせ御出生奉待
候折柄、申上候ても詮立候事は無之候間、いつれ時節
見合せ候外無之段被申聞候、又被申候は、余り色々申候
ては、党を結ひ候様申候〔聞え候カ〕ては、可出来ものも無に相成
申候間、時節の見計第一の事と被申候、
一右の通の事に御座候間、折角被仰下候御心配は、御尤
至極御同意に御座候へ共、先当年被仰上候処は御見合
之方可被成と小子は奉存候、御参府之上御内々様子御
覧被成候方可然、且又爰に大秘の事は水老公と余り御
文通等無之、御遠々しき方天下之為かと被存申候、委
細筆紙に難申上、西城の為にも第一可然と奉存候、此
処拝眉ならては申上兼候、天下の御為を思召候はゞ、当
年の御参府より、小石川の方しはらく御遠々しく、御
文通等も御差扣御座候はゝ可然、余は御賢察可被成候、
老公へ被対不相済事に候へ共、万事の御為かと奉存候
間、乍恐心底不残申上候、
一御家来両人、様子次第弊国へ可被遣由致拝承候、小子
下国の上に候へは、別て都合宜敷御座候、
一小子出立も四月三日に御座候、折角拝眉と相楽候処、
御延着相成、殊〔誠カ〕に残念至極に奉存候、
一藝州退隠にても可然哉と、内々姫君様思召候よし、夫
には奸物有之、国政不宜故の義、夫ニ付小子へ内々仰
有之、辰の口へ申込能く承知候へ共、半途にて出立候事
故、何そ御用も御座候はゝ、貴君に裏町より倉橋の伝
にて被仰出候様、末様御方へ申上置候間、万々一申参
候はゝ無事に退隠、総州家督の処御心配可被下、委細
は追て可申上候、生田筑後と申家老、我意甚敷、万事
大乱の様子にて、無拠末様思召と相見得申候、しかし
倉橋より不申上内は御内々奉希候、辰の口にても、藝
州国の為計にては無之、天下の為に候と被申候、彼方
にても能々承知の様子に御座候、
一去年以来殊に申訳無之御不音申上、何共恐入奉存候、
御引移前後非常之取込、早春は差合の上風気、其後又
々風邪両度有之、只今に咳気残り、且御承知の通りの持
病に候間、十分に熱気難計候間少々つゝ別紙したゝめ
置候次第、殊〔誠カ〕に申訳も無之、何卒御仁免可被下候、流
行風邪にて二月中は何事も出来兼、漸々当月十日比よ
り客来、其外にて殊の外の取込、夫故此書面漸く今二十
九日外より帰宅後相認候仕合、呉々も御高免可被下候、

其外色々申上度義御座候得共、何分難叶候間、考出し次第道中国元より可申上候、先は貴答旁早々申上候、恐惶謹言、

三月二十九日　　齊彬花押

越前聖明公閣下

猶々、天下の為御自愛専一奉存候、当年は英夷甚懸念御座候、亜奴も色々申立候哉に相聞へ申候、以上、

（照国公文書所収、他に昨夢紀事・順聖公年譜・旧幕府）

六七〇　松平慶永へ書翰　四月一日

○在江戸島津齊彬贈在福井松平慶永書（安政四年丁巳四月二日　石黒務翁蔵）

三月十八日之尊書、四月二日相達忝奉存候、愈御清安奉賀候、然は橋公の義、別紙にも申上候、二日に辰えも猶又申見候処、中々当時申出候ては不宜、厚心得候事なから、未だ時節不参段、種々被申聞候、扨又大久保市郎兵衛之事、是は小子少しも人物弁へ不申候、今少し在府に候得は、承合候ても可相分候得共、日合無之候間、出府の上御糺御座候様奉存候、松對馬之事（勘定奉行松平式部少輔近韶初称対馬守）同人朔日に参候間、委細承り申候、二日に辰え申置候返答むつかしき様に存申候、扨又廿七日に、橋公え初て寛々拝眉、水府之事に付、思召相伺候序、色々御はなしも有之、貴君にも御参府御出御座候はゝ、御人払御願被成、十分に御はなし御座候はゝ宜敷と奉存候、度々にては却て不宜候得共、一両度御逢は宜敷と奉存候、玄淋事（玄淋は一橋附同朋ならん）能々心得候間、同人え人払之事御沙汰御座候得は宜敷、中々能御心得の様に奉存候、実に早く西城に奉仰候御人物、しかし御慢心之処を折角御つゝしみ御座候様、被仰上候て可然と奉存候、当時之処にては、温恭無事之御人物と人々奉存候方、可然哉と奉愚考候、先は御貴答迄早々申上候、恐惶謹言、

四月二日夜　　齊彬　花押

越前明公

猶々、別紙にても申上候通、先比中より之呈書認置候分、取つかね差上申候、何卒御仁免偏に奉希候、以後不相替御懇情奉希候、以上、

三白、尊書え書入等仕候も御座候、呉々御免奉願候、以上、

越前明公　　齊彬拝答

済巳四月二日（此六字慶永筆）

（旧幕府〔戸川安宅編〕所収、他に照国公文書・昨夢紀事・順聖公年譜）

駿河

安政四年巳四月廿五日、御下向之節西之宮駅より被成下候御直書也

六七一　徳川齊昭へ書翰　四月二日

奉復　薩摩守

奉呈

用事

昨日ハ尊書被下難有奉拝見候、日々不同之季候ニ御座候処、益御機嫌能被遊御座恐悦奉存候、然は今日発駕之儀、入　御聴候由ニて、　御懇書頂戴被仰付、難有奉存候、御暇乞参上可申上処、此節は長々之滞府旁大取込仕、罷出候儀不相叶、重畳恐入奉存候、且又先達は古代写之盆品奉差上候処、御用ニ相成候由被仰下、難有仕合奉存候、在府中は品々蒙　御懇命難有、以後不相変奉願上候、先日は　一橋江罷出、初て寛々ト拝顔仕、品々御懇之御義、是又難有奉存候、昨日御請御礼可申上処、留守ニて不申上恐入奉存候、出立掛取込御請迄早々奉申上候、猶着之上万々可奉申上候、恐惶頓首、

四月二日

猶々、時候　御厭被為在候様奉存候、以上、

（島津家書翰集所収（日本史籍協会叢書））

六七二　新納久仰へ書翰　四月二十五日

一筆申入候、愈無事珍重存候、道中無滞今廿五日大坂出立、西宮止宿いたし候、大坂ニて巳より未迄ニ十万金借用相談も相整候、其地内用方金も当月中六千両差下シ候、都合申付置候外ニ其節一万両金山用之為ニ差下シ申候、余は着之上可申談候、

一其外色々申談候義も有之候、

一御物方・内用方・寺社方・厩方、其外諸人拝借ニ相成候分之金子株ニ差分ケ、着迄之内ニ取調置候様可致候、納戸方も同様可申付候、少々考も有之、委細着之上可申談候、

一吉川呼寄候も、大坂万事平田と申談、改正申付候考ニ有之候、総等是迄之通ニては不宜、以来現在金之処ニて申付候考ニ有之候、先は差掛用事可申入、早々如斯ニ候也、

四月廿五日西宮より

〔裏封ウハ書カ〕
〔印影（繊）〕　駿河江用事

〔「斉彬公久光公御自筆写等　新納氏蔵」所収（東大史料編纂所所蔵）〕

六七三　島津齊興参府に関して家老達　四月

宰相様　御参府、先月廿八日以　上使堀田備中守様御懇之被為蒙　上意、去ル朔日御参府之御礼、御疝積気御快気次第
御登　城　御断、同日御使者を以御献上物等無御滞被為済候段御到来候、依之御一門方并諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明後廿五日四時登　城、於席々謁御家老御祝儀可被申上候、

四月　伯耆

〔石室秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六七四　早川兼彝・三原經禮へ書翰　五月八日

一筆申入候、愈無事珍重存候、道中無滞令通行候、用事左ニ申入候、

一於大坂十万両借入も相調申候、右之内此節早々一万両其地江差下シ候様、跡一万両之義、六月比迄ニは差下候様相達置申候、大坂蔵本ニも一万六千両有之候間、国元江一万六千両は此節差下候、当年四万万、来年四万両、来々年二万両之約束、返済は申年より五ヶ年賦之約条ニて候、為心得此段申入候、

一大坂毎月総之義、是迄之通ニては現之在金と相違之義多、何之見合も相成兼候間、当五月より相改候様、且又色々取調事も有之候間、吉川源右衛門事出坂申付、万端平田申談、等閑ニ相成居候事等、治定改正いたし候様申付候、様子次第ニては其地江も差下シ、清右衛門申談、金方之事為致治定可申哉とも存候、此儀は未タ不定之事ニ御座候、

一其地普請之様子委しく可申越候、表之方は別て木材上通ニ無之様、左様ニ無之候ては、上使等始見分如何ニ候間、小節等は御座候方宜敷御座候、毎月末ニ如何程出来候と申義、委細可申越候、

一其地町人より借入金之義如可ニ候哉、様子委敷可申遣候、若出来候ハヽ、先当分之処は、紅花代六千両之内五千両差出候テモ宜敷候、当秋借入二万両之義は、国江遣候間、左様心得可申候、

一宰相様芝御見分ニ被為入候義、相願候方宜敷と休之丞申聞候間、願置申候間其内可被為入と存候、何そ御差図御座候ハヽ、先ツ其段申遣候上可取計候、

一庭茶屋之図は、下着之上拵候て可遣候、
一金山一条之儀は、追々玄碩より掛合可申候、着之上二十貫位は早々差登せ可申、又古金之侭ニても少々可差登、左候て伊勢や之方江相談いたし可申候、
一大元丸之義、其後如何ニ相成候哉、若々急ニ出来兼候ては、又金くりニ差支可申と存候、其様子次第又致シ様も可有之候間、様子委敷可申越候、帆之差図延引ニ候ハヽ、催促いたし、辰之口江も以市左衛門可申入候、
一当年も嶋登船二艘破船有之、益差支候間、此節千五百石いろは丸形二艘新造立之儀申付候、又下着之上、以都合手山産物方二十反位ノ処可申付、委細追々可申遣候、
一錫当年も三万斤位は是非御用ニ相成候様、長岡江頼入可申候、
先は用事申入候、後日猶又可申入候也、

五月八日認置

藤五郎
五郎兵衛江

〔封筒ウハ書カ〕

用事

藤五郎
五郎兵衛江

〔包紙ウハ書カ〕
〔印〕〔封〕

用事

早川五郎兵衛江

〔鹿児島市磯尚古集成館所蔵、賜早川五郎兵衛書・島津斉彬公御遺筒所収〕

六七五　早川兼彝へ書翰　五月八日

猶又別段申入候、異人之様子如何之事ニ候哉、天神下江承合せ可申遣候、琉球江和蘭人条約之義、如何ニ候や早承度、水野筑後（忠徳、勘定奉行）奉行兼帯被仰付候ては、定て夫らの義も長崎江差越候上、御返答ニ可相成と存候、相知次第以早便申越候様可致候、
一高輪御願之義は、とても当年善悪相分り候事ニは無之候、出立前日申聞候趣ニては、来年参府之上之事と被存候、御右筆口気も委細可申越候、且又高輪ニて休之丞より御沙汰も有之候ハヽ、折角無手抜申込候て宜しく御座候、
一筑後江門出入其外之義、以書付申付候処、此間内々承候へハ、厳敷取しまりやかましく申との事、夫を豊後事夫程ニ申ニも不及と為申よし、内々承り候、弥左様

之様子ニ候哉、可申越候、
一田町上屋しき等、門出入少しは取しまりニ相成申候や承度候、横目之内不宜もの有之哉ニ相聞得申候、内々様子承度存申候、
一宰相様御見分御入之節、何そ御差図も御座候ハヽ、早々可申越候、屏を皆黒塗と御沙汰無相違と存候間、屏之義は先跡江廻し候様可致候、是迄之馬場は庭内江取込ミ、馬屋と馬場之間江屏拵候考ニ御座候、右ハ追々表向可申遣候、
一庭之茶屋は色々取合可申と存候、其外庭之図、地割ニて画図遣候様可致候、左候得は考も有之候、先は別紙用事申入候也、

五月八日認置

五郎兵衛江

〔封紙ウハ書カ〕
要用

五郎兵衛江

〔包紙ウハ書カ〕
〔印（封）〕〔印（封）〕〔印（封）〕

要用

五郎兵衛
務江

〔鹿児島市磯尚古集成館所蔵、他に島津斉彬公御遺簡・賜早川五郎兵衛書所収〕

六七六　齊彬在国中の諸御礼出座刻限について若年寄達　五月

当　御在国中諸御礼　御出座御刻限、四ツ時と被　仰出候条、可承向江可申渡候、

五月　矢五太夫川上　弥五太夫久明ノ家

〔右寄秘稿中「藩儀古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六七七　齊彬女子典姫について広敷用人届、外一通　五月

六七七の一
〔広敷用人届　五月二十日〕

太守様御子様

典姫様

御実母

すま

右之親

亡伊集院中二

兼珍

右は御実母并右之親可申出旨被仰渡趣承知仕、右之通御年寄被申出候間、此段申上候、以上、

巳五月廿日　御広敷御用人

〔参考　包紙ウハ書〕
〔朱書〕
「七拾壱番」　白木十番箱

太守様御女子　典姫様御母附并右親姓名実名、御広敷御用人より申出候横切書付壱通、

安政四年巳五月廿三日

〔東大史料編纂所所蔵、他に薩藩旧記雑録所収〕

六七七の二
〔家老達カ〕

典姫様（ノリ）

右於御当地御出生之　御女子様、御虚弱ニて御届被扣置候処、追々御丈夫被為成候ニ附、御前様御養被　仰出、御届被　仰上、右之通奉称候、

〔石寒秘稿中「薩藩古今要章漫録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六七八　大目付以上へ内諭　閏五月九日

安政四年巳閏五月九日、竪山武兵衛御取次ニて致承知候、
大目付以上江御心付一件也、
御筆御書取

一是迄三役以上、年々為駕籠代蔵方名代勤申付事候得共、名実不相当ニ有之、風儀ニも相拘候次第ニ付、当年より蔵方名代勤之儀は不申付候、左候て右為代沖之永良部嶋砂糖代利益之内、左之通可遣候、

一家老　七貫二百目ツヽ、

一若年寄　六貫目ツヽ、

一大目付　五貫目ツヽ、

右之段駿河江可申聞候、

左候て右蔵方明所之儀は、書役初諸役人江程能割合、薩方代ニ別段手当遣候儀は、可成丈無之様可取計候、

以上、

〔「斉彬公久光公御自筆写等　新納氏蔵」所収（東大史料編纂所所蔵）〕

六七九　池田慶徳へ書翰　六月二十九日

貴札致拝見候、暑中愈御安康奉賀寿候、然は着城并暑中ニ付尊書被下忝奉存候、小子事不快後養生之為、温泉入湯いたし候処相熟いたし、手足ニ致吹出物、持病は大きニ快候得共、何分執務未相叶兼候間、乍略義代筆を以申上候、

一小石川

両郷より御伝言之趣難有奉存候、前文之次第故未呈書

不仕候間、貴所様より宜被仰上可被下候、
一巴豆・胡椒之事被仰下候、先達ても被仰下胡椒は無御座候、巴豆は在合御座候間、先差上申候、しかし新種出来次第、亦々差上可申候、苗は其内船より相廻し候様可致候、領分屋久島は殊之外多分に御座候間、成丈大き成木を差上候様可致候、右之趣も宜被仰上可被下候、先は貴答旁申上候、後便委細自書を以可申上候、恐惶謹言、

六月廿九日

〔奥封ウハ書〕
松　相摸守様
貴答

松　薩摩守

〔水府明徳会彰考館所蔵〕

六八〇　故土佐藩主山内豊煕室智鏡院外三名へ書翰　夏（六月頃カ）

御文被下忝拝見いたし候、当年は別て不順之事候得共いよ〳〵御障りなく目出度在（存カ）上まいらせ候、当地ニても例年よりは冷気多不順之事ニ御座候、去ル廿三日地震御座候由、当地はとんと地震は無御座候、扨暑中ニ付何寄之品被下忝存上まいらせ候、当地より何そと存候得共当年はいまた琉船も不参、諸品払底ニ付存付之品も無之、在合之品態と懸御目まいらせ候、扨亦御存之通先年之不快、後養生之為着後早速磯江参り温泉取寄入湯いたし候処、手足其外江殊之外吹出ものいたし候ニ付、幸之事故折角追出し候手当いたし、いまた手抔ニは膏薬付居候間、此節は何分筆取かね候侭代筆ニて申上候、尤持病之方はよろしく相成候事ニ御座候、先日中より吹出もの誠ニうるさく込り入申候、被仰下候事何も承知いたしまいらせ候、委敷御返事は其内直書を以て可申上候、めて度かしく、

尚々、時候御いとゐ可被成候、めて度かしく、

於ミチ殿
〔斉興娘、土佐藩主山内豊煕室、候姫〕
知鏡院殿
〔斉興養女、勝姫〕
於カツ殿
〔斉興養女、久留米藩主有馬頼永室、晴姫〕
晴雲院殿

〔石室秘稿中「斉彬公御言行録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六八一　戸田氏彬へ書翰　夏（六月頃カ）

芳翰忝致拝見候、暑中弥御清安奉賀寿候、然は下着暑中旁何寄之品拝受千万忝奉存候、此品御礼迄ニ致呈上候、且小子少々手足ニ腫物いたし、夫故執筆難叶代筆を以て貴答申上候、尚期後便之時候、恐惶謹言、

松

〔大垣藩主、戸田氏彬〕
戸　采女正様

尚々、御自愛専一奉存候、以上、

〔石室秘稿中「斉彬公御言行録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六八二　松平武聰へ書翰　夏（六月頃カ）

貴札忝致拝見候、暑中愈御清安奉賀候、然は暑中之時御見舞被仰下忝奉存候、当地何も静謐ニ御座候、乍憚御安慮可被下候、先は貴答迄早々如斯御座候、恐惶謹言、

松　薩摩

御判

〔浜田藩主、松平武聰〕
松　右近将監様

尚々、代筆

〔石室秘稿中「斉彬公御言行録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六八三　前桑名藩主松平定和室柔正院外三名へ

書翰　夏（六月頃カ）

御文被下拝見申上候、とかく不順之事ニ御座候得共ますます御機嫌よく被為入、御目出度存上まいらせ候、当地ニても当年は珍敷冷気相交り不順ニ御座候、さて暑中旁御尋被下、何寄之御品々被下難有存上まいらせ候、当地よりも何そ上け度存候得共琉船も来着不致、品物払底候付決付之品も無之、在合之品わさと進上いたしまいらせ候、扨私ニも不快後養生之為磯江参り温泉入湯いたし候処、手足其外吹出ものいたし誠ニうるさく、しかし持病ニはよろしく候間折角追出し申候、此節は最早よほと宜候得共、未筆取かね申候得代筆を以て申上候、委敷事は其内可申上候、目出度かしく、尚々、時かふ折角御いとい被為在様存上候、めて度かしく、

〔重豪娘、桑名藩主松平定和室、孝姫〕
柔正院様
〔重豪娘、大垣藩主戸田氏正室、親姫〕
於チカ様
〔重豪娘、新庄藩主戸沢正令室、貞姫〕
桃齢院様
〔斉宣娘、臼杵藩主阿部正篤室、聡姫〕
聰徳院様

〔石室秘稿中「斉彬公御言行録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六八四　松平慶永へ書翰　夏（六月頃カ）

一筆致啓上候、然は

松榮院様事御不例之処、御逝去被遊候由承知仕驚入奉言語絶候、貴君ニも種々御配慮御愁傷之事と奉存候、御悔可申上如此御座候、恐惶謹言、

松

御判

松　越前守様

尚々、温泉入湯いたし候処、手足其外江吹出物いたし、今日迄執筆難叶無拠代筆を以て申上候、且亦倉橋江もよろしく御伝へ奉願候、以上、

〔石室秘稿中「斉彬公御言行録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六八五　松平定安へ書翰　夏（六月頃カ）

貴書忝致拝見候、弥御清安奉賀寿候、然は先達ては大坂御固め被仰出、殊ニ以思召少将御昇進之由、御吹聴被仰下恐悦至極奉存候、右御祝儀貴答旁如斯御座候、恐惶謹言、

松　薩摩

〔松江藩主、松平定安〕
松　出羽守様

自今御自愛専一奉存候、少々吹出ものいたし執筆難叶代筆を以て申上候段、御仁免可被下候、

〔石室秘稿中「斉彬公御言行録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六八六　伊達慶邦へ書翰　夏（六月頃カ）

貴書致拝見候、暑中愈御安康奉賀寿候、小子無事下着罷在候、扨先日より可致呈書処手ニ腫物いたし夫故執筆難叶延引仕候、追々快方ニは候得共未全快無之候間代筆を以貴答申上候、御仁免可被下候、先は貴答迄申上候、後便万々可申上候、恐惶々々、

松　御判

〔仙台藩主、伊達慶邦〕
松　陸奥守様

〔石室秘稿中「斉彬公御言行録」所収（国立国会図書館所蔵）〕

六八七　戸塚静海へ書翰　七月二十三日

一筆申上候、愈無事珍重ニ候、当方其後今に手ニ少々つゝ吹出もの有之候得共、動気等之方は余程軽く相成申候、明後日は本丸江帰り候筈ニ御座候、廿日よりエイラン苔・鹿角・茅根煎薬、木善砂ニハ橙皮茴香アルセム泡出シニて相用候、灸治も七九十一と景門中臍天枢いたし候、余程相応いたし候、吹出ものは十分ニ発候様ニ存申候、手之分未タ時々発し申候、温泉ニて引出候と存申候、当年時候不宜、鳴登船頓と無之、困り申候、琉球夏船も未タ参り不申候、

一宰相様　御様体書見申候、御老年之上御嘔之気味甚タ不宜、其上御水気之気味も被為在候由、此末如何と存申候、追々御快方とは存候得共、若々御不出来之事ニ候ハヽ、早々承り度候間知らせ可申候、何時ニても一封したゝめ、早川五郎兵衛江差出様、直ニ以町便申来

候間、御様子次第ニては早々可申越候、

一辰も死去、世間一変と存申候、堀田弥心配と存候、万（安政四年六月十七日）事宜敷相頼候旨、序之折可申置候、異国之所置、当時唐国争乱中ニ御治定ニ相成居候ハヽ、後来之為可然、手後れ候ては異船参候節、後手ニ可相成、唐国争乱こそ幸ひ候間、当分御治定之時節と存候段、序之節伝言可申置候、

一呉々高輪之事、御様子早々可申遣候、以上、

七月廿三日

〔印影（繊）〕　〔印影（繊）〕

用事　静海江

（斉彬公書翰戸塚静海宛所収（東大史料編纂所所蔵））

六八八　松平慶永へ書翰　七月二十九日

○在鹿島島津齊彬贈在江戸松平慶永書（安政四年丁巳七月廿九日）

一翰拝呈仕候、愈以御清栄奉賀候、扨此節は数通之尊書被下難有奉存候、一々貴答可申上処に、未た手之痛所全治不仕候間、要用之分一筆申上候、外えは文通不仕候間御内々奉願候、

一極秘難申上と申儀は外之事には無之、一橋之事貴君御忠志にて被仰上得共（縁脱カ）、辰始左様には不存様子、小子え申聞候は、越前自分之心より出候事にも無之、老公より御言はせ被成候事ニて、誠に困り候儀と申候事も御座候間、老公と御遠々敷相成候方、却て御双方之御為と存申上候事に御座候、其外閣老より伝奏迄内意に、以後水老公より内々申上候儀何事も御取揚無之様、太閤には御縁者に候間、別て其段御心得御座候様にと脇坂より無急度申出候よし、極内々近衛殿・三條殿より御直に伺申候（鷹司太閤政道、其政所ハ斉昭ノ実姉なり、京都所司代脇坂淡路守安宅、後中務大輔）、此儀も若や一橋等之事にては無之哉と存候、夫故京之方も水老公は御都合極あしく御座候旁、何分老公えは先御遠々敷方双方之為宜敷様に奉存候、此両条は極々秘密にて伊達（伊達宗城）えも不申遣候へ共、御心得迄に申上置、（候脱カ）扨京え申参候はいつ比に候哉と近衛殿え御尋申上候処去年春と思召候段承り申候、直に御投火奉希候、堀田（老中堀田備中守正睦）にては猶更之事と存候間、其心得第一に奉存候、

一唐筆之事、当時は帰唐船着前にて在（合脱カ）少御座候得共、在合之分少々致呈上候、

一帰国後温泉入湯之処吹出もの仕、今以全治不仕、夫故

手後に相成残念に奉存候、最早余程宜敷相成候間、近々所々見分等も致候考、全く先年より之持病も此吹出ものゝ業と相心得、吹出もの沢山出候と心持宜敷、少々かはき候へは腹こはり申候間、折角追出し申候手当に御座候、

一辰之口も誠に気之毒千万、天下之為可惜人物に御座候処致方も無之候、此後堀田之存候光景相変可申と存候、様子御知らせ可被下候、又井伊なと出申候哉如何、伺度存候（老中阿部伊勢守正弘、是歳六月廿八日卒、年卅九、停音三日、廿九日諸吏登営候将軍起居例也）

一倉橋（倉橋蓋し末の上臈ならんか）如何相成候哉、評判不宜敷様に承り申候、様子伺度奉存候、

一先日は肥前家来六人程参り、所々見せ申候、

一英船も不参候訳は、弥唐国との戦争故と相聞申候、委敷儀は未だ承り不申候、帰唐船当地え参候へは、少々は様子可相分と奉存候、

先は要用迄奉申上候、別て乱筆宜敷奉希候、

恐惶謹言、

七月廿九日　　薩摩守

越前守様

猶々、御自愛専一奉存候、以上、

越前賢公閣下　　齊彬

済　巳七月廿九日（此七字慶永筆）

〔旧幕府（戸川安宅編）所収、他に照国公文書・昨夢紀事（日本史籍協会編）・薩藩史料斉彬公〕

六八九　島津久寶へ書翰　八月二十五日

〔封紙ウハ書カ〕

返事　　豊後江

男女之間は厳重ニ無之候ては不相済、取締勿論ニ候得共、一大事之事故、別て可入念義、殊ニ人命ニも相抱り候上は、証拠等第一ニて候、其上江戸表之義は脇々外聞も有之候間、時と処を考候事も第一と存候、此節申出候趣、決して不宜との事には無之候得共、のそき見届候計りにて、別段言葉も不掛、外ニ証拠無之上は、穏便之以取計、内分ニて申出様も可有之と被存候、且又たとへ言葉掛申とも、脇々外聞を相考候得は、兎角穏便之取計当然之事かと存候、万事理外之理と申事も候間、以来之処前後勘弁専一かと存候、

一表通り申出候事ニ候ハヽ、一人ニても覗き候節、直ニ障子押明け詞を交し置候得は、当人壱言も無候間、外ニ証拠無之候ても宜敷候得共、詞をも交さす、障子之

破れより手を出し、女の袖を曳候様子ニ相聞得候、右之通ニては役場之仕業とは不被存候、たとへ実事ニ候とも証拠無之上は、当人屈服不致節は水掛論之外は無之、裁許甚タ六ヶ敷候、一体天下之大法もいか程証拠有之、さし知れたる罪科ニても、当人白状無之ては相当之罪科ニは不行定法ニ候、前文之ことく詞も番ひ不申、外ニ証拠無之ニおゐては、表向書付なとにて可申出訳とは不被存、仁之助事無念卒忽かと存候、前文之次第を考候得は、家老迄も無之中ニて書付は相下ヶ、内分ニて承届候姿ニ可取計事、当然かと存候、

一縦令覗き候節障子明ヶ不申とも、同役又は番之頭横目之内呼寄、両人ニて見届候得は、先せめての事ニ候得共、其義も無之、万一表向糺しニ相成候節、当人屈服無之上、何か意恨ニて右様被申出候哉と存候旨申出候か、或は女より仁之助如何之義申聞候へ共不致承知ゆへ右様之義被申掛候なと申出候節、外ニ証拠無之、いくら見届無相違と申候ても、仁之助事も聞付不申候ては不相成、静甫義も中々気性つよきものゆへ、無実之事ニ候ハヽ、如何様之義可申出も難量、昔より逆公事ニて却て迷惑ニ相成候もの、ためし不少候、

一覗き候て引取候事、場所柄と申、世上之聞得、御外聞を考候との趣意ニ候得は、時と所を考、尤之事ニ候処、跡達て出かし、心に表向申出候ては、前後之処置不致符合様ニ被存候、穏便之取計ニ候ハヽ、昨夜か様之始末見届候得とも、外ニ証拠も無之、殊ニ御場所柄ゆへ御外聞も如何と存候間、内分申出候段広敷用人迄申聞候得は、其身役場之勤は十分之事ニて、申分無之と存候、左候得は穏便之取計如何程も可有之候、軽き役場はさほとの考も無覚束候得共、肩衣相用候程之もの、前後勘弁無之は可歟事と存候、

一静甫義は、新参とは申なから家来之事ニ候間、掛念薄く候得共、女之義は他所之ものゆへ、此節証拠無之、見届候とは乍申、覗候上袖を引候計ニて実否不分明ニては、たとへ親病気之筋ニて、穏便を以て下宿申付候ても、当人覚無之事ニ候得は、始末両親江可申聞は案中ニ御座候、両親之心得次第ニては如何様可申出も難計、様子ニ依ては、

公辺江御吟味願出ス間敷ニも無之、左様相成候得は、外聞之義勿論、人命ニも相抱り候事を、一人見届候計ニて証拠無之を、其侭穏便とは乍申下宿申付候儀、不

行届取計何と心得候哉と、尋有之節は役々何と可申開哉、江戸ニては万事世上ニ流布いたし候事は存しの前ニて、実否は差置、表向届等仰山ニ申立候ては、世間江之流布必定ニて候、役場申立当然之様ニ候得共、世間之悪評之所如何心得候哉、兼々不締之所、世上ニ為知候様成ものニては無之哉、ヶ様之義、時と所と申義有之、一を知て二ヲ不知仕方かと存候、如此世上之聞得を憚り候ハヽ、仮令詞を番ひ候共、穏便之取計当然かと被存候、是迄故高輪已来間々不思議之事も有之、甚敷は妊娠ニ相成候ものも有之哉之所、皆々表向届等ニ相成候義は全く無之、内分聞置位ニて穏便無事ニ相済事、品ニ依り転役退役等ニて相済候事も有之、甚タ寛過候様ニ候得共、悪評世上ニ流布を厭ひ、止む事を得ざる取計ニて、夫等之事相考候得は書付出候とも、押返し置取計様も可在之、事六ヶ敷申様ニ候得共、父之罪を子之隠し候所、直き事其内ニ在りと申ことく、臣たる所之道理考候へは、不締を世上に知らせ候よりは、かくし候方直き事其中ニ可有之、併事品より一様ニは申兼候事なから、此節之様成義は隠し候方当然らしく被存候、実は御老年之宰相様江申上候程ニも不及、内分之掛合ニて取計様如何程も可有之と存候、一前文之趣、理屈かましき事ニ候得共、脇々江も相掛り候義、其うへ人命ニも相抱り候程之一大事は、証拠を取り候上ニも証拠無之候ては不相済、罪之疑ハしきをは罰する事なかれとも有之、其上

日新公御歌にも

罪ありて人をきるとも
　かろくすな
いかすかたなもたゝひとつ也

か様の意味考候て、以来のためニもと申聞候、以上、

猶々、別紙申遣候趣意ニて考候得は、家老より家老問合無之筋、可然と存候間、今日便問合差返候様申付候、

別紙広敷之一条、猶又及勘考候処、表向書付之届不差出、口達ニて内分承届候処ならては、無証拠之事ニて不相済、且又実否は不相糺無之処ニて不取計候ては、色々掛念も有之候間、

宰相様御沙汰之とをり、なき筋ニ致し候て之取計第一と存候、左候て其侭ニは不相済事ゆへ、靜甫儀は御発

駕前被仰付置候御趣意ニ違ひ、一人泊り毎々いたし候故、かゝる変事も被申出候、実事は無之候ても、此儀不宜、其上場所柄男女差向ニてはなし等いたし、雑談等いたし候事不念至極ニ候間、病身之処ニて一往御役願候様、左候ハヽ、無事ニ退役可被仰付と及内達候ハヽ、一言有間敷と存候、実否之処彼是申候ては不宜と存候、さて女之義は、出勤はいたさせ不申、部屋迄は今一度召呼候て、少々問合見計、当人不快ニて奉公難叶旨申出暇ニ相成候て可然哉と存候、両人惧候上之事ニ候ハヽ、女も直ニ親病気ニて相下ヶ候ても宜敷候得共、覚無之と申処無理にては不宜と存候、前文通しはらくなから一応部屋江上り候上ニ候得は、実事は無き姿ニて両親も申立様有間敷、若如何之訳と尋候ても、広敷ニて長座いたし候義不宜ゆへと申候て相済候事と存候、委細所存は別紙ニ書取申候、

一広敷向江は、別紙之趣意不差障様能々申さとし、以来不締無之様心得候は勿論なから、御外聞旁をも深く及勘弁、取計第一之旨申達シ、且また医師中ニも御大法相守、少したり共心得違無之様内達可然と存候、此後頼合等も御座候ハヽ、代り之者申遣し、御奉公等閑ニ不致様内達いたし可然哉と存候、

一大奥より広敷出入之義、昔より之定メ通りニは、中々六ヶしく難行事ゆへ、此節能折と存候間、老女并ニ広敷用人等江も吟味之上可被行程ニて、不取締無之様掟致改正候様可取計候、

一前文之通之取計ニて候へは、少々年数相立候得は如何様ニも相成候間、離縁ニは不及、其侭ニて家業修行いたし候て可然と存候、若又夫ニては人口不可然様子ニ候ハヽ、長崎江稽古か、又は国元江温泉湯治願ニてもいたし罷下り候ハヽ、又よき考も有之、当人之為ニも宜敷と存候間、厚く前後勘弁之上取計専一と存候、以上、

八月廿五日

右之通ニは御座候得共、成丈程軽目之取扱専一ニ候間、退役無之取計様も御座候ハヽ、如何様とも軽目之方、外聞旁可然と存候、以上、

〔封紙ウハ書カ〕
〔印影〕

別紙内用